
空（うつほ）なる真実 ルーフェイア・シリーズ11

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空なる真実^{うつら} ルーフェイア・シリーズ11

【Nコード】

N2744H

【作者名】

こっこ

【あらすじ】

反王道、「無情という名の条理がある」とまで言われた、ひたすらビターな世界をどうぞ 夏の陽射しに見え隠れする過去、そして心。心優しい美少女が織り成す、異色の学園ファンタジー第11弾。このシリーズでは非常に珍しい、シルファ中心のほのぼの系です。振り回され気味のルーフェイアは、でも嬉しいとばかり？ “夜8時過ぎ” 毎日更新です。携帯版は1行毎の改行or空行です

Episode : 01

Sylpha

「タシユア、来週は空いているんだろう？」

「なんだか分厚い上に、難しそうな本を読んでいるタシユアに話しかけたが、返事はなかった。」

「空いて……いるのか？」

「はい？」

初めて気付いた様子で、やっと彼が顔を上げる。

「何か言いましたか？」

「タシユアにしては珍しく、本に夢中で全く聞いていなかったらしい。」

「そんなに、面白いのか？」

「ええ」

「彼が読んでいるのは、かなり古そうな本だった。皮で装丁され、金箔をうった飾り文字が、その標題を現している。」

「ネグイ……？」

「読んでみたが分からない。だいいちこの標題は、ケンディク語でもアヴァン語でもなさそうだった。」

「シルファ、それはアヴァン語読みです。これはローム語で、『ネゴリ記の解釈』ですよ」

「ネゴリ記？ そう言えば、聞いた覚えはあるが……」

「だがどこで聞いたかは、さっぱり思い出せない。」

「上級の資格を持っているのに、それでは困りますね。

ローム文明の歴史書であるネゴリ記の、これは解釈本ですよ。本家本元のネゴリ記がほとんど現存していないせいで、この時代の歴史はほとんどこれが公式になっているんです」

すらすらとタシユアは答えたが、私にはピンとこなかった。彼と違って、私は歴史は大の苦手だ。

「あなたも読んだほうが、いいのではないですか？」

「いや、遠慮する……」。

だがこの本、どうしたんだ？ 貴重なものに見えるが……」
どこかの大きな図書館にならわかるが、個人が持つような本にはとてもみえない。

「ルーフェイアが、持って来たのですよ」

「——あの子が？」

確かにかなりのワケありとは思っていたが、さすがにこれには驚く。

給料をもらっている上級傭兵の生徒ならまだともかく——いやそれでも、こんな本を持っているのは明らかにおかしいだろう。

不思議がる私に、タシユアは答えた。

「そう言えばシルファは、詳しいことは知りませんでしたね。

あの子は——ルーフェイアは、古くから続く家の跡取り娘なのですよ」

「あ、それで……」

いつぞやのドレスの件などと重なって、少し納得する。だがそれほど少女がこの学院にいるというのも、おかしい話だった。

「シエラ以外にも、行くところはあるだろうに」

「あなたが気にしてどうするのです。選んだのは本人ですよ」
タシユアの正論。

「事実ここでやれているのですから、問題ないと思いますがね」
「まあ確かにあの年で……きちんと、戦える子だからな……」

普通の学校ではなくM e Sに転入したという理由は、それしか思
い当たらない。

だがそれなら、いったいどこでそれを覚えたのか。
もしかするとタシユアと同じで……。

Episode : 02

「まあ、いろいろあるのでしょう。
どちらにせよ、私たちには関係ないことです」
言って彼は視線を本に戻した。

——確かに、そうだな。
ここの生徒は、たいていワケありだ。それを本人のいないところで追求するなど、もつてのほかだろう。

タシユアはよほど本が面白いのだろう、すでに夢中だった。
この難解な本のどこが面白いのか、まったく分からないが——少なくとも彼は嬉しそうだ。

邪魔するのも悪い気がして、私はさっきの質問を諦めた。
それに実を言えば、タシユアの予定が来週空いているのは知っている。確認したかっただけだ。

「タシユア、そうしたら私は……ちょっと出かけてくる」
「そうですか、行ってらっしゃい」
私がそう言っても、ちらっと顔を上げたただけだ。

ただ私も、今はこの方が良かった。
タシユアに気づかれたくないことがあるのだが、なにしろ彼は勘が鋭い。だがこうやって他のことに集中していてくれれば、それだけ気づかれずにすむだろう。

そのまま私は、そっと図書館を後にした。船着場でちょうど来ていた連絡船に乗り、ケンディクの町へ向かう。

連絡船は、いつもの休日ほどには混んでいなかった。ちょうど夏

期休暇中で、みんな適当に出かけているからだろう。

——何を、買おうか。

持って来たりリストを見ながら、まだ迷う。もっとも使えるお金は限られているから、結局は値段と相談だ。

ひとりでケンディクの町まで来たことは、ほとんどなかった。昔はたいてい先輩と一緒にだったし、今はタシユアと来ることが多い。なにより独りは、嫌いだ。

でも今回ばかりは、そんなことは言っていられなかった。ここでタシユアを誘ったりしたら、きつと気づかれてしまう。なにより、あと今日一日だけなのだから……。

そうこう考えているうちに、ついたらしい。

止まった連絡船から、急いで降りる。買うものの中には細かいものも多いから、急がないと夜になりそうだった。

「ええと……」

いちばん買いたいのは、服だ。

孤児が多い学院では、そういう子供たちにはきちんと、お小遣いをくれる。だがその額はそれほど多くはなくて、文房具などのこまごました物を買うと、ほとんど残らなかった。

当然服などそう簡単には買えなくて、みんな制服や先輩からもらったもので、間に合わせている。だから……。

上級傭兵になってから貰うようになった給料は、大部分は立てた予定のために使ってしまったけれど、まだ少しは残っている。

その中からやりくりしてでも、新しい服が欲しかった。
メインストリートを、ゆっくりと歩いていく。

——あゝ

ウィンドウに、素敵な服が飾られているのに気が付いて、立ち止まった。

水色のタンクトップに、薄紫の半袖ブラウス、それに白のスラックス。どれもシンプルなのに、とてもセンスがいい。

だが付けられている値段は、全く手が出なかった。もっと安いところへ行って、似たようなものを探すしかない。

「おや、うちに何か用かい？」

「え……？」

ため息をついて行こうとしたところへ、後ろから声をかけられた。

Episode : 03

「どれか、気に入ったものでも？」

「いえ、その……」

男の人で、この店のオーナーらしい。

——どうしよう。

欲しいのは確かだが、買うわけにはいかなかった。ここでこれだけ使ってしまったら、他のものが買えなくなってしまう。でも、いきなり断るのも……。

「あれ、もしかして君、シルファって言わないかな？」

「どうして、それを……？」

この人とは、初対面だ。だいいち大人の男の人など、フォセ先輩以外は学院の教官しか知らない。

けどこの人は、そんなことはお構いなしだった。

「そうかそうか、やっぱりなあ。うちのミルから聞いちゃいたけど、こうして見るとほんとに美人さんだ」

「ミル……？」

ミルと言えば確か、ルーフェイアと同じクラスの仲良しだ。

「あれ、知らないかい？」

「ミルドレッドでしたら……知ってますが……」

よく私が作ったケーキを、ルーフェイアと一緒に美味しそうに食べている。

「そうそう、それがうちの娘だね。学校から帰って来ちゃ、よく君

の話をしてくれるんだよ」

「そう、なんですか……」

そういえば彼女の自宅はブティックで、お父さんがデザイナーだと言っのを、何かで聞いたかもしれない。

それにしても私のことなど、何を話しているんだろう？

「ともかく、せっかく来たんだ。あがつていきなさい」

「あ、はい……」

上手く断れなくて、中へと連れていかれる。

「いやあ、夏休みになるとミルのやつ、アヴァンへ行きっぱなしでね。静かなのは確かなんだが、物足りないんだよ」

「はあ……」

だとすると、私はミルの代わりなんだろうか？

ともかく店の奥の部屋へと、私は上がらされた。お菓子とお茶とが、出される。

「いつもうちのミルが世話になって、悪いねえ。」

それで、少し時間はあるかい？」

「え、ええ……」

なんだかおかしな成り行きだ。

なにより、既に時間は取っているような……。

「あれ、急いでたかい？」

「いえ……」

確かに買いたいものはたくさんあるけれど、大急ぎと言うわけでもなかった。

「そうかそうか、それじゃちょっと、ここで待っていてくれるかな。せっかくだから、見てもらいたい物があるんだ」

言うが早いが、ミルのお父さんは奥へと引つ込んだ。
ひとり、応接室に取り残される。

——どう、しよう。

どうにか話をして、おいとましないと……。

けどどう言ったらいいのか、まったく思い浮かばなかった。タシユアはこういうことを切り抜けるのが上手いが、私はそもそも人と話すこと自体、下手だ。

どうしたらいいかと考え込んでいるうち、意外に早くお父さんは戻ってきた。しかも両手に、抱えきれないほどの服を持っている。

「それは……？」

まさか、買えと言うのだろうか？

でも本当に、ブランド物を買えるほどのお金などないし……。

困りきっておろおろしていると、よほどそれが可笑しかったのか、ミルのお父さんが笑った。

Episode : 04

「ああ、すまないすまない。ちゃんと言わなかったからね。気にいったのがあったら、ぜひ持っていてくれないかな？ なにしろこの通り、溜まって困ってしまったてるんだ」

「え……？」

あまりにも唐突で、言われたことが良く飲み込めない。

「あの……？？」

この人がまた、笑った。

「だからね、ここから好きなものを持って行きなさい。幾つでもいいよ」

「——えっ？」

目が点になるとはこのことだ。

ミルのお父さんが持っている服の数は、決して少なくない。しかも店先に飾ってあったものから考えて、かなり値も張るはずだ。それを、あつさりと「持っていきなさい」だなんて……。

「けど、その、高いもの……ですし……」

「遠慮して偉いなあ。でも本当に、持っていていいんだよ。処分に困ってるくらいだからね。」

——うーん、これなんか似合うかな？」

「あ……」

お父さんが選んでくれた服に、思わず視線が釘付けになった。さっきウィンドウのところで見ていたものに似てるけど、もっとセンスがいい。

「うんうん、思った通りだ。背が高いからこのモデルサイズで、そ

のまま大丈夫だね」

「モデルサイズ……？」

不思議に思っていると、ミルのお父さんが説明してくれた。

なんでも最初に試作品？を作る時は、モデルさんが着ることを考えて、普通より高い身長に合わせて作るらしい。

そしてここにあるのは、そうやって作ったものの一部なのだそうだ。

「モデルの子に売ったりあげたりってことも、多いんだけどね。ただ私は取つとくのが好きなもんだから、この通りなんだ。

あ、これも良さそうだねえ」

話をしながら、幾つか選び出してくれる。

「ほら、この辺なら好みじゃないかな？ サイズも良さそうだしね」
「でも……」

勝手に話が進んでしまったが、ミルのお父さんが手にしているのは、そのあたりの安物ではない。

それどころか、普通だったら絶対に買えないようなもので……。けどお父さんは、選び出した服を私に持たせた。

「着てあげないと、服も可哀想だしね。

だから、持っていきなさい」

こう言われてしまつては、もう断れなかった。

「——すみません」

「いいんだよ。

さあ、包んでおいてあげるから、他の買い物でもしておいで」
優しく外へと促される。

「本当にすみません、ありがとうございます」

それしか言えない私に、ミルのお父さんは言った。

「いや……このくらいしか出来なくて、申し訳ないよ。君たちが大変なのは、分かっているのに」

それから、少しだけ笑って言った。

「何かあったら、いつでも来て構わないよ。大歓迎だ。服は余って困っているしね。」

さ、早くしないと日が暮れるよ」

「——はい」

何度も頭を下げながら、私は店を後にした。

Episode: 05

Tasha Side

ルーフェイアが持ってきた本は、タシユアにとって読み応えのあるものだった。

なにしろあの有名な歴史書『ネゴリ記の解釈』の、それも初版本だ。

話では先日シュマーの実家で発見——こんな貴重なものを埋もれさせると思う——されたとかで、ルーフェイアが読みたがったために、こちらまで送られてきたらしい。

しかもそれをわざわざ、「読み終わったから」とタシユアに貸しに来たのだ。

彼のほうも、こんな貴重な本を手にする機会を逃がすわけがなく、素直に？借りたという次第だった。

——もつともその際、ルーフェイアが泣かされたのだが。

よく毒舌の餌食になっているルーフェイアは、すんなり受け取ってもらえるとは思っていなかったらしい。

「ありがとうございます」と礼を言ったタシユアに対して、露骨なほどに驚いた表情を見せ、すかさず突っ込まれたのだ。

ただそれはそれとして、この本が興味深いことには変わらない。

（後で、現代版とでも読み合わせてみますか）

記憶違いでなければ、この本は何度が改訂を重ねていたはずだ。だとすれば、当時と今とは違う解釈が載っている可能性もある。

現代版はこの図書館にあったはずだから、あとで行けば見つかる

るだろう。何よりあの手の本を、好んで借りる人間が居ると思えない。

シルファは結局何も訊かないまま、どこかへと出かけてしまった。もともとが、大したことではなかったらしい。

それからふと気付く。

（そういえば最近、彼女はよく独りで出かけますね）

シルファは基本的に、ひとりであることを嫌う。生まれてすぐに両親を亡くし、親戚中をたらいまわしにされたせいで、ひとりになることが捨てられることと結びついてしまったらしい。

まだ自力で生きていけない幼児にとって、特定の庇護者がいないうえ、いつ捨てられるかわからないという状況は、恐怖でしかない。だからそれを避けたい一心で人の姿を常に求めるようになり、併せてトラウマ化したのだろう。

それなのにこのところ彼女は、タシユアなしで出かけることが多かった。

（まあ何か、企んでいるようですが）

シルファが黙っているので追求せずにいるが、こっさり何かしているのは間違いない。

（今度はなんですかね？）

じつを言えばこういうことは、今に始まった話ではない。案外あれでシルファは、理屈に合わない妙なことをするのだ。

だが、心配はしていなかった。どうせ企んでいるといっても、何か他愛ないことで……大抵はちょっと驚かそうというだけだ。

いつぞやはさすがに啞然とさせられたが、それ以外はいつも「可

愛い」の範囲で済んでいる。

そしてそれに乗った振りをするのは、タシユアは嫌いではなかった。

そのうち準備が整えば、シルファのほうから何か言ってくるだろう——そう思いながら、タシユアはまた貴重な本に視線を落とした。

Episode : 06

Sylpha

出先から戻ってきた私は、手にしたものをひとつひとつ確認していた。

ケンデイクからアヴァンまでの船の切符、アヴァンからワサルまでの列車の切符……それに途中途中のホテルの予約。どれも間違いない。

タシユアに気が付かれないように私は、こっそり旅行の計画を立てていた。

以前と違い、去年からは上級傭兵になって、それなりの給料をもらっている。それを毎月、これのためにほとんど貯めこんでいたのだ。

そしてやっと、旅行に行けるくらい貯まった。

——明日言ったら、どんな顔をするだろう？

出発にはまだ間があるが、やはり出かけるとなれば準備が要る。タシユアはいつも大した荷物を持って出ないけれど、それでもなにか買うものが出るかもしれない。そう考えると、まさか当日に言うわけにもいかなかった。

自分でも久しぶりに、心が弾んでいるのがわかる。

実を言えばこういう旅行は——初めてだ。

産まれてすぐ両親が亡くなり、そのあと親戚を次々とたらい回しにされて育った私は、とてもそんな環境にはなかった。

その後も開校と同時にこの学院へ入学して、あとは寮生活だ。夏のキャンプ程度ならともかく、個人的な旅行はしたことがない。だから、計画するだけでもとても楽しかった。

好きなところへ、自由に行ける。

——それも、タシユアと。

行きたいところはたくさんあった。歴史の古いアヴァン、有名なムルデ大峡谷、豊かなサルトウス大森林、神秘と言われるノネ湖、ワサール南部のリユヌ海岸……。

服も水着もバッグも新調して、あとは詰めるばかりだ。

「……」

うきうきしながらベッドに腰掛けて、何度も手にしたガイドブックをまた開いた。

どのページにもお勧めの場所やお店がびっしりと書きこまれている。

食事はその時の気分が変わるだろうから、幾つものレストランを暗記していた。あとはだから、当日のタシユア次第だ。

彼は好き嫌いはないが、案外食べる物にはうるさい。それしかないればともかく、状況が許すならそれなりのもののほうを喜ぶのだ。

——どこに、なるんだろうな？

それを想像するのも楽しかった。どこかカフェのようなところもいいたろうし、ちゃんとしたレストランもいいたろうし……。

しばらくガイドブックを眺めてから、顔を上げて時計を見る。

もう、いいだろう。

時計の針は、夕食には遅めの時間を差していた。これなら間違いなく、タシユアはひとりで済ませてしまっているはずだ。

普段はともかく、今はなるべくタシユアを顔を合わせたくなかった。せっかく驚かせようと思って、それもおおむね成功しているのに、こんなところで気付かれてしまったらつまらない。

ルーフェイアが持ってきたという本に夢中で少々勘が鈍っているようだが、それでも用心にこしたことはなかった。

ともかく明日まで気付かれなければいいのだ。だったらいちばんいい方法は、顔を合わせないことだろう。

明日旅行のことを聞いてタシユアがどんな顔をするか、それを想像しながら、私は夕食を食べに食堂へと向かった。

Episode:07

明けて翌日。

「おや、おはようございます」

だいたいの見当をつけて食堂へ行くと、案の定タシユアが朝食を食べている最中だった。

「まだその本を……読んでいるのか？」

彼の手元に例の分厚い本があるのに気付いて、さすがに呆れる。

「もう少しですから、出かける前に一通り読み終えようと思いましたが。」

貴重な本ですからね、さすがに持ち歩くわけにはいきませんし」

「え……」

あれだけ慎重にしていたのに、気付かれてしまったのだろうか？

「その、出かけるって……どこへだ？」

なるべくさりげないように、尋ねる。

「ええ、ちょっと。」

それよりシルファ、朝食を取ってきてはどうです？」

「あ、ああ」

あまり突っ込んで尋ねるわけにもいかず、私は一旦朝食を取りに行った。

適当に揃えて、タシユアのところへ戻る。

「——シルファ、どうかしたのですか？」

タシユアの方を窺いながら食べていたのがまずかったのだろう、

すかさず気付いてそう言われた。

「い、いや、なんでもない。」

それより、本当にどこへ行くんだ？」

「少々気になることがあります。」

——おや、もうこんな時間ですか」

時計を見たタシユアが、本を手ですつと立ち上がった。

「どうしたんだ……？」

「今出ないと、ケンデイクで乗り遅れますからね。」

そうそうシルファ、しばらく留守にしますので」

「——えっ?!」

「出かける」というから、てっきり旅行の計画に気付いたのかと思ったが、まったく違うことだったらしい。

いや、それよりも、今からしばらく留守では……！

「た、タシユア、確か……しばらくは空いてるんじゃない、なかったのか……?!」

「ええ。任務の夏休み当番は、もう終わりましたしね。もっともだからこそ、簡単に出かけられるわけですが」

完全に見当違いの言葉が帰ってきた。

「——シルファ、本当に大丈夫ですか？」

多分そうとうろたえた顔をしていたのだろう。タシユアが心配げに尋ねてくる。

「あ、ああ……」

私はそう答えるよりほかなかった。

「——? それならいいのですが。」

では、これで。乗り遅れるわけにもいきませんので」

それだけ言い残して彼が食堂を後にし、ただ呆然とする私だけが取り残される。

そして出かけるまでの数日間、私はおろおろしながら、タシユアからの連絡を待つばかりだった。

Episode : 08

Tasha Side

ケンデイクを出て4日後、タシユアは既にロデステイオの首都、ベルデナードのホテルにいた。

（思っていたより、時間がかかりますかね……？）

何人か人と会いたかったのだが、その誰もが連絡はついたものの簡単には時間が取れず、予定が繰り延べになっている。

加えてここへ来てみて、調べたいことも出たため、余計に時間がかかりそうだった。

タシユアはこの街へ、遊びに来たわけではない。

ベルデナードにはカリクトウス商会という名の、武器商としては老舗の店がある。そしてシルファのフルネームは、シルファ「カリクトウス」。

とうぜん関係がある。なにしろこの店はもともと、シルファの両親のものだったのだ。

だが両親は彼女が産まれてすぐに事故死し——店は伯母夫婦の手に渡って、それきりだった。

その上シルファは前当主の娘ということで冷遇され、親戚中をたらい回しにされた挙句、行き場をなくして学院へと来たのだ。

この話を彼女から聞いたのは5年前。それからずっと、彼は機会があればそれをシルファの手に返そうと調べ続けていた。

なにしろ彼女自身の口から「両親は殺されたらしい」との言葉を聞いているし、そうでなくてもこの店は本来シルファのものだ。それを横取りしてのうのうとしているなど、タシユアは許す気はない。

そしてようやく——手がかりを得た。

だが自分がこうしていることをシルファに告げるつもりは、ない。
(その時になれば、分かることですね)
何よりあのシルファのことだ。告げれば「いらない、かまわない」と言い張るだろう。それだけこの件については、シルファは傷ついている。それなら黙っておいて、取り返せるその時に告げるのがいちばんだ。

それからふと、タシユアは思い出した。

(——連絡しておきますか)

出かけると言った時、シルファはずいぶんうろたえていた。恐らくひとりになるのが嫌だったのだろう。

本来なら誰か大人に護られる時期に、シルファは冷遇された。落ちつく間もなく親戚中を次々に預けかえられ、追い出されまいとびくびくしながら過ごしたのだ。

それは……今も独りを極端に嫌うという形で、やはり傷になっている。

時計を見ると、ケンディクはちょうど午前中だった。それにこの時間なら、誤って起こしてしまうこともないだろう。

備え付けの通話機——通話石を扱いやすくしたもの——を取って、フロントへ繋ぐ。

遠距離で幾つも通話網をまたぐため、手間取ったのだろう。意外に待たされたあと、ようやくシルファ本人が出た。

「タシユア……？」

不安げな声が聞こえる。やはりひとりは嫌だったらしい。

これでなにも言わずに帰るのを遅らせては、余計に不安がらせる

ところだっ たらう。

「大丈夫ですよ。」

それよりシルファ、予定が少々延びました。戻るのは——そうですね、あと2週間ほどかかると思っています」

「え、そんなに……?!」

また通話機の方こうで、シルファがうるたえる。

「——なにかあったのですか？」

「い、いや、なにもないんだが……」

口ではそう言っているが、やはりかなりこたえているようだ。

「それならいいのですが。」

なるべく早く片付けて、戻るつもりですが——なんならシルファも、旅行にでも行ってきてはどうです？ 1週間もあれば、かなりゆっくりできるでしょうから」

「——!!」

言った瞬間けたたましい音を立てて通話が切れ、タシユアは顔をしかめた。

「まったく。シルファも切り方くらい知っているでしょうに……」

それから思いなおす。わざとそんなことをする、シルファではない。恐らくうつかり操作を間違えたのだろう。

（案外そそっかしいですね）

と、ドアがノックされた。

「どなたです？」

「カリクトウス家の執事を務めている、ハーケン・ビュクゼと申します。どうやら時間が取れましたので、取り急ぎこちらまで伺ったのですが……」

こちらへ来てから連絡を取った人物のひとりで、誰よりも会って話をしたかった相手だ。

「こちらこそ、お忙しいところをありがとうございます。今開けますので」

だがいちおう覗き窓から外を見、執事ひとりなのを確認する。ドアを開けると、辺りに気を配るようにしながら執事は部屋に入ってきた。

その背後をもういちど確認して——万が一尾けられているということもある——から、タシユアはドアを閉める。

「押しかけまして申し訳ありません。

シルファお嬢様のことで、お話があるとのことでしたが」

「ええ。ですがまず、おかけください」

言ってタシユアも椅子に腰掛け、2人の話が始まった。

Episode:09

Sylpha

タシユアは結局、予定の日までに戻ってこなかった。

——どうしよう。

どうしてもダメなら、すべてキャンセルしなくてはならない。
でも……。

「もしかして」という思いもあって、出発当日になってもまだ私は、決心がつかないでいた。

タシユアのことだ。何食わぬ顔で戻ってくるかもしれない。いざとなったら、現地で合流したっていい。

荷物を詰め終わったバッグを見ながら考え込んでいると、通話石が鳴った。

きつと、タシユアだ。

慌てて出ると、学院の交換の女性の声が聞こえた。

「12年Aクラスのシルファ＝カリクトウスですね？」

「そうだが……」

答えると交換の女性は、「タシユア＝リュウローンからです」とだけ言い、相手が変わった。

「タシユア……？」

つい不安げな声になる。

今どこにいるのだろう？

なにより、ちゃんと旅行に行けるんだろうか……？

「大丈夫ですよ」

私の声音を読み取ったらしく、タシユアがそう言った。
少しだけほっとする。

だが次に聞いたのは、まったく予想外のものだった。

「それよりシルファ、予定が少々延びました」
自分の耳を疑う。

数日がまた延びたと言うことは……だが、「少々」なのだから……。

「戻るのはい——そうですね、あと1週間ほどかかると思います」

「え、そんなに……?!」
考えるより前に、その言葉が口をついた。

——どうしよう。

これじゃ絶対に旅行は……。

「なにかあったのですか？」

「い、いや、なにもないんだが……」

そう答えるのが、精一杯だ。

タシユアのほうはそんなことには構わず、言葉を続ける。

「それならいいのですが。」

なるべく早く片付けて、戻るつもりですが——なんならシルファも、旅行にでも行ってきてはどうです？

2週間もあれば、かなりゆっくりにできるでしょうから」

「——!!」

瞬間私は通話石を、叩きつけるようにして切っていた。
人の気も知らないで、勝手にどこかへ出かけた拳句に……!!

「タシユアのばかつ！」

切った通話石に向かってそう言い捨てると、私はバッグを持って部屋を飛び出した。

——もういい！

タシユアなんて知るものか。

いつだってそうだ。タシユアは好き勝手に自分のしたいことをして。だったら旅行なんて、私ひとりで——。

Episode : 10

渡り廊下を過ぎ、学院の廊下を急ぎ足で抜ける。

「し、シルファ、血相変えてどこへ行くんだ……？」

「旅行です！」

途中で話しかけてきた教官にそうとだけ答える。

「りよ、旅行って、どこへだ？」

「書類見て下さい！」

ちゃんと事前に提出してあるのだ。ごちゃごちゃ言われる筋合いはない。だいいちこのために、任務の当番も何もかも、すべて先に済ませたのだ。

そんなことさえ教官のくせに覚えていないのかと、また腹が立つ。これでよく、生徒の面倒などみられたものだ。

「——あの、先輩？」

途中でまた、見知った顔に出くわす。

「どう、なさったんですか……？」

柔らかな金髪に、澄んだ碧い瞳。ヒヨコのように懐いている後輩が、不思議そうな表情で私を見ていた。

「えっと、あの……？」

言葉が出てこないらしく、困ったようなしぐさを見せる。

そのとき、不意に思いついた。

「ルーフェイア、予定は空いているな！」

「え、あ、は、はい……」

目をしばたいたいて、少女が答える。

「だったら旅行へ行くぞ！」

どうせ1人分余るのだ。なら誰か代わりに連れて行っても、構わないはずだ。

「え、え……?!」

意味がよく分からなかったのか、ルーフェイアがきよとした表情になる。

「旅行へ行くんだ！」

「は、はいっ!!」

言い切ると、慌ててこの子が返事をした。

「ほら、早くっ！」

連絡船が出てしまったら、その先で乗り遅れる。

「あ、あの、そしたらあの、荷物……」

「ん? —— あ、そうか」

確かに切符やなにかは全部私が持っているが、この子も着替えるには要るだろう。

いくらなんでも、手ぶらというのはムリだ。

「じゃあ正門のところにいるから、早く荷物を持ってくるといい」

「あのっ、すぐ、戻りますから！」

身を翻すようにして、金髪の後輩が寮のほうへと駆け出す。その姿を見送りながら、私はまっすぐ玄関まで行った。

おだやかな朝の陽射しに、また腹が立ってくる。
本当ならいまごろ、2人で出ていたはずなのだ。

「ばかっ！」

姿のない彼に向かって、言い放つ。
タシユアなんか、タシユアなんか――！

Episode : 11

R u f e i r

7月も終わりになって、あたしはアヴァンにあるシュマーの施設から学院へと戻ってきていた。気になっていた医療チェックの結果も全部問題なしで、ひとつ肩の荷が下りた気分だ。

シュマー家は特異体質の塊で、普通の薬は効果がなかったり逆にヘンな副作用を出したり、やっと使える薬がわかってもちまちま抵抗力をつけてしまったり、ややこしいことが多かった。

もちろん普通の病院じゃ、手に負えない。

——感染しないのはいいんだけどな。

同じ特異体質でもこの点だけは桁外れで、普通ならほぼ100%が死んでしまうような病気も撃退してくれる。

ともかくそんなこんなで、シュマーは独自の医療機関でのチェックが欠かせなかった。

でも、それより……。

シルファ先輩の姿を探す。

実は出かける前、にシルファ先輩にお土産を持って帰る約束をしていたのだけど、今朝いちばんに届いたと言われたのだ。

向こうのシェフが見繕ってくれた「上等なベリー」だから、先輩も気に入ってくれると思うんだけど……。

「あれ、ルーフェイア、戻ったのかい？」

「うん」

帰って来た昨日は、うまく会えなかったシーモアとナティエスに、

ばったりと廊下で会う。

「もう、朝ご飯食べてきたんだ？ どだった？」

「おいしかったけど……？」

「違う違う、今日のメニュー」

「えっと……？」

確かなんか、鳥のお肉とサラダだったとは思っただけど。

「ナティ、ルーフェイアに聞いただけムダだって。行った方が早いさ」

「あ、そっか」

なんかひどいことを言われた気がする。

「んじゃね、ちょっと行ってくる」

「あ……待って……」

慌てて呼び止めた。

「ねえ、シルファ先輩見なかった？」

2人が行ってしまう前に、急いで訊きたいことを口にする。

「シルファ先輩？ 今日はちょっと見てないね」

「そう……」

もう朝食を済ませて、どこかへ行ってしまったんだろうか？

それからもうひとつ尋ねる。

「イマドも……いないよね？」

なぜかナティエスとシーモアが、顔を見合わせて笑った。

「イマド、毎年夏休みはアヴァン行きっぱなしだしね」

「で、休み中は叔父さんここで、めいっぱいこき使われるって嘆いてたな」

去年もそうだったけどイマド、本当にぎりぎりまで戻ってこない

みたいだ。

「そう……なんだ……」

なんだか少し落ちこむ。

そんなあたしを見て、またシーモアとナティエスは笑った。

「ほらほら、そんな顔しなさんな。どうせあとひと月ちょっと
もすりゃ、イヤってほど毎日顔を会わせるんじゃないか」

「そうそう、すぐだってば」

「うん……」

励ましてはもらったものの、いまひとつ気は軽くない。

Episode:12

「やれやれ、こりやすっかりだね。」

「しゃあない、明日でも景気付けにさ、どっか行くかい？」

「あ、それいいな。しばらくケンディク行ってないし」

シーモアの提案に、ナティエスが賛成する。

「行つてなんか、美味しいもの食べよ」

——つていけない、あたしたち朝ご飯食べるんだっけ」

「やば、急がないと食いつばぐれちまうよ」

「あ、行つてらっしゃい」

急いで食堂のほうへ駆け出した2人を見送ってから、あたしは周囲を見回した。

——シルファ先輩、寮かな？

でもこの時間だと、いるとは思えなかった。訓練だつたり補習だつたりで、夏休みでも昼間は、みんなたいてい教室や訓練島だ。

廊下の端で少し考えて、まずいちばん近い図書館へ、行くことにする。

シルファ先輩はそれほどでもないけど、タシユア先輩はとても本が好きだ。だからたいてい図書館にいて、そこにシルファ先輩も一緒にいることが多い。

それで見つからなかったら、寮へ戻ってみようと思った。
その時。

「え、あれ……？」

思わずつぶやく。向こうから歩いてくるの、シルファ先輩みたい

だ。

だけどもおだやかなのに、なんか今日はとても急いでて——途中で教官に話しかけられても、立ち止まりもしなかった。

——どうしちゃったんだろう？

きっと、何かあったんだろうけど……。

それからいくら経たないうちに、先輩があたしの傍へ来た。

「——あの、先輩？」

なんだか凄い勢いで、やっとそれだけ声をかける。

そのままだったら行き過ぎそうだった先輩が、あたしに気がついて立ち止まってくれた。

でも振り向いたその表情に、なんだか鬼気迫るものがある。

「どう、なさったんですか……？」

「ルーフェイア、予定は空いているな！」

鋭く言われて、その場にあたしは立ちすくんだ。

「え、あ、は、はい……」

「だったら旅行へ行くぞ！」

「え……?!」

あんまりにも唐突で、どうしていいか分からなくなる。

けど今日のシルファ先輩は、信じられないくらい強引だった。

「旅行へ行くんだ！」

「は、はいっ!!」

もうびっくりして、思わず返事をする。

「ほら、早くっ！」

「あ、あの、そしたらあの、荷物……」

うつたえながらどうにかそう言つと、ようやく先輩がトーンを下げてくれた。

「ん？——あ、そうか」

先輩の表情が少しおちついて、ほっとする。
でも、それだけだった。

「正門のところにいるから、早く荷物を持ってくるといい」
有無を言わさない口調。

「あのっ、すぐ、戻りますから！」

これ以上はないっていうくらいあたしは慌てて、寮へと身を翻した。

——シルファ先輩、いったいどうしちゃったんだろう？

何かあったっていうことだけは、分かるんだけど……。

Episode : 13

ともかく考えてるヒマもなさそうで、部屋へ飛び込むとあたしは急いでクローゼットから着替えを出した。

2・3日分の下着と着替えと……あとはいざとなれば、どこかで買えば済むはずだ。それにいつもまとめてあるツールキットと戦闘服、タオルと現金とカードを放りこんで終わりにする。

あとはもう急げるだけ急いで、案内板のところへと戻った。
シルファ先輩の姿が見える。

「あの、すみません、お待たせして……」

「用事が終わったなら、行くぞ」

それだけ言って先輩が歩き出して、あたしはまた慌てて後ろに付いていった。

——ほんとに、どうしちゃったんだろう？

普段からじゃ考えられないくらい、シルファ先輩の機嫌が悪い。

「ほら、早く」

「は、はいっ」

言われるとおり、急いで連絡船に乗り込む。

「あの、どこに……」

「どこでもいい」

座る場所を訊いても、そんな感じだった。

結局空いている席へ、そっと座る。シルファ先輩も隣に座って、それだけはほっとした。

船が動き出す。昨日帰ってきたばかりなのにもう出かけるなんて、なんだかおかしい気分だった。

湾を出て、外海が見えてくる。高くなった陽が遠い海面で、きらきらと踊っていた。

——どこ、行くんだろう。

ケンデイクへ向かってる以上、そこから列車でどこかへ行くんだろうけど……。

けどとてもじゃないけど、先輩に訊けるような雰囲気じゃない。

ぼんやりいろんなことを考えているうち、船が止まって、波止場へと降りた。

青い風が、流れていく。

夏色の海。朝色の空。

でも先輩は、それさえ目に入っていないみたいだ。

「行くぞ」

「は、はい」

学院の時と同じで、ただ真っ直ぐに歩いていく。

どこへ訊きたかったけど、訊いたら怒られそうだ。>

「あの……」

でも途中でさすがに不安になって、声をかける。

「なんだ？」

「え、あ、あの、えっと……なんでも、ないです……」

やっぱりできるのは、後ろを付いてくことだけみたいだ。

「そうか」

先輩の方は当たり前だけど、行き先が分かってるんだろう。迷いのない足取りだ

でも方角から、やっぱり列車に乗るらしい。だったら行き先はたぶん、客船の出てるアヴァン方面だ。

タベそっちのほうから帰ってきたのに、ホントに同じ場所へ、また行くことになりそうだった。

Episode : 14

——あ、でも、少し違うかな？

この間には行きも帰りもシユマーの高速艇だった。

そう思うと、ちよつと楽しくなる。この列車に乗ったのは、イマ
ドと一緒に学院へ来たときが初めてだった。

あれ以来、あたしの生活は一変した。

本当に、ぜつたい無理だと思つてたことが叶つて、夢みたいで…。

と、先輩が立ち止まった。

「あの……？」

「チケットだ」

それだけ言つて、先輩が列車の切符を差し出す。

行き先は、首都のイグニールだった。出発時間はお昼過ぎだから、
まだ少し先だ。

「——先輩」

「なんだ？」

少しひるんだけど、今を逃したらさすがに後がないような気がし
て、勇気を出してたずねる。

「あの、連絡だけ……してきて、いいですか？」

「え？」

——あ！

先輩が、初めて気づいたという表情になった。

「その……来て、平気なのか？」

——えっと。

平気じゃなかったら、付いて来れないと、思っただけど……。

「えっと、あの、行くのは平気です。

でも……あの、一応連絡しないと、いけないと思って……」

「学院にか？ それなら、私から言おう。そのほうがいいだろうか」

先輩、少しいつもに戻ったみたいだ。

「あの、そしたらあたし、知り合いのほうに連絡してきます」

どこへはともかくとして、いなくなることで自体言わずに行方不明になったら、実家から捜索隊が出されかねない。

冗談抜きで、それだけはやめて欲しかった。

「——ルーフエイア」

先輩が少し視線をそらせて、訊いてきた。

「本当に……いいのか？」

「はい！」

これだけは、はっきりと答える。

どこへ行くのか、分からないけど。でもどこかへ旅行できる。それだけで嬉しい。

「——そうか」

先輩が、安心したように微笑んだ。

「連絡してくるといい。まだ出発までには時間があるから、そうだな——」

「あ、でも、すぐ終わりますから」

本当に連絡するだけだから、いくらもかからない。

「分かった。そうしたら、もう一度ここで落ち合って、少しゆくりしてから昼食にしよう」

「了解です」

なんだかうきうきしながら、あたしは連絡するためにすぐ近くの、シューマーの隠れ屋へ向かった。

Episode:15

Sylpha

旅は順調で3日後の午後、私たちは海を渡ってアヴァンに着いた。隣でルーフエイアが、大人しいながらもしゃいでいる。

——悪いことをしたな。

まさに、無理やり連れてきたも同然だ。よほど見境を無くしていたらしい。

ただ幸い本人は、気にしていないようだった。むしろ喜んでいる。「先輩、どこへ行くんですか？」

普段は顔も上げず、なかなか喋らない子だが、今日はにこにこ私を見て話しかけていた。

「先にホテルへ行くか？ 荷物が邪魔だろう」

地図を開きながら答える。アヴァンは何度か来たことはあるが、地理に精通していると言うほどではない。

「どこのホテルですか？」

「オレオル・ホテルだから……」

「オレオルビーチのところの……ですか？」

さらりとこの子が答えた。意外にもアヴァンには詳しいようだ。

「ああ、そうだ」

「……」

どうやら知っているホテル——この年で知っていること自体不思議だが——だったらしく、嬉しそうにとことこと歩き出す。

ホテルまでは波止場から、10分ちよつとのところだった。アヴ

アンでは大きな方に入るだけあって、広くて洒落たロビーになっている。軽食も頼めるようだ。

「その辺りに、座って待っててくれ。チェックインしてくる」

「はい」

華奢なこの子をソファに座らせ、フロントへ向かう。

きちんとした制服に身を包んだ男性が、私を一瞥したあと、にこやかな営業スマイルを見せた。

「今日予約した者なんだが……」

「お名前をお伺いしてよろしいでしょうか？」

言われるままに自分の名を告げると、フロントの人の表情が少し変わった。なにやら端末を操作した後、奥へ引っ込んでしまい、しばらく待たされる。

「……先輩？」

様子を察したらしいルーフェイアが、隣へ来た。

「すまない、ちょっと待たされて——」

そこへ、フロントの人が戻ってきた。

「大変申し訳ありません、オーバーブックのためお部屋がご用意できません」

「え？」

何を言われたのか分からず、考え込む。

そつえば確か、ホテルはキャンセルを見込んで多く予約を取るために部屋が足りなくなること、そう言った気がするが……。

「——部屋が、ないのか？」

「大変申し訳ございません」

冗談ではなかった。こっちはきちんと予約も取っているし、そも

そも泊まるところがなくては困る。

こんな時、タシユアなら……。

そこまで考えて、やめた。思い出すと腹がたってくる。

「部屋を振り替えて、いただけないんですか？」

意外にも、隣にいたルーフェアが的確な反応を返した。

「ぜんぶ埋まつてゐるってことは、ないと思うんですけど……」

「お待ちいただければ、他のホテルを手配致しますが」

どうあっても、ここには泊まれないようだった。

かといってこれから探すのではいつになるか分からないし、そもそもこのシーズンで、きちんとしたホテルに空きがあるかどうか。

私ひとりならまだそれでもいいが、ルーフェアまで巻き込むわけには行かない。

どうしたものかと悩んでいると、隣でこの子が、不意に毅然とした表情になった。

「——分かりました」

言っただけで、自分のウェストポーチをあさり始める。

Episode:16

「こっちは、空いてますよね？　それもダメなら……他へ、回りますけど」

よく分からないことを言いながら彼女が差し出したのは、1枚のカードだった。

何で出来ているのか完全な透明で、内部に小さな記録石と、1本の金のラインとがある。だが、文字などは一切なかった。

「これが何か？」

「ご存知、ないですか？」

が、偶然奥から出てきた別のフロント係が、そのカードを見て血相を変えた。手に持っていた書類を、放り出す勢いで駆け寄ってくる。

「君、このカードを知らんのか！」

応対していた男性を叱って下がらせた後、彼は私たち——正確にはルーフェイア——の方へと向き直った。

「大変失礼いたしました」

「えっと、チエック、お願いします」

カードを受け取ったホテルマンが、再度青くなる。

「ぐ、グレイス様?!」

あり得ない存在に遭遇したような、そんな慌てぶり。

ふと、思い出す。確かタシユアは、ルーフェイアのことを「代々続く家の跡取り娘」と、言ってなかっただろうか？

あの時はそんなものと聞き流したが、その家というのは、相当のものだよっだ。

「あの、あんまり大きい声で……言わないで……」

「申し訳ございません」

傍から見ていても既に、お客とホテルマンというより、屋敷の主人と使用人、という感じに近かった。

当然、私は蚊帳の外なわけだが……。

ただ、どこまでもルーフェイアが丁寧なのが、見ていて可笑しかった。高飛車にならないのは、いかにもこの子らしい。

「例のお部屋でよろしいでしょうか？」

「あ、えっと……」

この子が私の顔を見る。

「あの、先輩、えっと……どうしましょう？」

どうしようと訊かれても、実際には私も、どんな部屋が分からないのだが。

とはいえ、この子を困らせるのも可哀想だった。

「ルーフェイアがいいと思うようにしてくれ。助かる」

これからホテル探しをすることを思えば、泊まれるだけでも十分だ。ましてやこの扱いで、文句があるわけもなかった。

答えを聞いて、ルーフェイアが安心した表情になる。

「あの、学校の先輩と一緒になので、そういうふう……できますか？」

「かしこまりました」

別のホテルマン——といっても、きちんとしたスーツに蝶ネクタイ——が呼ばれて、私たちに一礼する。荷物の方は、専門の運ぶ人が預かった。

「館内をご案内致します」

「お願い、しますね」

ルーフエアはにこにこしているが、私の方は戸惑うばかりだ。

そのまま成り行きで一通りホテル内を案内され、昇降台へと乗り、別館らしいところのかなり上の方の階へ着いた。

「こちらのお部屋をお使い下さい」

ドアの内側の様子に呆然とする。

——普通に泊まったら、いったい幾らするんだろう？

そのくらい、立派だった。寝室や応接室、食堂など何部屋にも分かれていて、ベッドも大きいサイズだし、どの家具も相当の高級品だ。

その中でホテルの人が、いろいろと中の備品や呼び出し等について説明していた。

ルーフエアは慣れているのだろう。すでにちょこんと座って、用意してもらった飲み物を手にしている。

Episode : 17

「先輩？」

その声で、我に返った。

慌てて告げる。

「あの、申し訳ないんですが……とてもこんな部屋に、泊まる予算は……」

「そのことでしたら、ご心配には及びません」

ホテルの人が、穏やかに笑いながら答えた。

それからちよつと悪戯っぽい表情で、付け足す。

「何よりグレイス様や、そのご学友様からお代を頂いたなどと知れたら、私どもの首が飛びます」

どうやらこのホテルは、ルーフェイアの家が所有しているとか、そついうことらしかった。

「どうぞ、お掛け下さい」

「あ、はい」

気圧されながらも、私もソファにかけた。汚さないかと、つい気を使う。

ホテルの人はもう一通りいろいろ説明してくれて、それから私たちに訊いた。

「夕食はいかがなさいますか？」

問われて、困ったようにルーフェイアがこちらを見る。例によって、自分では決められないのだろう。

だが私も勝手が分からない。結局訊いてみることにした。

「その、ここで……食べられますか？」

「もちろんでございます」

外へ行くのはもちろん、ホテル内のレストランを利用してもいいし、この部屋でのディナーも可能だと、この人が答えた。

少し考える。

外での食事にも興味があるが、アヴァンには2泊する予定だし、今日はルーフェイアも疲れているだろう。

「今日はここで……食べないか？」

「あ、はい」

この子も、異存はないようだ。

「では後ほど、夕食をご用意致します。

他何かございましたら、いつでもお申し付け下さい」

「あ、えっと、申し訳ないんだが……」

丁寧に一礼して出て行こうとするホテルマンに、慌てて訊ねる。

「何でございましょう？」

「その……少し、出かけたいので……」

せっかく着いたのだ。いくら明日観光に出かけると言っても、夕食までホテルにこもりつきりでは、アヴァンまで来た意味がない。

「では、お戻りになられましたら夕食に致します。ごゆっくり、このアヴァンをお楽しみ下さい。

行き先等でお困りのことがありましたら、どうぞ何なりと呼んでお尋ね下さい」

ホテルの人が再び一礼して出て行き、2人だけになって、なんだかほっとする。

「どこ、行くんですか？」

興味津々と言う表情で、この子が訊いてきた。私にはいくらか慣れているせいか、意外とよく話す。

それが、可愛かった。兄弟がいらないからよく分からないが、妹がいたらこんな感じなのかもしれない。

「その……せつかくだから、適当に歩かないか？」

「はい」

飲んでいたコップを空にしてから、ルーフェイアが立ち上がった。私もバッグを手に取る。

それから、ふと気づいた。

「ルーフェイア、それだと寒くないか？」

今は夏だが、ケンディクより北に位置するアヴァンは、夜は少し冷える。それなのにこの子は、薄手のＴシャツに短いスパッツという、ずいぶん涼しそうな格好だった。

Episode : 18

「羽織るものを、持って行ったほうが……」

「大丈夫です」

当人はそう言い張るが、これで外へ連れ出したら、風邪をひきかねない。

「ダメだ。ほら、バッグを貸してくれ」

言っと、素直にこの子が荷物を差し出した。

が、中を見て啞然とする。殆ど何も入っていなかった。

「これだけ……か？」

「はい」

それから思い出す。連れてくる時、確か強引に急がせたわけで……。

きっとこの子のことだ。律儀に大慌てで、最低限の物だけ持って飛び出したのだろう。

「——すまなかった。とりあえず、これを羽織るといい」

薄手のカーディガンを出してやる。さすがに肩や袖は余るが、羽織るだけなら十分だ。

「……………」

「行こう」

学院では見たことがないほど、嬉しそうにしているルーフェイアを連れて、私はホテルを出た。

夕日に染まる町が広がる。

——それにしても。

いったいどこへ連れて行ったら、この子が喜ぶのだろうか。
少し考えて、訊いてみる。

「どこか行きたいところは、あるか？」

「えっと……」

案の定、そういう場所はないようだ。かといって、このまま立っているわけにもいかない。

また少し考えて、私は言った。

「海は……見るか？」

「あ、はい！」

思いのほか、はつきりした答えが返ってくる。どうやら海を見るのが好きなようだ。

「行こう」

ルーフェイアを連れて、目の前の海岸へと出る。
陽が、沈もうとしていた。

緩やかに燃える太陽。

空に流れる、澄んだ薄紅色の雲。
陽を浴びて、金色にまたたく海。

「きれい……」

「そうだな」

2人で魅入る。

橙色から朱色へ、朱色から金赤へ、そして緋、紅、赤、茜……。
最後に夕焼けを残して、陽は海の彼方へ沈んだ。

「……行くか」

「はい」

暗くなり始めた夕暮れの町に、あちこちの窓や街灯の明かりが浮かび上った。だんだん気温が下がってくる。

心配になって、薄着のルーフェイアに声をかけた。

「寒くないか？」

「だいじょうです」

確かに見た限り寒そうなところはないが、それでも心配だった。

夜風にあたって、風邪でもひいたら可哀想だ。

Episode : 19

「ルーフェイア、その……良かったら、服を少し買わないか？」

「え、でも……」

視線を落として、ルーフェイアが困ったような顔をする。

だがこんな格好でこの子がいるのは、元はと言えば私の責任だ。幸い自分の服代や、今日の宿泊代が浮いたおかげでお金もあるし、何かしてやりたかった。

「それだけだと、困るだろう？ お金は私が出す」

「あの、でも……自分で買うつもり、だったので……」
はっとする。

この子は最初から、持ち物が足りないのは承知していたのだ。それでも私の様子から、最低限のものだけ持って飛び出したのだろう。

「——本当に、すまなかった。無理に連れ出して」

普通に考えれば、素直についてくること自体あり得ない。

それを黙ってついてきてくれただけでも、十分だった。この子が来てくれたおかげで、私もずいぶん気がまぎれている。

いなかっただらば……旅行に来てはみたものの、かえって嫌な思いをしていたらう。

タシユアを思い出してまた腹がたったが、それは無視した。私が怒っているのは、ルーフェイアが可哀想だ。

「だから、お詫……！」

言いかけて慌てる。いつの間にかルーフェイアが下を向いて、泣き出しそうになっていた。

「すみません……あたし……」

一緒に学院を出てから泣くことがなかったので忘れていたが、そういうはこの子の泣き虫は相当だ。

「いや、ルーフェイアは悪くないだろう？」

「でも、でも……ついてきて……考えないで……」

どうも、私が気にして謝ったのが悪かったらしい。とにかく泣き止ませようと、私は必死に慰めた。

「——ルーフェイア、行くのは、嫌か？」

「い、いえ！ あ、行きたいです」

この子にしては珍しく、はっきりと意思を口にする。
私は微笑んだ。

「それなら、問題ないだろう？」

「あ、はい……」

自分でも何を言っているかよく分からないが、幸いルーフェイアは納得した。

「ほら、涙を拭いて。行こう」

「——はい」

また何かの拍子に泣き出して迷子にならないよう、この子の手を引いて歩き出す。

ふと時計を見ると、意外なくらい時間が過ぎていた。

——これじゃ、服を買うのは無理だな。

もつとも今晚出かける予定はないし、明日も日のあるうちは暑いだろう。だとすれば、今でなくても間に合う。

「ルーフェイア、その、自分で言っておいてなんだが……もう遅い

から、服は明日でいいか？」

「え？ あ、はい」

本人は買ってもらうつもりはなさそうで、半分上の空の返事だ。もちろん、それを責めるつもりはない。

「じゃあ明日だ。」

さ、戻って夕食にしよう」

「はい！」

強引に締めくくった話に、だがルーフェイアは嬉しそうに返事をした。

Episode : 20

「――!!」

翌朝ふと目を覚ました私は、石化しかかった。

「る、ルーフェイア?!」

何をどう間違ったのか、ルーフェイアが私の胸に顔をうずめて眠っている。

確か夕べは、隣の寝室に寝ていたはずだ。いやそれ以前に、2人で同じベッドという時点で問題がありそうな……。

と、この子がわずかに身じろぎした。

「――ルーフェイア?」

起きたのかと、おそるおそる声をかける。

「ん……」

少し動いたが、起きている気配はなかった。むしろ、安心しきって眠っている感じだ。

可愛くなって、そつと頭をなでる。

「……母さ……ん……」

これで納得した。

恐らく寝ぼけて、私のベッドへ入ってきたのだろう。ルーフェイアはこの部屋に泊まったこともあるようだから、その時と勘違いしたのかもしれない。

眠り込んでいるこの子を見る。

優しい金髪に、華奢な身体つき。確か今年12歳のはずだが、見かけはもう少し幼くて、8歳か9歳程度の感じだった。

性格もおとなしくて甘えん坊で、大人びたところがないから、やはり少し幼く感じる。

——8歳、か。

その年齢に、ずきりと胸の奥が痛んだ。8歳は、私が学院へ来た年齢だ。

思い出す。

あの時思っていたのは、これでもう追い出されずに済むということと、やはり頼れる人は誰もいないのだという寂しさと……。

そのとき不意に、なぜこんなに強引にルーフェイアを連れてきてしまったのか、私は理解した。

——ひとりが、嫌だったのだと。

我ながら情けないと思うのだが、今でも私は独りは苦手だ。誰かと話すことはなくても、人の気配がないと、どうにも落ち着かないほどだった。

だからつい、無意識に連れを作ってしまったのだろう。

何も言わずついてきてくれたこの子の頭を、もう一度そつとなでる。

もそもそとルーフェイアが動いた。うつすらと瞳を開ける。

「あ、すまない。起こしてしまったな」

「……？」

完全には目が覚めていないらしく、私を見ながらぼーっとしている。

その可愛さに、抱き寄せてまた頭をなでてやった。

「……ふ」

また私にすり寄ってくる。前から感じてはいたが、やはり相当の甘えん坊のようだ。

ただ、嫌だとは思わなかった。兄弟のいない私にとっては、むしろ妹のようで心地いい。

しばらく抱いてやってから、改めて声をかける。

「ルーフェイア、起きたのなら、着替えて朝食にしないか？」

「……………」

うなずきながらも、まだ私にしがみついているのを見て、可笑しくなった。今まで誰かに甘えずにいた分、まとめて甘えているのかもしれない。

「ほら、起きよう。ここで寝ていても、つまらないぞ？」

うながして、ベッドから出る。

少し不服そうだった——この子が不満を示すのは珍しい——が、ルーフェイアもベッドから起きだしてきた。

「朝食は、どうする？」

訊くだけムダかもしれないと思いながら、この子に尋ねてみる。
「えっと……………」

思ったとおり、ムダだったようだ。

もつともこの子も、まだ12歳。学院へ来た時は10歳だったというから、そこまで分からなくても当然だろう。

少し考えて、ルームサービスを頼むことにした。もう少し、この子をゆっくりさせてやりたい。

Episode : 21

遅めの時間を指定して、その間に2人で順番にシャワーを浴び、ルーフェイアの髪を乾かして梳いてやる。

柔らかく流れる金の髪。

——結んでリボンでも付けたら、可愛いだろうに。

だがこの子はそういうことを気にしないから、いつも長く流したままだ。

このあと出かけたら、どこか途中の店で、髪飾りを買ってやろうと決める。だいいち海へ出る——ビーチで有名なアヴァンまで来て泳がないのもつまらない——のに、結わなかったら大変だ。

そこまで考えて気が付いた。

「その、ルーフェイア、水着は……持つて来て……」

言いかけながら、言葉が途中で尻つぼみになる。

やっと幾らか泳げるようになったばかりの、この子のことだ。持つて来ているわけがない。

そもそも私は、海で泳ぐなど一言も言わずに、強引に連れ出してきたわけで……。

「泳ぐん……ですか？」

案の定、きよんとした表情でルーフェイアが訊いてきた。

「あ、いやあの、イヤなら別に、構わないんだ」

「え……」

今度は思ったのとは違う反応が返ってくる。

「……泳ぎたかったか？」

「あの、えつと……ごめんなさい……」

しかもなぜか、謝り始めてしまった。

慌ててなだめる。この子のいつものパターンからすると、ここで放っておくと泣き出すのだ。

——タシユアはわざと追い詰めて、泣かせるが。

タシユアの事を思い出した瞬間また腹が立つたが、押さえ込んだ。今はルーフェイアの事が先だ。

「だからその、泳ぎたくなければ、それでいいんだ。他にも見るところは、幾らでもあるわけだから……」

だがなだめても、ルーフェイアは謝るのをやめなかった。どうも本人自身が、混乱しているようだ。

私も口で言うのが面倒になってくる。もともと口下手なのだ。気の利いたことなど、言えるわけもない。

——ああ、そうか。

言葉がダメなら別の手段を使えばいいのだと、やっと私は気付いた。

「ルーフェイア」

「——？」

名前を呼ばれて、この子が一瞬止まった隙に、抱き寄せる。

最初は驚いた様子だったが、元が甘えたがりのルーフェイアだ。すぐにぴたりと身体を寄せた。

「謝らなくていい。分かるな？」

「……はい」

うなずいて大人しくなったこの子に、今度は順を追って話していく。

「どうする？ 海へ行くか？」

「はい」

昨日もそうだったが、はつきりとした返事が返って来た。本当に海自体は好きなようだ。

ともかく、これさえ分かれば後は早い。

「ならルーフェイア、午前中は観光でもして、午後は暑いから海でも行かないか？」

水着は途中で買えばいいだろうし」

「——はい」

ルーフェイアが嬉しそうな笑顔になる。

——こういう表情も、するんだな。

もともと綺麗な子だが、笑顔を見せると格別だ。

逆に言えばそれだけ、笑顔を見せることが少ない子だとも言える。だったら尚更、この旅行で喜ばせてやりたかった。

今日も後で泳ぎを教えて、喜ばせてやろう。

そんなことを考えているところへちょうど、朝食の用意が出来たと知らせが来て、2人で並びの食堂へ向かった。

Episode : 22

R u f e i r

ホントに夢みたい、だった。

「博物館、すごかったですね」

「ああ、そうだな」

向かいに座った先輩が、微笑みながら答える。

今あたしたちがいるのは、アヴァン博物館近くのカフェだ。店の外の石畳、日よけの下にもテーブルが出てあって、風が流れてる。テーブルの上には、先輩が頼んでくれた昼食が並んで、2人で食べてるとこだ。

歴史が長いだけあって、国立博物館はホントにすごかった。

——先輩はあんまり、興味がなさそうだったけど。

だからなんだか悪い気がして、実はこっそり途中で切り上げた。なにより、先輩とこうしてる方が楽しい。

「このスープ、美味しいぞ」

「あ、はい」

勧められるままに、口を付ける。

「……」

先輩の言うとおり美味しい。あとはサラダとサンドイッチだけど、きつとこっちも美味しいはずだ。

「ほら、こっちは辛くないから」

「はい」

先輩がいろいろ、あたしのお皿に分けてくれる。なんだかサリ

ア姉さん——ほんととは従姉——と一緒にいるみたいだ。
だいたい食べたところで、先輩が言った。

「それを食べたら、買い物に行くぞ」

今朝言った予定通り、水着を買っらしい。

残ってたのを食べ終えて、急いで立ち上がった。

「いや、そんなに慌てなくても……」

「え、でも……」

なんだか悪い事をしたみたいで、視線を落とす。
と、あたしの頭を先輩が撫でた。

「気にしないでいい。行こう」

「……はい」

嬉しくなつて、先輩の後についていく。

真昼の日差しに照らし出されたアヴァンの街は、とても華やいだ
感じだった。観光や買い物らしい人たちが、たくさん行き交ってい
る。

落ち着いた石畳。どっしりした造りの両側の建物。

目抜き通りなせいだろう、ほとんどが1階は大きなガラス張りの、
お店になっていた。

その中を覗き込みながら、先輩と2人で並んで歩く。
と、先輩が立ち止まった。

「行こう」

一軒の店へ入っていく。

中は子供の服がたくさん並んでいた。赤ちゃんのからあたしより
大きい位まで、一通り揃ってる感じた。

「——この辺かな？」

先輩が探し始める。

「何かお探してでしょうか？」

店員さんがすかさず、声をかけてきた。

「この子の上着と、あと……水着があれば欲しいんだが」

「あら、可愛い妹さんですね。」

少々お待ち下さい。今出しますので」

なぜか妹にされる。

確かに、この年で先輩後輩で、旅行に出るのは珍しいけど……。けどそんなあたしの感想は関係なしに、先輩と店員さんは服選びに夢中だ。

Episode : 23

「このカーディガンなど、いかがですか？ 可愛いデザインですから、お似合いだと思いますが」

「……………」

先輩があたしと服を交互に見ながら黙ってるから、店員さんが慌てて次を出してる。

そのうち先輩、全然違う棚から服を引っ張り出した。

「ルーフェイア、ちょっとこっちへ来て、後ろを向いてくれないか？」

「あ、はい」

あたしの背中に合わせて、サイズを確かめてるみたいだ。

「大丈夫そうだな……………着てみってくれるか？」

「はい」

渡されたのを見たら、カーディガンじゃなくてパーカーだった。

「こっちの方が、ショートパンツに似合うだろう？」

「……………」

そういうもんなんだろうか。

そのほかに先輩は、タンクトップやら袖なしのワンピースやら、ショートパンツなんかまで選び出す。

何度も呼ばれては大きさを合わせて、試着して先輩がそれをながめて……………その繰り返しだ。

「あの、先輩、こんなにいっぱい……………」
「いいんだ」

きつぱり言われて、何も言い返せなくなる。

旅行に連れ出された時もそうだったけど、思ったよりシルファ先輩、強引なところがあるみたいだった。

それから水着を選んで、やっと先輩、服選びをやめる。

「そうしたら、これで」

「かしこまりました」

店員さんが、丁寧にたたんで包み始める。

慌ててあたしは、先輩に駆け寄った。

「あの、あたしが払いますから！」

「私を買った。気にするな」

先輩、とりつくしまもない。

「でも、あの、悪いですし……」

あたしが自分で、大して着替えを持たずに出てきたのが悪いのに、先輩にお金を使わせるわけにはいかなかった。

「いいと言っただろう？ だから、いいんだ」

でも先輩、よく分からない理由で却下する。

「けど……」

「——ルーフエア」

鋭く言われて、一瞬すみあがった。

「あ、あの、ごめんなさい……」

思わず謝ったあたしの頭を、先輩がそつとなでる。

「謝らなくていい。」

「私を買いたいんだ。着てくれるな？」

綺麗な紫の瞳。

覗き込まれてそう言われると、あたしももう反論できなかった。

「すみません……」

「いいから。」

さあ、ホテルに帰って着てみよう」

先輩がお金を払って、紙袋を持って歩き出す。あたしも先輩と並んで、ホテルへと戻った。

フロントに挨拶して鍵を受け取って、昇降台に乗って……。部屋に入るとさっそく先輩、袋を開けて服を引っ張り出す。

Episode : 24

「今は暑いから、上着だけ持って行けばいいな。ほら、こっちの水着を来て、上に羽織るといい」

「はい」

でも言われるままに着替えようとしたら、先輩に止められた。

「ちょ、ちょっと待てルーフェイア、外から丸見えだ！」

「？」

いつも丸見えだと思っただけ……？ それにこの部屋、万に備えて、二重の防御ガラスになっている。

けどそれを言ったら、今度は先輩がため息をついた。

「……ごめんなさい」

なんか悪いことしたみたいだから謝ると、今度は先輩が笑った。

「いや、いいんだ。さあ、着てごらん？」

言いながら先輩が、カーテンを閉める。

——昼なのに。

よく分からないまま水着を手取る。

あれ、でもこれって水着……？

素材は確かに水着みたいだけど、なぜかブラジャーの親戚みたいなのと、スカートみたいなのと2つある。

でも同じ柄だから、別々ってことはなさそうだし……。

「ほら、下をはいて。上はかぶるといい」

「あ、はい」

うながされて、まず下をはく。上も言われたとおりにすると、そ

のまま動かないように言われた。

「前を押さえててくれないか？」

「はい」

先輩うしろに回って、肩ヒモの長さを調節してるみたいだ。

「きつくないか？」

「だいじょうぶです」

着てみたら、要するに上下別々の水着だった。確か母さんがこういうの、見せびらかしてたの見たことある。

それから今度は、渡された上着を羽織った。

「似合ってるぞ」

「っ」

なんだか嬉しい。

「あとは、髪だな……」。

ルーフェイア、その椅子に掛けてくれないか」

「はいっ」

椅子にかけて足だけぶらぶらさせながら、頭を動かさないように気をつける。

後ろで先輩が手際よくあたしの髪を結んで、それから編んでる気配がした。

「——よし」

そう言って、あたしの前に手鏡を差し出す。

「どうだ？」

「……っ」

左右ふたつに結び分けた髪が、どっちも綺麗にまとめてあった。

「これなら泳いでも、邪魔にならないだろう？」

「はい」

ちなみにそう言ってる先輩自身は、後ろで髪をひとつにまとめる。だから、いつも以上に大人っぽい感じだ。

Episode : 25

「ちょっと待っててくれるか？ 着替えてくる」

「はい」

先輩がバスルームへ、着替えを持って入って行った。

——先輩、どんなのかな？

でも出てきた先輩、割と普通の黒の水着だった。ただ、腰に水色の長い布をスカートみたいに巻きつけて、白い上着を羽織ってる。ホントはおそろい期待してたんだけど……。
けど一緒に買ったわけじゃないし、しかたないと諦める。

「その、何か……変か？」

「え？ あ、綺麗です」

慌てて答えてから、先輩をもう一回よく見る。

なんか身体感じが、母さんみたいだな、と思った

母さんほどじゃないけど、でもとってもやわらかそうで……。

「る、ルーフエア、なんでそこで触るんだ……」

「え？」

母さんなんか触れ触れってうるさいのに、先輩違っただろうか？

「あの、えっと、ごめんなさい……」

視線を落として謝る。

一瞬の間。

「これで、いいか？」

「——うん」

先輩に抱き寄せられて嬉しくなる。
やわらかくて、あつたかくて……。

「ルーフェイアは……お母さんが、好きなんだな」
「はい」

母さんには会つと振り回されてばかりだけど、でも強くて、優しく、嫌いってわけじゃない。

「良かったな、いいお母さんで」
「えっと……」

これはさすがに、はいと言えない。

「違うのか？」

「その……うちの母、すごく変わってて……」
娘のあたしから見ても、母さんかなりとんでもない人だ。常識とか、そういうものは絶対、どっかに落としてきてる。

——悪い人じゃないし、すごいのも確かなんだけど。
でも「いいお母さん」かって言われると、やっぱりなんか違うだろう。

「その、まあ、とにかく大事にするんだぞ？」
「あ、はい」

どうやったら大事にできるのかは、ぜんぜん見当つかないけど。

とりあえず先輩がそのまま動かないでくれているから、胸に顔をうずめて抱かれたままにする。

「甘えん坊だな、ルーフェイアは。」

——さあ、そろそろ行こう。日が暮れて、海に入れなくなるぞ?」

先輩に言つとおりだ。せつかく海へ来て水着まで着たのに、泳がなかつたら意味がない。

「はい」

あたしと先輩は連れ立って、ホテルの目の前の海岸へ向かった。

Episode : 26

Sylpha

昨日の夕方とはうってかわって、浜辺は人があふれていた。

正直……人が多すぎるくらいだ。

——勝手なものだな。

人の気配がないと落ち着かないのに、多ければ多いで嫌なのだから、私もずいぶん我侭だと思う。

ルーフエイアの方は、人の多さを気にする様子はなかった。繊細な子だと思っただけに、けっこう意外だ。

もつともよく考えてみれば、私が強引に連れてきたのに平然としているわけで——泣き虫なだけで、案外芯は強いのかもしれない。ただ何か困った様子で、海と私とを交互に見ている。どうやら遠慮がちな性格が災い？して、海に入りたいと言い出せないらしい。

「海に、入るだろう？」

声をかけて促す。このまま困らせておいても可愛いのだが、さすがに可哀想だ。

「はい！」

嬉しそうな返事と共に、ルーフエイアが私のあとをついてきた。もし妹がいたら、こんな感じなのかもしれない。

まだ泳ぎが下手なこの子が、波にさらわれないよう手を引いて、ゆつくりと海へ入る。

「泳いでみるか？」

「あ、はい……」

ぱしゃぱしゃと、ルーフェイアが泳ぎだす。

「——上手じゃないか」

「え？ えっと、そう……ですか？」

この子が顔を上げて、きょとんとした表情で問い返してきた。

「ああ」

「……」

今までに見たことがないほど、にこにことした表情だ。

——これが本来の、この子なのだろうな。

今まで見ていたルーフェイアは、いつもどこか寂しそうだった。

もしかすると学院へ来る前に、誰か亡くしたのかもしれない。

当たり前といえば当たり前だが、学院にはそういう子が多かった。

そしてそういう子達は皆、ああいう寂しそうな表情を見せる。

今だけでも、それを忘れて楽しんでくれれば、と思った。

「イマドは教えるの、上手いんだな」

「はい」

自分のことのように喜ぶ。

何故かは分からないが自称保護者のイマドに、ルーフェイアは特に懐いていた。一緒にでないほうが珍しいくらいだ。

——間違っても積極的とは言えない性格のこの子が、男子と仲がいいのは不思議なのだが。

「そうしたら、今日はもう少し……いろいろ、やってみないか？」

「あ、はい」

喜ぶこの子に、一つ一つ教えていく。

以前にも感じたことがあるが、ルーフェイアは飲み込みは早かった。自分の身体を扱うのが上手いというか、コツを掴むのが上手と言つか……ともかく、上達が早い。

相当鍛えこんでいるらしく、息が上がる気配もなかった。

ここへ来る前にどこで何をしていたかは、詳しくは知らない。だが噂どおり、タシユアと同じような経歴なのだろう。

ともかくしばらく教えて、ある程度メドがついたところで声をかける。

「一旦、上がらないか？ おなかも空いただろう？」

こくりとうなずいて、この子がついてきた。

荷物を置いていた日よけ——ホテル側が用意してくれた——の陰で、手早く身体を拭いてやり、砂を払った足にサンダルを履かせる。

Episode : 27

「何が食べたい？」

「えっと……」

辺りに出ている屋台を、この子が見回すと、珍しく視線が止まった。

——なるほど。

目の前の海で獲れる小魚を串に刺し、ただあぶり焼いた物がこの辺りの名物らしいのだが、そこに視線が行っている。そういえば今までも食事の時は、この子は魚をよく選んでいたから、きつと肉より好きなのだろう。

「あの魚でいいか？」

「いいん……ですか？」

「ああ。行こう」

答えて歩き出す。

だがその私たちを、人影がさえぎった。

「君たち、2人だけ？」

若い男性が3人。

ルーフェイアと顔を見合わせて囁き合う。

（お知り合いですか？）

（ルーフェイアの、知り合いじゃないのか？）

つまり、どちらの知り合いでもなかったらしい。

男たちが着ているのは、ブランド物の水着と上着のようだ。だが

トレーニングで鍛えただけの身体は、どう見ても無駄なだけだった。実戦で鍛えた身体は、こういうのとは全く違う。

そう思った瞬間、なぜか余計に腹が立った。

当の本人たちは強いつもりでいるらしく、妙な自信とおかしな笑い方を見せている。

「……ルーフエイア、行くぞ」

「あ、はい」

無視して歩き出すと、また行く手を遮られた。

「どうせ暇なんだろう？」

男のその口調が、妙に気に障る。

「せっかくの海なのに、カレシもないじゃつまんないぜ」

「……………」

何も知らない相手に、こんなことを言われる筋合いはない。

私の怒気を察したのか、ルーフエイアが1歩下がった。

「ホラそんなコワイ顔しないで、行こうぜ」

男はそう言いながら、私の手首を掴んでくる。

「——放せ」

言葉と同時に、身体が動いていた。捕まれたのを逆に利用して相手の腕を手繰り、そのまま投げ飛ばす。

「こ、こいつ——」

「調子こいてんじゃねーぞっ！」

残る2人が襲い掛かってきた。

——本当に素人だな。

喧嘩には慣れているのかもしれないが、所詮はそれだけだ。

身体を入れ替えながらみぞおちに肘打ちし、もうひとりに蹴りを入れる。

なぜか周りで喝采が上がった。

「つきしょう……おい、こっち見やがれ！」

倒れている2人に気をつけながら、最初の男の方へ視線を向ける。

「ルーフェイア、何を律儀に捕まっているんだ……」

華奢なこの子が、腕の中に捕らえられていた。

Episode : 28

「えっと、その……怪我させたら、申し訳ないですし……」

「先に手を出したのは相手なんだぞ。正当防衛だ」

「お前ら——！」

私たちが話しているうちに焦りだしたのか、男が何か喚きだす。
半分以上はスラングらしく意味が分からないが、ろくなことではないだろう。

いずれにせよ、長引かせないほうが良さそうだった。

「——ルーフエア、ともかくこっちへ来るんだ」

「あ、はい」

少女が男の腕に鉄棒の要領でぶら下がり、大きく前へ両足を跳ね上げ、振り下ろす。

サンダルのかかと部分が、勢いよく相手の向うずねに叩き付けられ、男がうめいて腕を緩めた。

隙を逃さずルーフエアは束縛から抜け出し、更に相手の股間へ、容赦なしの肘打ちを決める。

「！！！！」

見事に相手が砂の上に突っ伏し、さっき以上の歓声が周囲からあがった。

——何が面白いんだ？

こちらが絡まれて一応困っているのに、それで拍手喝采という神経が分からない。

「えっと、すみません……大丈夫、ですか？」

ルーフェイアのほうは何を思ったか、倒した相手に謝っていた。

「……謝らなくていい」

喜んでいる野次馬も野次馬だが、この子もこの子だ。絡んできた相手に謝るなど、聞いたこともない。

「す、すみません！」

「あ、いや……いいんだ」

今頃慌てているこの子が、すっかり泣き出さないうちに、少し離れた場所へ連れて行く。

「怪我はないな？」

あの様子であるわけもないのだが、念のために訊ねると、ルーフェイアの表情が和らいだ。

「はい、大丈夫です」

「そうか。」

——魚だったな。行こう」

とんだ邪魔が入ったが、軽食を調達する途中だったのだ。適当な屋台に目星をつけて、歩み寄る。

「おや、さっきのお嬢ちゃんがたじゃないか」

「——？」

こちらが何か言うより早く、屋台の店主が声をかけてきた。

「いやあ、さっきのはすごかったねえ」

こちらが絡まれていたというのに、ずいぶんと嬉しそうな顔だ。

「2匹でいいのかな？ あ、お金は要らないよ」

「え？」

唐突に言われて困惑する。

「いいもん見せてくれたお礼さ」

「そう、なんですか……」

店主が言うには、彼らはこの辺では悪名高い連中らしい。

「ホント、見てるこつちまで気分がスカつとしたよ。ありがとな」
別に、そういうつもりはなかったのだが……。

「お嬢ちゃんも、ちっちゃいのにすごいねえ。どこもぶつけなかったかい？」

「え？ あ、はい……」

ルーフェイアの方も、どこか不服そうだ。「小さい」と言われたのが、気に入らなかったのかもしれない。

「ほら、持ってきたな。熱いから気をつけるんだよ」

「ありがとうございます」

結局2人で1串づつもらって、ほおばった。

「——これは美味しいな」

「はい♪」

ただの炙り焼きなはずだが、名物なだけある。脂がのっついていて、うえ、潮の香りと味が最高のスパイスになっていた。

ルーフェイアが珍しく、笑顔で食べている。

Episode : 29

「もう1匹いるか？」

一匹丸ごといつても、所詮は小魚だ。もう半匹くらいは食べられるだろう。

「え？ あ、でも……」

欲しいのに言えない。どうみてもそんな様子のルーフェイアが、可愛い。

頭を撫でてやってから、立ち上がった。

「ここで待ってるんだ。もう1匹買ってくる」

先程の屋台へ行く。

「おや、どうしたんだい？ まさか気に入らなかったのか？」

「いえ、あの、魚を……」

なんだか気押されながらも答える。

「魚？ うちのは旨いぞ。それとも、そんなに不味いか？」

更に予期しない方向へ話が転がった。

「いえ、ですから、その……もう1匹……」

「おおそうか！ そうだろそうだろ、なんせうちのは旨いからな」
いろいろな意味で、思い込みの激しい人のようだ。

「ほら、持ってけ持ってけ。」

ん？ たった1匹か？ ダメだダメだ、育ち盛りなんだから、せめて1人1匹づつだろ。

え？ あの子じゃ食べきれない？ あーじゃあ、この小さいのを
持ってくるな」

また押し付けられる。

だがさすがに、2度もタダというわけにはいかない。それをどうにか、屋台の店主にやっと伝えると、彼が笑い出した。

「律儀なお姉ちゃんだなあ。分かったよ、こんだけ置いてきな」

言われたとおりのコインを置いて、ルーフェイアのところへと戻る。

「――？先輩も、ですか？」

「いや……まあ、そうだな」

いきさつを話そうかとも思ったが、そうするとまたルーフェイアが落ち込みそうな気がして、私は言葉を濁した。

「ともかく、食べないか？熱いうちがいいだろうし」

「はい」

不思議そうな顔をしていたこの子だが、それ以上は言ってこなかった。素直に魚に口をつける。

――タシユアなら、思い切り何か突っ込んだだろうな。

彼はこういうことは、絶対に見逃さない。

瞬間、また怒りがわいた。タシユアのために、せつかくあれだけ用意したのに……。

「あ、あの、先輩？」

はっと気づくと、どこか怯えた風の、華奢な後輩が目に入った。

心持ち身をすくめ、おどおどと視線を落とすルーフェイアは、今にも泣き出しそうだ。

驚かせて、怖がらせたのだと悟る。

「——ルーフェイア」

そつと呼んで、抱き寄せた。

「悪かった。私の……個人的なことだ。ルーフェイアは悪くない」
腕の中から、安心した様子が伝わってくる。きっと自分が何かしたせいだと、勘違いしたのだろう。

可愛かった。そして可哀想だった。

あれに似た気持ちは、私も覚えがある。ずっと昔だが、今も時折心をよぎって、辛くなることがある。

息をひそめて。目立たないように、怒らせないように、追い出されないように。

そうやってただ黙って、どこかの隅で過ごす日々。

学院へ来る、ずっと前の話だ。

脅かされることのない居場所が欲しかったのだと、今ならば分かる。だが当時はそんなことは分からず、ただただ縮こまっているだけだった。

この子もまた、そうなのだろう。

——ならば、この旅行でなおさら。

楽しませてやって、笑顔が見たい。心からそう思った。

Episode : 30

R u f e i r

魚を食べたあと、また少し泳いで、先輩とあたしはホテルへと戻ってきた。

けど、ホテルのロビーがなんだか騒がしい。

「どうしたんでしょう？」

「私に訊かれても……」

たしかにそうだ。ホテルのことを、先輩が知るわけがない。

誰か知ってそうな人に訊こうと、フロントのほうに行こうとして、あたしは理由を見つけた。

「先輩、あの人、さっきの……」

「そうだな」

どこかの誰かがホテルに文句を言いに来たみたいで、支配人が中へ入るのを押し留めながら、なだめてる。

そして押し入ろうとしてる一行の中に、さっき浜辺で叩きのめした、男の人たちがいた。

ただ、中心人物ってわけじゃないらしい。もっと恰幅のいいおじさんが、この一行をまとめてるみたいだ。

先輩と目配せして、そつと近づいてみる。

「ともかくうちの息子に、狼藉を働いたものが、このホテルにいるのは間違いないんでね。話し合わせてもらいたい」

「恐れ入りますが、ご宿泊でない方のご要望には、お応え致しかねます」

要するに、叩きのめした相手——つまりあたしたち——を引っ張

り出そうってことらしい。あたしたちがホテルの日よけを使っていたから、そこからきつと、ここを突き止めたんだろう。

「なるほど、客じゃないからと言うわけか。ならば、部屋を取るだけだか？」

「ご予約、ありがとうございます。ですが大変申し訳ありませんが、本日は満室でございます」

支配人さん、平然と言つてのける。シュマーの関係者なだけあつて、肝は据わつてゐるみたいだ。

「私が誰だか、分かつているだろうな？」

「ご要望に従えず、大変申し訳ありません、お客様」

相手の言い方からすると、それなりの人らしい。でも支配人さんはそんなこと、知らん顔だ。

まあうちの系列を預かるくらいだから、万が一暴力沙汰になつても支配人さん、ちょっとやそつとじゃケガもしないだろう。

もしかしたら違う方向から、違う圧力がかかるかもしれないけど……それもイザとなればどうにでもできる。

——いちおう、姉さんに連絡したほうが、いいかな？

姉さんはシュマーの事務方を預かつてる関係で、財界なんかに顔が利く。そこから手を回しておいてもらえば、立ち退きなんてことにもならないだろう。

「とりあえず、部屋へ行くか？」

「あ、はい」

先輩の言つとおり、ここで見てても仕方がない。姉さんに連絡するにしても、部屋へ戻ったほうが良かった。

騒ぎを横目に、ロビーを横切る。

「あつ！ 親父、あいつだ！」

「ん？ 見つかったか？」

先輩が面倒そうに言う。もとから隠れる気もなかったけど、タイミングよく叩きのめした男の人、こっちを見てたらしい。

「てめえ、さつきはよくも！」

騒ぐ男の人を、シルファ先輩、信じられないほど冷やかな目で見た。絶対に何か怒ってる。

もし手でも出してきたら、さつき以上に手加減なしだろう。

「親父、こいつらが俺を——」

「待て。聞いた話と違うぞ？」

どうなるかと思ったけど、意外にもお父さんのほうが、騒ぐ息子さんを止めた。

Episode : 31

「不埒者にやられたと言っていたが、お前は女にやられたのか？
この面汚し目が！」

「あ……」

例の男の人が、しまった、という顔になる。
それにしてもお父さん、なんだかひどい言い方だ。

「まあいい。このままというわけには行かないからな。

そこのお嬢さん、話が——」

歩み寄ってきたおじさんが、言葉の途中で文字通り固まった。

「私は用はないぞ」

「え、あ、いや、その、後ろにいるおチビちゃんは、もしかや……」
すごい慌てぶりで、先輩の話を聞いてない。何より、「おチビちゃん」って……。

自分のことだと分かっているけど、こっぴつふうに言われると、けっこう腹が立った。

「あたしが、何ですか？」

思わずちよっと、冷たい言い方になる。

「も、もしかして、カレアナ様の……？」

「え？ 母を、ご存知なんですか？」

思いがけない名前が出てきて、驚いて聞き返す。

もしかして母さん、またひと騒動起こして、迷惑かけたんじゃないだろうか。

「えっと……うちの母、何かしましたか？」

「め、滅相もない！」

おじさん、土下座でもしそうな勢いだ。ぜったい母さん、何かや
つてる。

「ええと、その、すみません……うちの母が何か、ご迷惑おかけし
たみたいで」

「迷惑なんて！ それどころかお嬢さまが娘さんとは露知らず、こ
のたびはとんでもない失礼を、うちの馬鹿息子がしてかしまして。
きつく言っておきますので、どうかお許しください」

今日のことを母さんに言つとか言つたら、おじさん、泣きそうな
気がした。

「あの、別にそんな、謝らなくても……」。

あ、でも、街の人に迷惑かけるのは、出来たら……やめてもらえ
ませんか？ あと、このホテルにも……えっと、うちの系列なの
で」

「は、はい！ 全員によく言い聞かせて、二度とこのようなことが
ないように致しますので！」

ほら、お前もよく謝りなさい！」

おじさん、息子——要するにさっき叩きのめした人——の頭を、
ムリヤリ下げさせる。

「なんで俺が……」

「黙らんか！」

一喝ついでにおじさん、息子さんの頭も容赦なく殴った。

「ホントに申し訳ありません、デキの悪いせがれでして。私に免じ
て、ここはひとつお許しくださいませでしょうか」

どう答えようか、ちょっと悩む。「私に免じて」と言われても、

このおじさんがどこの誰か分からない。

けど黙ってたらおじさん、何か勘違いしたみたいだ。ひたすら頭を下げて、「この償いはきつとさせる」とか言ってる。

「えっと、その、償いとかはいいですから……さっき言った、迷惑かけないようにだけ、していただければ」

おじさんが、気をつけの姿勢になった。宣誓でもしそうだ。

Episode : 32

「はい、それはもちろん！」

なんとまあ、お優しいお嬢さまで。うちのバカ息子に、爪の垢でも煎じて飲ませてやりたいほどです」

「え、あの、それは……」

汚いと思うのだけど。

でもおじさんは真剣な顔だから、ホントにやってしまいそうだ。

「それである、大変申し訳ないのですが、このあと予定がありました……」

考え込んでたあたしに、おじさんがすまなそうに言う。

「その、お嬢さまさえ差し支えなければ、おいとまさせていただきますか」と

「あ、はい。こちらこそお引止めして、申し訳ありませんでした」

あたしがそう言つと、おじさんまたぺこぺこお辞儀をする一方で、息子さんを小突きながら帰っていった。

「なんだっ たんだ？」

「さあ……」

先輩に訊かれたけど、答えようがない。ただひとつ分かってるのは、母さんがまた、何かとんでもないことをしたってことだ。

「巻き込んでしましまして、申し訳ありません」

そばで様子を見てた支配人が、頭を下げた。

「うつん、元はと言えば、あたしたちだから……。ところであの、どこの……方なの？」

「ああ、彼ですか？ この辺の裏社会の、首領ですよ」

思わず先輩と、顔を見合わせる。

叩きのめした人が息子で、あのおじさんが、そのお父さん。それが裏社会の首領だとすると……そうとは知らず、なんだか凄いとこるにケンカを売ってしまったらしい。

「えっと、そんな人ともめて……ホテル、だいじょうぶ？」

「ええ、大丈夫ですよ。いつものことです」

支配人さんが微笑む。

「それに、カレアナ様とグレイス様がああ言ってくださったので、当分の間はトラブルが減りそうです。ありがとうございます」

「そんな、あたしは何も……」

何かしたっていうなら、絶対母さんだ。それも、裏の首領を震え上がらせてるんだから、かなりヒドいことをしたんだろう。

——あとで謝りに行こうかな。

けどあの様子だと、かえって脅かすことにもなりそうだ。

それにしても母さん、ホントにどこで何をしでかすか分からない人だ。ああいうのを、トラブルメーカーって言んだと思う。

なんだか疲れてため息をついてると、頭を撫でられた。

「ルーフェイアも、たいへんだな」

事情は誤解してそうだけど、そう言ってくれる先輩に、うれしくなる。

「ともかく、部屋へ戻らないか？ ここに立っていても、仕方がないだろう？」

「あ、はい」

たしかに、ここにこれ以上居る意味はない。それにもういちど髪や身体を、よく洗いたかった。

「では、お荷物を」

支配人さんが荷物係の人を呼びながら、先に立って歩き出した。

ロビーを出て棟を移ると、とたんにあたりが静かになる。窓から見える夕暮れの海が、今日もきれいだった。

Episode : 33

「このあとお二人とも、どうなさいますか？」

景色をのんびり眺めながら歩いていたところへ、急に訊かれて、先輩と顔を見合わせる。予定なんて決めてなかった。

そんなあたしたちに、支配人さんが遠慮がちに言う。

「こんなことを申し上げるのは、差し出がましいのですが……できません。もし今日は、これ以上外出なさらないほうが、よろしいかと」

「あ……」

そのとおりかもしれない。

あのおじさんは、「ちゃんとさせる」と請合ってたけど、相手はふつうの人たちじゃない。それにおじさんがちゃんと話を徹底させたとしても、全員に行きわたるには時間がかかるだろう。

だとしたら、今すぐに外出するのは、危険だ。何より、ホテルに迷惑がかかる。

「先輩、どうしましょう……」

恐る恐る訊くと、先輩が微笑んだ。きっとあたしの考えてることなんて、お見通しなんだろう。

「いいじゃないか、部屋でのんびりしよう。」

今日はもう予定はないし、明日は次へ移動だから、荷物もまとめなくてはいけないし」

「え？ まだこの先……どこか、行くんですか？」

初耳だ。あたしはてっきり、ここで何日か過ごして、帰るのだと思ってた。

先輩がはつとした顔になる。

「すまない、そういえば何も予定を……言つて、なかったな」
「いえあの、あたしも……ぜんぜん、訊かなくて……」

自分ののんきさに呆れる。予定も知らないまま同行なんて、前線じゃ戦死直行コースだ。学院に行くようになってからあたし、かなりボケてるらしい。

先輩が話し出した。

「その、何と言うか……もともとアヴァンからワサルまで、観光のつもりだったんだ。
でもほら、ルーフェイアにも予定があるだろうし、なんならここで切り上げて……」

歯切れが悪いのは、先輩にしては珍しく強引に、あたしを連れてきたからなんだろう。

だから、答える。

「えっと、その、あたしは予定……だいじょうぶです」
学院へ帰るより、先輩といっしょに居たかった。

「だが、休み中の課題とかが、あるだろう？ 終わらないと、減点になるし……」

「課題、ですか？ それならもう、提出しました」

先輩が、啞然とした表情になった。

「提出つて、まだ夏季休業は、半分も終わってないぞ？」
「え、でも、休みに入る前に、やっちゃいましたし……」

ああいうの、もらったらすぐやって、提出するんじゃないんだろ
うか？ 教官だってやって欲しいから、課題を出すのだろうし。

先輩がなぜか苦笑したあと、あたしの頭をまた撫でた。

「ルーフェイアは、えらいな。」

そういうことなら、けっこう長旅になるが……私といつしよに、行くか？」

「はい！」

思いもかけなかった夏休みの長旅に、弾む声であたしは答えた。

Episode : 34

Sylpha

窓の外を、景色が流れていく。流れ込む涼しい風が、ルーフェイアの金の髪を躍らせていた。

あと少しで、大溪谷で名高いルアノンだ。今朝早くにアヴァンシテイを出て、途中で超長距離の列車に乗り換えて、やっとここまで来た。

——悪い事をしたな。

学院を出てから、同じことを何度思っただろう？

なにしろ私のしたときたら、誘拐も同然だ。幸い同じ学院生だったし、本人が喜んでいるからいいようなものの、ふつうは大騒ぎだろう。

まあ黙ってついてきてしまうこの子にも、問題はあるだろうが……。

あとでよく、そういったことを教えたほうが、いいかもしれない。そんなことを考えながら、私も窓の外を眺める。

この辺りは大穀倉地帯で、どこまでも畑が広がっていた。その緑と、ルーフェイアの金の髪のコントラストが、まるで絵のようだ。

その横顔を見ながら、分からない子だな、と思う。

アヴァンでの一連を見るかぎり、タシユアの言っていたとおり、「古い家の跡とり娘」なのだろう。

それも単に古い家系というのではなく、それなりに実力のある家らしい。そうでなければ、ホテルで私まで、あんなに丁重に扱ってはもらえないはずだ。

それなのに、シエラの本校に居る。しかも、その戦闘力は群を抜いている。

深窓の令嬢というべき環境が揃っているのに、なぜ実戦に長けているのか、見当もつかなかった。

唯一思い当たるのは、かつて言っていた「得体の知れない力を持っている」というものだが……。

だが途中で、詮索をやめる。本人が言おうとしないものを、他人が傍から言つべきではないだろう。

何より、珍しく楽しそうな横顔を、曇らせたくなかった。

「先輩、もうすぐですよね？」

「そうだな。そろそろ荷物を降ろさないと」

大溪谷に寄ると知ってから、ルーフェイアは前にもまして嬉しうだった。見てみたかったのかもしれない。

「待て、私がやる。ルーフェイアはまだ、座ってていいぞ」

棚の上の荷物を取ろうとした後輩を、慌てて止める。必死に背伸びして降ろそうとするようすは可愛いが、取り落として下敷きになりそうだった。

「バッグもひとつ、買ったほうがいいな……」

必要最低限しか持ち出さなかったルーフェイアのバッグは、買い足したものではちきれそうだ。

「町へ着いたら、買おう」

「え、でも……」

「いいんだ」

きっぱり言つて、それ以上の反論を封じる。ここ数日で良く分か

ったが、遠慮がちな性格のこの子は、こうしないと何がなんでも拒むのだ。

「ルーフェイアのおかげで、アヴァンでのホテル代も、浮いてるんだ。だから気にしなくていい」

理由らしきものも付け加えてやると、やっとルーフェイアは納得したようだった。

列車が止まる。軽い足取りで、ルーフェイアがホームに降り立った。座っていて疲れたのか、大きく伸びをしている。

Episode : 35

「ええと……ホテルはこれから、少し離れてるんだな」

この駅はどういうわけか、町外れにある。ガイドブックによれば、街中への敷設にかなり反対があったうえ、お金の問題もあってこうなっただけらしい。

しかも大溪谷は、ちょうど町を挟んで反対側だ。だから繁華街に程近い町の中心部に、宿を取るのがふつうだった。

町の中心部へは、バスが出ている。だがどうやら、出発した直後のようだった。

大都市の列車でも、遅れるのはよくある話だ。ましてや地方都市のバスでは、どれだけ待たされるか分からない。

「仕方ない、歩くか……」

幸いもう涼しくなってきたし、元から歩けない距離ではないから大丈夫だろう。それに途中で、いい店でも見つかるかもしれない。

「すまない、ルーフエア。荷物は持つから、歩こう」

「あ、えっと、だいじょうぶです」

答えてこの子が、自分の荷物を肩にかけた。

重そうな様子はない。見掛けは華奢だが、鍛えているだけのことであつた。

駅からは、真っ直ぐ大通りが続いている。ホテルはこの通り沿いだから、迷う事もないだろう。

観光客を当て込んでか、みやげ物や軽食の屋台も、道端に並んでいる。そこから適当なものを買ってやり、並んで歩いた。

そのルーフエアの足が、ふと止まる。

「どうした？」

「あ、いえ、なんでも……」

言いながらも辺りを見回して、何かを探しているふうだ。

「何か、欲しいのか？」

「……」

言いにくそうに黙ってしまう。

「……ルーフェイア？」

心配になってそつと呼びかけると、この子が小さな声で言った。

「ここで、イマドと……初めて、会ったんです」

なるほど、と思う。ここへ来ると分かってから楽しそうだったのも、このせいだったのだろう。

「そうか。それなら少し、見ていこう」

いっしょに立ち止まって、辺りを見回す。

首都のアヴァンシティに似た、重厚な石造りの町並みは、窓辺がどれも花にあふれていた。

「きれいな町だな」

「はい！」

まるで自分のことのように、ルーフェイアが喜ぶ。

これを見るかぎり、この子が誰に好意を持っているかは一目瞭然だが——当の本人が自分で分かっているのが、困りものだ。

それ以外にも、他人をまったく疑おうとしなかったり、危なっかしいところがルーフェイアは多い。

まあそれだけに、つい庇護したくなるのだが……。

「イマドとここで会ったということは、彼はこここの出身なのか？」
訊いてみると、ルーフェイアが首を振った。

「なら、旅行か？ 珍しいな」

私たちのような上級生ならともかく、ルーフェイアたちの年で縁もゆかりもない土地に行くのは、本校の学院生では極めて珍しい。

Episode : 36

「えっと、あの、そうじゃなくて……イマドの叔父さん、ここに居て。」

だからその……長い休みだと、ここに来てるんです」
「なるほど」

身寄りが居るのにシエラの本校に在学というのは、少数派だが、居ないわけではない。それにイマドはたしか、両親は亡くなっているから、その辺が理由なのだろう。

「だとすると、いまここに居るのか？」

「あ、はい、たぶん……」

ルーフェイアがずいぶんと嬉しそうだったのにも、合点がいく。

彼がここに居るのなら、嬉しくないわけがない。

それに引き換え……。

タシユアのことを思い出して、また怒りが湧いたが、どうにか押さえ込んだ。私の個人的なことで、ルーフェイアを怖がらせるわけにはいかない。

「家が分かるなら、会っていくか？」

「え、でも……」

遠慮するこの子の頭を撫でてから、歩き出す。

「荷物だけホテルに預けて、行くだけ行ってみよう」

大渓谷観光の拠点だから賑わってはいるが、そう大きい町ではない。それに今日は移動だけのつもりだったから、このあと予定は入っていないかった。

予約したホテルを見つけて、フロントで確認する。また部屋がなかったらどうしようと思ったが、こんどはすんなり通してもらえた。「アヴァンでルーフェイアが用意してくれた部屋とは、比べ物にならないんだが……」

なんとなく言いわけめいたことを口にしながら、ドアを開ける。

「あ……」

「ん？ どうした？」

やけに嬉しそうな声をあげたルーフェイアに、尋ねる。こんなふつうの部屋が、気に入ったのだろうか？

だがこの子の答えは、もつと違うことだった。

「ベッド、ひとつなんですネ」

「——！！」

しまった、と思う。タシユアと来るつもりだったから、何もかもがそうなっているのだ。

「いや、えっと、これはその、だから……」

言いつくろえない。

「先輩？」

ちよつと首をかしげて、不思議そうに訊くルーフェイアに、やつと答える。

「だからその、イヤなら部屋を、サインに取り直すからっ！」

「え……」

ルーフェイアが、がっかりした表情になった。

「取り直すんですか……」

寂しそうに言う姿を見て、アヴァンでのことを思い出す。そっ

えばこの子は、勝手に私のベッドに入りこんで、しがみついて寝ていた。

「えっと……もしかしてこのほうが、いいのか？」

「はい！」

とたんにまた、嬉しそうな顔になる。要するに、ひとつのベッドで私といっしょに寝られると思って、喜んでいただけらしい。

それによく考えてみれば、どこをどうやっても子供のこの子に、「そういうこと」が分かるわけもなかった。

拍子抜けして、ほっと息を吐きながら言う。

「じゃあ、今夜はいっしょに寝よう」

「……はい」

こんなことを大喜びするのは、歳から言っただうかとも思うが、突っ込む気にはならなかった。むしろこんなことで喜ぶのなら、いくらでもそうしてやろうと思う。

今こそニコニコしているが、ふだんのルーフェイアは、いつもどこか悲しげにしているのだ。

Episode : 37

「ほら、そのバッグも預けよう。要る物だけ出せるか？」

「えっと……」

ホテルに荷物を預け、この子と二人、歩き出す。

ちよつと辺りを見回してから、ルーフェイアがもと来た道へと歩を進めた。

「なんだ、ホテルと駅の間だったのか？ それなら先に、行ってみるんだったな」

「すみません……」

謝り出したこの子の頭を、泣かないうちにまた撫でてやる。

「謝らなくていいぞ。行こう」

「あ、はい」

ルーフェイアがほつとした表情になった。

——我ながら、慣れてきたな。

なんとなく泣くタイミングが分かってきたし、どうすれば泣かないかもだいたい分かる。

「ここはまつすぐか？」

「あ、えっと、こっちです」

ルーフェイアの先導で、町を歩いていく。

そうしてたどり着いたところは、町のお医者さんだった。けつこう大きな作りで、人の出入りも多く、賑わっている。

医者が賑わうのはどうかと思うが、ともかくここは繁盛しているようだった。また扉が開いて、患者らしき人と、看護師らしき女性

とが出てくる。

と、向いた視線が私たちを捉えた。

「あらまあ、もしかしくなくても、ルーちゃんじゃない」
すぐにこの子のことが、分かったらしい。

「あ、えっと、お久しぶり……で……」

「イマドイマドイマド、出てらっしゃいな。ルーちゃん来たわよー」
こちらの話を、全く聞いていないようだ。

「ああもう、あの子ったら。せつかく尋ねてきてくれたのに、出てこないじゃしょうがないでしょうに。」

ルーちゃんごめんなさいね、呼んでくるからちよっと待ってて……
……つてあら、連れの方が居たのね」

どうもこの人、聞こえていないどころか、見えてもいないようだ。

「えーと、ルーちゃん、どちらさま？」

「あ、その、学院の先輩です。旅行に……連れてきて、もらって」
正直連れてきたかどうかには、少々疑問が残るが、旅行なのはたしかだろう。

「あらそうなの、よかったわねえ」

この女性、ルーフェイアのことを相当可愛がっているようだ。

「ともかくここじゃ何だから、お上がりなさいな。すぐイマドに、お茶用意させるわね」

言って、私たちを中へ招き入れる。

（……イマド、かなりコキ使われてないか？）
（そうみたいです……）

まあそれでも自分から帰るのだから、それなりに楽しいのだろう。

「イマド、何してるの！ 出てらっしゃいたら！」

この女性があがりながら、また声をかけると、少し怒ったような声が返ってきた。

「だーかーら、メシ作ってんだから、手放せねえっての！」
まるで親子喧嘩だ。

——内容が少々、おかしい気はするが。

ただ、羨ましいとも思った。実の両親ではないものの、こうして言い合える身内が居るイマドは、学院生としては十分恵まれている。

「そんなこと言ったって、ルーちゃんが来たのよ？ 早く出てらっしゃいってば」

「え？」

こんどはばたたと音がして、イマドが出てきた。エプロン姿が妙に似合っている。

Episode : 38

「そんなこと言ったって、ルーちゃんが来たのよ？ 早く出てらっしゃいってば」

「え？」

こんどはばたばたと音がして、イマドが出てきた。エプロン姿が妙に似合っている。

「シルファ先輩がこいつ、連れてきてくれたんですか？」

「いやその、連れてきたというか……」

どちらかといえば、誘拐ついでに寄っただけだ。

何かを察したのか、イマドは面白そうに笑ったが、追求はしてこなかった。

「先輩、あがってってくださいよ。いまちょうど、メシ作ってましたし。」

ルーフェイア、魚じゃねえけど、ガマンしろよな？」

「あ、うん、平気」

座らされた私たちに、手際よくお茶とお菓子とが出される。

「……ほんとに慣れてるんだな」

「休みのたんびに来て、毎日やってたら、イヤでも上手くなりますって」

ちよつと気の毒になってくる。

「あの女の人……やらないのか？」

「叔母さんですか？ 任せるほうが怖いです」
その答えに、なぜか納得してしまった。

「仕事なら、一流なんですけどねー」

「まあ、それならいいんじゃないか？」

自分でも釈然としないまま、いちおうフォローしてみる。

ルーフェイアは不満そうだった。イマドが働かされているのが、気に入らないらしい。

この子にしては珍しく、怒ったような調子で言う。

「イマド……へいきなの？」

「テキトーに手抜きしてっから、平気だつて。終われば遊んでるしな」

「そうなんだ」

あっさりと丸め込まれて、ルーフェイアがうなずいた。やはりこの辺のあしらい方は、彼は上手い。

「で、なんでここ来たんです？ 溪谷でも見に？」

「ああ」

ここへ来て大溪谷を見ないほうが、おかしいだろう。

「んじゃ、俺も行くかな」

イマドの言葉に、ルーフェイアの表情が輝いた。

「ほんとに？」

二人の様子が、見てて可愛い。ならばここに居る間、少しでも多くいっしょに居させてやろうと、私からも持ちかける。

「イマド、行けるなら、案内を頼みたいんだが……。叔母さんには、私から話をするから」

「いや、いいですよ、自分で言いますから。」

てかふだんから、『ここに居る時くらい遊んでろ』って怒られてるんで、叔父さんたち喜びますって」

要するに、見かねてイマドが勝手にやっているだけらしい。

「あらあら、何のお話？」

いったん診療所のほうへ行っていた女性——要するにイマドの叔母さん——が、戻ってきた。

「これから、どこか出かけるの？」

「今日じゃなくてさ、先輩たち、明日溪谷行ってく。俺も行ってくる」

これを聞いた叔母さんの顔が、ほころんだ。

「いいじゃない、是非そうしなさいよ。あなたったらいつも家の中で何かしてばかりで、ちつとも遊びに行かないんだもの」

「しょっちゅう来てんのに、いまさらこの町でどこ見るんだよ……」

親子のような言い合い。けっこう上手く、イマドはやっているようだ。

Episode : 39

「ともかくよかったわ。少しは子供らしく、遊ばなきゃダメよ」

「幼稚園児かよ」

二人のやり取りを、可笑しそうにルーフェアが聞いている。

「そうしたら、明日の用意しなくちゃね。お弁当作って、飲み物用意して……」

さつきも思ったが、イマドの叔母という人は、ほんとうに他人の話を聞かないようだ。

「マット要るかしら？ あ、走竜のことも誰かに言っておかなくちゃ」

「頼むからおばさん、何もしないでくれ……」

いつも振り回されているらしいイマドが、半分諦め顔で、それでも注文を出した。

「あら何を言ってるの？ せっかくルーちゃんや先輩も来てるんだもの、こういうときこそ腕によりをかけてやらなくちゃ」

「だから、それをやめてくれてば……」

殆ど悲鳴に近いところを見ると、『任せられない』というのは、本当なのだろう。

「えっと、あの、溪谷を見ながらどこか適当な店で、食べようと思っていたので……」

つい、助けに入る。

「あらそうなの。じゃあお弁当は要らないわねえ」

叔母さんが残念そうに言って、申し訳ないがちょっとほっとした。

「予約とかも、俺やつから。ゲルニドさんとなら、よく知ってっし。」

てか叔母さん、下降りなくていいのかよ。まだ診療時間、終わってねえじゃん」

「あら、そうだったわね」

イマドに言われて、初めて思い出したらしい。この人が慌てて、部屋を出て行った。

「なんだか、すごい人だな……」

「振り回されっぱなしですよ」

そう言うイマドの言葉には、実感がこもっていた。とはいえそれでも休みのたびに、遊びに来ているというのだから、やはりここが好きなのだろう。

「そういえば、何か『予約』と言っていたが……？」

ガイドを読んだかぎりでは、そういう話はなかったはずだ。当日溪谷へ行けば、簡単な手続きだけで、観光が出来ると書いてあった。

「ああ、溪谷観光の走竜扱ってる人が、叔父さんの知り合いなんですよ。だから連絡入れとくと、何かと便利で」
「なるほど」

小さな町の医師だから、それなりに知られているのだろう。その身内が行くと分かっているれば、ふつうの観光客とは違う扱いになるのは、想像がついた。

「先輩達のぶんも、俺から言っときますよ」

「——すまない」

後輩に世話になる自分が齒がゆいが、断るのもおかしいだろう。

ルーフェイアのほうは、話を聞いているのか心配になるほど、ここにこと嬉しそうだった。この調子だと、明日はずっとご機嫌に違いない。

そんな無邪気さが、微笑ましかった。

明けて翌日。

「晴れて、良かった」

「ですね」

私たちはかなり早めに待ち合わせて、溪谷の入り口まで来ていた。けっこう時間がかかるのと、暑い日中を避けるのとで、溪谷観光は早朝からが一般的だ。

谷へは徒歩か、走竜に乗ることになっている。

「いまどき走竜は、珍しいな」

「坂がけっこう急だから、コイツじゃないとダメなんですよ」
「なるほど……」

たしかに急斜面は、そのほうが安全だ。

イマドの案内で、知り合いだという竜舎へ入る。

Episode : 40

「いまどき走竜は、珍しいな」

「坂がけっこう急だから、コイツじゃないとダメなんですよ」
「なるほど……」

たしかに急斜面は、そのほうが安全だ。

イマドの案内で、知り合いだという竜舎へ入る。

「おー、来たか来たか。ほら、その使えや」

気さくそうな男の人が、入るなり声をかけてきた。

指差す先にはおとなしそうなのと、傷だらけで見るからに凶暴そうなのが、用意されていた。

「案内と竜使いは要らないんだろ？ 悪いがかき入れどきなんで、

今言われても用意できないぞ」

「ええ、だいじょうぶです」

言いながらイマドが、おとなしそうなほうを指し示した。

「先輩、そっちのに。」

ルーフェイアは、俺といっしょな。ひとりじゃ乗れねえだろ」

「え？ いちおう、乗れるけど……」

「マジか？」

驚く私たちに、ルーフェイアが答える。

「前線で、たまに乗ったから……」

「あー、それがあつたか」

話を横から聞いていて、はっとする。いま確かにルーフェイアは、
「前線」と言った。

——だとしたら、やはり。

学院内でも「少年兵あがりらしい」との噂はあったのだが、噂ではなく事実だったようだ。

ただルーフェイアは、口をすべらせたことに気づいていなかった。振り返って竜舎の管理人を見てみたが、彼も向こうで走竜の世話をしていた、聞いていなかった。

このまま知らぬふりで、黙っていようと思う。

本人が自分の戦闘能力を嫌っているのは、一目瞭然だ。それに前線というのは私も任務で出たことがあるが、とても過酷で……正気でいられない者までいる。

何よりあのタシユアでさえ、激戦の最前線でのことは、必要がなければ口にしない。

そういう場所をすっかり口にしてい、この優しい子に思いださせられなかった。

ルーフェイアとイマドは、ほほえましい会話を続けている。

「まあいいや、今からじゃめんどくせえし。ほら、先に乗れよ」

「うん……」

口でそう言いながらも、この子がためらった。

「どした？」

「この子、暴れない……よね？」

さすがのルーフェイアも、凶悪そうな外見に恐れをなしたようだ。

「あー、コイツ見かけアレだけど、ヘーキヘーキ。よく言っというたし」

「……言葉が走竜に通じるのか？」

思わず突っ込む。言葉が通じるくらいなら、暴れる走竜に手を焼く騒ぎなど、起こるわけがない。

「まあ、細かい事はいいいじゃないですか」

「いいのか……？」

何か納得がいかないが、深く考えないほうがいい気はした。この後輩、何と云うか妙なところで、常人とかけ離れたところがあるのだ。

ルーフェイアのほうはあっさり納得したようで、走竜に近づき、手をかけた。

そのまま軽々とまたがる。乗っていたというのは、本当のようだ。

「先輩、行けます？」

「ああ」

私も走竜にまたがった。傭兵隊に入っている学院生は、カリキュラムに入っているから、走竜には全員乗れる。

Episode : 41

「気を付けて行つてこいよー」

竜舎のおじさんの声を背に、歩き出した。

「下りじゃないんだな」

「あの丘まで登つて、その先なんですよ」

そんな会話を交わしながら、急な上り坂に行く。

下から見上げていたときは、さほどでもないように見えたのに、実際に歩くとかなり長い。

「うわぁ……」

丘の上まで差し掛かったところで、ルーフェイアが声をあげた。

「すごいな、ここまでとは思わなかった」

眼下に広がるのは、言葉どおりの「大」渓谷だった。見渡すかぎり、赤灰色の切り立った崖が幾重にも重なっている。

ただ、不毛の大地というわけではなかった。乾燥してはいるが、遠目にも緑が点在しているのが分かる。

振り返ると、さつき発ったルアノンの町が見下ろせた。石造りの建物と、北側の大穀倉地帯。それに南側の森林地帯とが一望できる。ちょうどこの丘を境に気候が違うのだろう、乾燥した大地と緑の沃野が、対照的だった。

「あの森もすごいな。切り開かれていないし」

「あー、あれって国が規制してて、開発ダメなんですよ」

ガイドブックでは、周辺がみな自然保護区だということだったが、思った以上だ。

「あつちも、見られるのか？」

「ええ、まあ、いちおう」

答えるイマドの言葉は、なぜか歯切れが悪かった。

「何か、問題でも？」

「いや、そういうわけじゃなくて……」

言いよどんだ彼が、走竜を操って私のすぐ近くに来る。

そして、囁いた。

（こいつの兄貴、あそこで一昨年、亡くなったんですよ）

（――！）

ルーフエアは聞こえていたはずだが、何も言わなかった。ただ視線を落として、なんともいえない表情を見せている。

「――ルーフエア、すまない」

「いいえ……」

そうは答えているものの、辛そうな表情だった。まだそのときの傷が、癒えていないのだろう。

「……先へ行こう。谷底までは、けっこうあるんだろう？」

「ええ、あんまのんびりしてつと、真っ昼間の炎天下、歩くハメになりますよ」

慌てて振った話に、イマドが上手く調子を合わせてくれた。私たちの命令で、走竜たちが下り始める。

走竜の背に揺られながら、思う。

ルーフエアが学院へ来た一昨年、この周辺でシエラの傭兵隊が大規模に展開して、奇襲作戦を遂行した。

作戦そのものは、成功だった。だが分隊がひとつ壊滅し、その最後の伝言がちょっと変わった内容で、学院内で話題になった。

分隊は敵の敗残兵2名を追いつめたのだが、片方が子供だ、と報告している。そしてすぐあと「男は終了」と報告、さらに「金髪の子」「殺される」という言葉を最後に、連絡が途絶えた。

いろいろな状況を考え合わせると、その「金髪の子」というのが、ルーフェイアだったのだろう。

この子の桁外れの戦闘能力も、納得がいった。なにしろ分隊を、壊滅させるほどののだ。

分校を飛び越えて本校へ直接入学したのも、そういう理由なら当然だろう。じっさいタシユアも、同じように直接本校へ入学している。

——可哀想に。

軍事には詳しいルーフェイアだ。相手が学院生だったことなど、最初から分かっていたに違いない。そしてふつつの子ならもっと、憎むなりなんなりするはずだ。

なのに彼女は、そういうこと無しに学院で過ごしている。傭兵というのは、命令というのはそういうものだ、この年で割り切るほどに慣れてしまったからだろう。

そこまでの子など、学院にはまずいない。かつてのタシユアくらいだ。

彼女の潜り抜けてきた修羅場がどれほどのものだったか、十分にうかがえた。常に見せているどこか寂しそうな表情も、そういうところから来るのだろう。

だからためらったが……言う。

「ルーフエイア、あとで森へ、行かないか？ その……花を、持つて」

「え……」

ルーフエイアが、驚いた表情で振り向いた。

「中までは行けないかもしれないが、入り口に、花だけでも少女の碧い瞳に、涙があふれる。」

「すみません……」

久々に泣き出してしまったこの子に、かける言葉が見つからなかった。

すぐ後ろに座るイマドが、少女の頭をなでる。

「行こうぜ、ほら、泣いてねーで」

「……うん」

走竜は変わらず、ゆっくりと歩いていた。

Episode : 42

R u f e i r

森の中は、どこまでも静かだった。

見上げて、空はほとんど見えない。厚い緑の隙間から、ちらちらと覗くだけだ。

整備された遊歩道を歩く、走竜の足音だけが響く。

昨日の大峡谷と違って急斜面はないけど、大森林というくらいだから、徒歩じゃ回りきれない。かといって人造の乗り物だと、森を傷めてしまう。

そんな理由で、ここも走竜が使われていた。

あれほど逃げ回ったのに、この森のようすを、あたしはほとんど覚えていなかった。遊歩道があることにさえ、気づかなかったくらいだ。

「まあ歩道があるとこなんて、一部だしな」

広い森だから通りかからなかったんだろうと、イマドは言う。

いまあたしたちは、森の奥を目指してるところだった。

「この座標だと、途中からは道もねえな」

「ごめん……」

つい謝る。

2年前敵に追われて、兄さんとあたしはこの森の奥深くに逃げ込んだ。だから、道なんてあるわけがない。

ただそれでも、血の跡を辿られて見つかった……。

どうしようもなかったと、わかっている。二人とも死ぬか、片方だけでも生き延びるか。そういう状況だった。

でも、今も納得は出来ない。

もしかしたらほかに、何か方法があったんじゃないか。もっと早い時点で違うルートを取ってたら、助かったんじゃないか。そんな思いが常にある。

「この先ははぐれないように、気をつけたほうがよさそうだな」

「まあ、ひたすら北へ行きや、どうにかかりますけどね」

先輩とイマドが、そんな会話をしている。

行くべき場所は、わかっていた。

あのとき停戦になってから、家のほうから兄さんの捜索隊が出された。彼らはとても頑張ってくれて……でも兄さんは、遺体で見つかった。

その正確な位置が、タベ峡谷から帰って来て問い合わせたら、わかったのだ。

——思っていたよりずっと、ルアノンの町に近かった。

兄さんと別れてから町まで丸3日かかったから、もっと遠いと思ってたのだけど、日の出とともに出れば、徒歩でも午後には着くだろう。疲れて消耗していたのと、森のなかだったのと、敵の目を逃れながらだったのとで、時間がかかってしまったらしい。

「おい、あれじゃないか？」

言ってイマドが走竜を止めた。

あたしも、緑の間に目を凝らす。

「あの、泉……？」

「ほかにこの辺、泉はここだけって聞いたし。間違いないと思う」

実家からの話だと、兄さんはこの森の中、泉に手を入れた格好で見つかったという。火傷が酷かったから……水を求めて、そこまで来て力尽きたんだろう。

涙があふれるのを、止められなかった。

走竜を泉に寄せて下りる。

水の中に手を入れる。

熱くて苦しくて、この冷たさにすがったんだろう。

「兄さん、ごめん……」

自分も死んでしまいたかった。兄さんを死なせて、なのに生きている自分が許せなかった。

Episode : 43

「ルーフェイア……」

先輩がそばへ来て、あたしのことを抱きしめる。

何か言おうと思ったけど、言葉にならなかった。先輩の腕の中で、泣くことしかできなかった。

どうしてあたし、いっしょに死ななかったんだろう……。

「ルーフェイア、ダメだ」

先輩の腕に力が入る。

「死んだら、ダメだ」

先輩の言いたいことは、よく分かった。

でも、領けない。自分だけ生きていくのは、辛すぎる。

このまま消えてしまいたい。それが本音だった。

誰も居ないところへ。何も無いところへ。そうすれば二度と辛い思いを、せずにすむから……。

そのとき、風が通り過ぎた。

はっとして顔を上げる。

「どうした？」

不思議そうに訊いてきた先輩も次の瞬間、驚いた表情になった。

「いま、何か……」

「……はい」

気のせいだと言われれば、そうかもしれない。けど、そうじゃないと信じる自分がいた。

「それ、兄貴だろ。そゆこと、あるっつーし」

イマドは気づいてるうえに、平然とした顔だ。しかもなぜか、手にしたシャベルで地面を掘り返している。

「なに、してるの……？」

こんなものを持っていたのも謎だけど、やっていることはもったいなく謎だ。

「タベ叔父さんがさ、そーゆー話ならこれ持ってって、植えてこいっただよ」

言って彼は、走竜に積んでいた袋から、何かの苗を出した。

「ここらじゃ、墓とかにこれ植えんだよな。白いきれいな花、咲くんだぜ？」

「そうなんだ……」

手にとって見ると、たしかに白っぽい、大きなつぼみがついている。もう少ししたら、開きそうだ。

「ホントは植える時期じゃねえんだけど、もともとこの森のモンだからだいじょぶだろって、叔父さん言ってた。

ほら、お前も手伝えよ。先輩もやります？」

「あ、ああ、そうだな」

あたしと先輩も、シャベルを渡される。

10個ちよつとの苗は、すぐに植え終わった。さいごに水筒で水を汲んで、たっぷりとかける。

「咲く、かな……？」

「咲くだろ。それに叔父さんとかもたまに、見に来てくれるってたし」

言って、イマドが笑った。

「落ち着いたみてえだな」

「え？ あ、うん」

花を植えたのと、何よりあの風のせいだろう、と思う。

あの時、風は囁いた。

——無事でよかった、と。

ただの空耳かもしれない。あたしの思い込みかもしれない。

でもその瞬間、感じた。兄さんが最期に願ったのは、そのことだったのだと。

だから……思う。

その願いに従おうと。生きていこうと。

先輩が、あたしの頭をそつと撫でた。

Episode : 44

Sylpha

カーテンを開けると、遙かに広がる湖が目に見え込んでくる。向こう岸は、霞んで見えない。海とはまた違う、穏やかな色だった。東西に大きく広がる、世界最大級の湖・ノネ湖。大きさでもさることながら、水がきれいなことで有名だ。

部屋の中ではルーフェイアが、簡単な朝食をのんびりと、おいしそうに食べていた。

——味が分かっているんだろうか？

いっしょに居て分かったが、ルーフェイアは繊細な見掛けに反して、あまり味を気にしない。割となんでも、おいしそうに食べるのだ。

どうやら「食べられる」おいしい」という基準らしい。ほかに、寝られればいい、着られればいいという感じで、女の子らしいことへの関心が薄かった。

いままで作ってやったケーキも、じつは味が分かってないのだとしたら、私としてはちよつと複雑だ。

まあにこにこしていたから、嬉しかったのはたしかなのだろうが……。

「今日はどうする？」

「えつと……」

いちおう訊いてみたものの、思ったとおりルーフェイアからは、困惑だけが返ってきた。自分から何か決めるのは、とことん苦手らしい。

「なら、湖に行こう。遊覧船が出てるらしい」

「あ、はい！」

こんな事で喜んでしまうあたり、本当に小さい子のようだ。

そのとき、通話機が鳴った。取って話を聞いてみると、管理棟の受付からで、客が来ているという。

「泊まりにきて、お客……ですか？」

「あり得ないな……」

だが訊いてみると、たしかに私たちの名前を言って、尋ねてきたらしい。

「その、相手の方の……お名前は？」

「この村の、クーノ・ブランザ様です」

名前を聞いてあつと思う。去年卒業した、シエラの先輩だ。

もっと年上の、私を可愛がってくれた先輩と仲がよかったせいで、面識がある。どこか地方へ就職したとは聞いたが、まさかここだとは思わなかった。

「分かりました。えっと、そちらへ行きます」

部屋に招くのはさすがに怖い気がして、自分が行くことにする。

「あの、先輩？」

事の成り行きが分からなかったのだろう、ルーフェイアが不思議そうな顔で尋ねてきた。

「この間卒業した知ってる先輩が、この辺に就職してたらしくて、会いにきたんだ。」

管理棟まで行ってくるが……来るか？」

この辺は何かの規制だとかで高層のホテルがなく、どこも離れを幾つも持った造りだ。だからロビーへ降りる代わりに、管理棟まで

歩かないといけなかった。

「えっと、あの、行きます」

慌ててルーフェイアが、朝食を口に詰め込む。

「……喉に詰まるぞ？」

それにさえ答えず、この子が朝食を食べ終えて立ち上がった。

「じゃあ、行こう」

鍵をかけて部屋を出る。

「でもどうして、先輩がここにいて……分かったんでしょう？」
管理棟への道すがら、ルーフェイアがそんなことを言い出した。

Episode : 45

「誰かに、言っただんですか？」

「いや」

そもそも言う相手がいない。なにしろ旅行で来ただけなのだ。

唯一可能性がありそうなのは、宿泊名簿にシエラ学院の名前を書いたことくらいだが……そこから分かったのだとすると、客の情報を漏らす信用のならないホテル、ということになる。

――変えたほうがいいかもしれない。

こんなふうに簡単に情報が流れるところに泊まるのは、かなり不安だ。

そんなことを考えながら、管理棟のドアを開ける。

「やあ、久しぶりだね。呼び出してごめん」

誰かが先輩の名前を、騙っているかもしれない。そこまで考えていたが、さすがに思い過ぎだったようだ。

「クーノ先輩、お久しぶりです」

栗色の髪に茶色の瞳。ちよつと気の弱そうな、おとなしげな雰囲気。以前と変わらない印象だった。

その視線が、私の隣へ移る。

「たしか君は、本校に年度途中で転入した子だよね？」

「あ、はい」

まさか自分のことまで知っていると思わなかったのだろう、ルーフェイアが目を丸くした。

「名前は……ルーフェ、だっけ？」

「えっと、その、ルーフェイア・グレイスです」
答えてぺこりと、この子が頭を下げた。金の髪がさらさらと落ちる。

「ああそうだった、ルーフェイアだね。ごめん、よく覚えてなくてありきたりの会話。だが先輩がわざわざ訪ねてきたのは、こんな話をするためではないだろう。

思い切って、切り出してみる。

「その、先輩……どうして私たちがここに居ると、分かったんです？」

「ここは小さな村だから、なんでも噂になるんだよ」
答えに呆れる。

たしかにここは、ノネ湖周辺では小さい村だ。だから噂が広まりやすいのだろう。

だがそうだとしても、平然と客の情報を流すというのは、私には考えられなかった。たしかこの村は、観光が主な収入源なのだからなおさらだ。

「ごめん、村の人は悪気はないんだ。ともかく、娯楽のないところから」

そうは言われても、納得は出来なかった。

私の様子を気づいたのか、先輩が少し話を変える。

「そのさ、僕はいまここで、診療をやっててね」

「そうだったんですか」

シエラの中でも飛びぬけて頭の良い人で、卒業とほぼ同時に医務官の資格を取ったというのは、私も聞いている。歴史の長いシエラの中でも、初めてのことらしい。

「まあたいして経験があるわけじゃないんだが、こういう小さい村は無医村になりがちだろう？　だからこんな僕でも、重用してくれるんだよ」

シエラの卒業生といえば、ほぼ全員が軍かその関係に進む。だがこういう進路もあるのだと、目から鱗が落ちる思いだった。

「で、診療所の患者さんたちは、どうにも噂好きでね」
「なるほど……」

医師なら、後輩が泊まりに来てるといふ話が知らされるのも、十分ありえるだろう。

「でも先輩、なぜ会いに？」

いきさつはだいたい分かったが、肝心のところが分からない。「せっかくだから会いに」と押しかける人もいるが、この先輩はそういうことを好まない性格だった。

先輩が視線を落として、話し始める。

Episode : 46

「それが……竜が、出たんだ」

「竜、ですか？」

思ってもみなかった話に戸惑う。

竜が村にとって問題だというのは、分かる。どこの村でもそのために、魔獣退治も兼ねてだが、予算を割いているくらいだ。

だが裏を返すなら、そのくらいありふれた話ということだ。だから部外者の私たちが、出る幕などない。

同じ事を思っただろう、ルーファイアも怪訝そうな表情だった。

「あの、村の、警備の人は……？」

もつともな疑問を口にする。

魔獣への対処は、地方ほど必須だ。このように自然の豊かな場所なら、必ず村で手練を雇って、10名ほどは常駐させている。

まあそれでも、俗に古代竜と呼ばれる超大型だったら手に負えないが……そんなものなら、私一人が増えたところで大差はない。どこかにきちんと依頼しなければ、無理だ。

訝しがる私たちに、先輩が説明を始めた。

「この村、去年山火事でかなり被害がでたんだ」

「あ、そつえば……」

いつとき話題になったから、覚えている。

「幸いこの辺は、大した被害はなかったんだけどね。南部のほうはものすごくて、まだ焼け野原のところもあるんだよ。」

で、そのせいで村が、警備人を常駐させられなくなっ
てね」「でも、単発の依頼をすれば……」

この村のように、警備人を常駐させられなくなることは、稀にある。だが魔獣は、そんなことには構わない。

だから常駐をやめてもどこかの組合に頼めば、すぐ臨時の討伐隊が派遣されるようになってる。

が、答えは予想外のものだった。

「それなんだが、僕がシエラの出身だろう？ 退治してくれと言われてしまつて……」

「そんなムチャな！」

たしかに先輩はシエラ本校の卒業だが、医務官だ。魔獣相手に戦えるわけがない。

「僕もそう言つただけど……村の人には、区別がつかないんだ。シエラの本校を出てるなら、誰でも竜くらい倒せると思つてるんだよ」

それで、ほんと困つていたのだという。

「村のお金は底をついてるし、僕が倒せば万事解決つて言つて、きかないんだよ。」

そこへ君が来たつて話を聞いたもんだから、つい……」
「そういうことですか……」

軍と関係ない人には、こういつた職種の違いは分かりづらいとはいえ、困つたことだと思う。じっさいこういうケースで卒業生や在校生が、命を落とすことがあるのだ。

「虫のいい話なのは分かつてるけど、力を貸してもらえないか？」
答えに詰まる。

力は貸したい。だが相手は竜だ。私一人では、手に余る可能性があった。

「あの、竜って……大きさは、どのくらいですか？ あと、数と種類は？」

「ルーフェイア！」

横から口を出してきたのを、思わず叱り付ける。この子が強いのは確かだが、無謀すぎだ。

だが珍しく、ルーフェイアは引かなかった。

Episode : 47

「大きさと種類と数が分かれば、必要な戦力が分かります。それから考えても、遅くありません」

正論だ。

先輩は一瞬あっけに取られていたが、ルーフェイアの質問に答え始めた。

「大きさは……足跡から見るかぎり、そうでもないかな。頭のとっぺんまで、大人の倍くらいだと思う。

数はおそらく1体。見た人がみんな、顔に傷があつたと言ってるから、まず同一だろう。

種類は、翼のない肉食のヤツだつて聞いている。ほら、立って歩くタイプの」

「じゃあ、トカゲの大きいんですね」

なんだか語弊のある言い方だが、あながち間違いでもない。

この手のものをひつくるめて「竜」とよく言うが、実際には種類が細かく分かれる。人間のように言葉を操り魔法まで使うものもいれば、火も吐けず空も飛べない下等なもの、走竜のように草食で人間が使役するものまで、さまざまだ。

今回は幸い、その下等種らしい。

「これなら、2人ならなんとかありませんか？」

「そうだな」

私1人でもぎりぎり倒せるだろうし、ルーフェイアがいるなら問題ないだろう。

そもそもよく考えてみれば、シエラをよく知る先輩が、傭兵隊の私に話を持ってきたのだ。倒せないわけがない。

むしろ驚いたのは、先輩のほうだった。

「ちょ、ちょっと待て。引き受けてくれるのは嬉しいが、その子が出ることはないだろう!」

思わず2人で、顔を見合わせる。

「本校に直接入学したのは、僕も聞いてる。けど記憶じゃ、まだ7年生だろう? やつと春から、本格的な模擬戦を始めたくらいじゃないか。

そんな子を出したら、餌食になるだけだ」

先輩の言葉をしばらく反芻して、やつと意味が分かった。要するに先輩はルーフェアが、シエラの他の子と同じ程度にしか、戦えないと思っているのだ。

「先輩、この子なら、大丈夫です。去年の秋から、任務に同行しますし……ケンディクの病院立てこもり事件じゃ、いちばんの立役者でした」

「——え?」

啞然というのは、こういうことを言うんだろ。ぽかんと口を開けたまま、先輩が石化した。

「先輩?」

「あ、いや……驚いたな。ルーフェアが本校に直接入ったのは、そのせいだったのか。

ああでも、よく考えればタシユアもそうだな。その前例を見れば分かることなのに、気づかないとは僕もボケたな」

とても頭がいい人だから、だいたいの事情をこれだけで察してしまっただけらしい。

「そしたら悪いんだが、装備を整えて、明日にでも出られないか？
僕も補助や支援ならできるから、一緒に行くよ」
「はい」

目撃情報や遭遇場所のデータはもうまとまっているだろうが、そこへ行ったからといって、首尾よく出会えるとは限らない。それに追い詰めても、取り逃がすことだってある。

ここに滞在中に片付けることを考えると、明日でも遅いくらいだ。とはいえ、村には村の事情があるだろう。今日の今日というのが難しいのは、当たり前前の話だ。

「装備なんかで、必要なものはあるかな？ 完璧にとはいかないけど、僕のツテで出来るかぎり揃えるよ」

「すみません、助かります」

シエラの傭兵隊は、装備の代わりに魔法でかなりを補うから、戦闘力のわりに軽装だ。だがさすがに旅行に來たままで、出るわけにはいかなかった。

Episode : 48

「何が要るだろう？ 武器はあるだろうから、戦闘服かな？ あとは念のための魔石か。」

あ…… ルーフェイアの戦闘服は、さすがに用意できないかもしれないな」

「えっと、あります」

こんどは先輩だけでなく私まで、啞然として言葉が出なかった。

「ルーフェイア、あるってその…… 戦闘服を、持って来てるのか？」

「はい」

当たり前、そんな涼しい表情でルーフェイアが答える。

「魔石はあんまり使わないから、少しですけど…… ツールキットなんかは、いつも持ってます」

「……」

二の句が次げなくなる。この子が戦闘向きなのはよく知っているが、ここまでは思わなかった。

「そ、そういうことなら、わりとすぐ出られそうだね。僕も急いで戻って、いろいろ頼んでくるよ」

「はい」

先輩が立ち上がる。

が、出て行くことはできなかった。

「先生っ！ 先生いますかっ！」

勢いよく管理棟のドアが開いて、男の人が飛び込んでくる。

「どうしたんです、慌てて」

「竜がつ、竜が出たんです！　それでロマグのダンナが噛まれちま
って！」

室内に緊張が走る。

「ケガの具合は？！」

「足を、食いちぎられて。でも居合わせたジャミンが銃撃つて、竜
のヤツがびっくりして落つことしたんで、とってあります」

重傷だ。

「すぐに行きます、案内してください。」

——そうだ、ラナミさん」

先輩が、呆然としていたホテルの受付の人に、声をかける。

「え、あ、はい、なんですか？」

まさか自分に話が来るとは、思っていなかったのだろう。受付け
の人が慌てて答えた。

「村長さんに連絡して、ここへ人と車をよこしてもらってください。
そのお二人、竜退治に協力してくれるそうなので」

「分かりました」

先輩がばたばたと出て行く。

「だいじょうぶでしょうか？」

「分からないな……。まあ話を聞くかぎりでは、幸い死者は出てな
さそうだが」

そんな会話をしながら、立ち上がった。

「私たちは部屋へ戻って、準備してきます。何かあったら、知らせ
てください」

「はい」

受付けの人にそう伝えて、いったん部屋へ帰る。

入るなり、ルーフェイアが着替え始めた。

「……外から見えたら、どうするんだ」

「え？」

ルーフェイアがあられもない格好のまま、首をかしげて手を止める。

Episode : 49

「見えると……困るんですか？」

——あ、たしかに狙撃されたら、困りますね」

「……」

戦闘向きはいいとして、このズレ加減はやはり問題だ。

同時に、まず着替えさせようと思う。中途半端な状態で止まっているのは、「見えているだけ」よりさらに悪い。

「と、ともかく着替えて。急がないと、いけないだろう？」

「あ、はい」

素直なこの子が、いそいそと服を着る。

その間に私も、急いで必要なものを出した。とはいえ任務で来たわけではないから、用意できるものは限られている。

少々心もとないが、手持ちでどうにかするしかなかった。もっとも精霊と武器はあるから、何とかなるだろう。

「ルーフェイア、行けるか？」

「はい」

あつという間に戦闘態勢になった後輩を連れて、部屋を再び出る。だがルーフェイアが、私を引き止めた。

「あの、先輩、武器は……？」

私が手ぶらなのを、いぶかしんだらしい。

「そういえば、ルーフェイアは見たことがなかったな」
言って、手にはめていたブレスレットを見せる。

「えっと、あの、これ、武器ですか？」

「まあ、そうだな」

そう答え、部屋から少し先、広くなっている場所まで来てから、私はプレスレットを外した。

手のひらの中に、光りが灯る。

「すごい……」

ルーフェイアが声を上げるのも、無理はないだろう。プレスレットが淡い光を纏いながら、形を変え、大鎌^{サイズ}へと変化したのだから。

「便利、ですね」

「そうでもないぞ……」

この子は何か期待しているようだが、これはこれで意外と不便だった。

「不用意に外すと、元に戻る。だから……場所によっては、危ないんだ」

海やプールでうっかり外れでもしたら、大変なことになる。ルーフェイアの表情が一瞬強張ったのも、似たようなことを想像したからだろう。

「携帯にはたしかに便利だが、常にはムリだな」

「ですね……」

事実安全を考えて、外して問題のなさそうな場所に置いておく事は、けっこう多かった。それも可能なら、武器に戻して置いておくくらい、扱いには気を使う。

まあそれでも持ち出すのが簡単なだけ、この大きさの武器としては扱いやすいほうだろう。

「でも……これ、あの、どうなさったんですか……？ ふつうに手

に入る武器じゃ、ないですよね……？」

武器のこととなるとルーフェイアは、興味が尽きないらしい。

「精霊かなにかと、関係が……？」

「よく分かったな」

この子の知識の広さに感心しながら、話だす。

「私の使っている精霊が、いるだろう？ 彼女に、もらったんだ」

「もらった……」

ルーフェイアが目を丸くした。

Episode:50

「精霊って、武器、くれましたっけ……？」

「ふつうは、ないらしいな」

ただ私の精霊は、どうも少し変わっているらしい。個性がはつきりしているのか、好き嫌いがきちんとあるようで、向こうから私についてきた。

武器は、そのときに一緒にもらったものだ。だから正確には私のものでなく、精霊の物だった。

話を聞いたルーフエアが、うらやましそうな表情になる。自分も欲しいのだろう。

「ルーフエアもいつか、見つけられるといいな」

頭を撫でてやると、この子が嬉しそうになずいた。武器を一旦、元のブレスレットに戻して、歩き出す。

「あ、良かった、ちょうどいいところに」

歩いている途中で、受付けの人と鉢合わせした。

「迎えが来ましたから。いまご案内します」

「すみません」

彼女の案内で用意された車に乗り込み、さらに現場へと急行する。辺りはあちこち血に染まって、すでに到着していた先輩が、手当てに奔走していた。

「だいじょうぶですか？」

ブレスレットを外して武器に戻しながら、声をかける。

「いま村の若いのが、足跡を追ってるらしい。すぐ連絡が入ると思

う——ザムスさん、そっちを持って！」

重傷者のことで、先輩は頭がいっぱいのようなのだ。

「仕方ない、少し待機だな……ルーフェイア、どうした？」

隣のルーフェイアが、険しい表情を見せている。

視線は……少し先の、林だ。

「——来ます」

言ってこの子が、太刀に片手をかける。

近づいてきたのだらう、こんどは私にも気配が分かった。

次の瞬間、茂みを突き破るようにして、竜が現れる。一気に迫ってくるのを、進路へ割り込んで大鎌を振るい、けん制した。
サイズ
だが。

「2匹目?!」

幸い訓練の成果で、考えるより先に身体が動く。いちばん近いものを薙ぎ、勢いを利用して反転、もう1頭の手を切り払った。

「クーノ先輩、出られますか?!」

車に乗ろうとしている、先輩に声をかける。

「今もう——うわっ!」

悲鳴。こちらの2匹を相手にしている間に、もう1匹が回りこんだらしい。

一瞬のためらいもなく、ルーフェイアが呪文を放った。

「トオーノ・センチンツァっ!」

小さな雷撃が命中して、3頭目の動きが止まる。

「いったい、何匹いるんだ?」

「分かりません。血の臭いで、集まってきたのかも……」

もつともいまは、悩んでいる暇はない。

「先輩、精霊——いきます！」

防御呪文を車にかけながら、この子が言う。

「分かった。」

——先輩！ 車から出ないで下さい！」

私が警告している間に、ルーフェアが召喚の呪いを唱え出した。

「鳴り響く時の内に棲む者よ、その稲妻持ちて我が敵を打ち砕け——
——来いっ、アエグルンっ——！」

呪いに誘われて、虚空から精霊が姿を現す。力が発動すれば、どれか1匹は動きが止まるだろう。

この状況で数が1つでも減れば、戦局が変わる。

だがルーフェアは、それでは済まさなかった。

Episode : 51

「遙かなる天より裁きの光、我が手に集いていかずちとなれ——」
同属性の呪文が、精霊のふるう力とほぼ同時に発動する。

「ケラウノス・レイジっ！」

二重に発動した雷撃が、辺りを薙ぎ払った。あの独特の、大気の
焼けるにおいが漂う。

さすがに効いたのだろう、動きを止めた竜たちの中へ、私は踊り
こんだ。

1匹の首をかき切り、返す刃でもう1匹の胸を突く。

向こうでもルーフエアが、残る1頭の懐へもぐりこみ、太刀を
急所へ突き立てる。

念のために3頭の竜の首を落とし、絶命したのを確認して……そ
れですべて終わりだった。

ルーフエアと二人、緊張を解く。

「だ、だいじょうぶかい？」

まだ興奮しているのだろう、少しうわずった声で、先輩が訊いて
くる。

「問題ありません。まだもしかしたら、別のやつが残っているかも
しれませんが、今は平気です。」

ケガした方を連れて行くなら、いまのうちにお願いします」
私の言葉にうなずいて、先輩が診療所へと車を出す。ただ言葉
とは裏腹に私自身は、とりあえずここまでだろうと思っていた。

このタイプの竜はたしかに知能は低いが、学習能力がないわけで

はない。仮に他にいたとしても、一瞬で3頭も倒されれば、とうぶんは人間を警戒する。

だから当面は、問題ないはずだ。

——それにしても。

当たり前の顔をして、太刀をざっと手入れしているルーフェイアに、舌を巻く。この子が強いのは分かっていたが……ここまでとは思っていなかった。

やったこと自体は、誰でも出来ることだ。力を発動するまでに時間がかかる精霊と、もっと早く発動する通常の魔法。この2つを組み合わせたに過ぎない。

通常の魔法はもちろん、威力のある精霊でも、範囲を広げれば効果は落ちる。だからさっきのように竜を3頭もとなると、精霊でもダメージは薄かった。

それを通常魔法で補強して、一時的にでも動きを止める。いい戦術だ。

だがとつさに判断を下し実行出来る人間は、そうはいないだろう。私も今まで思いつきもしなかったし、今すぐやれと言われれば不安が残る。

周囲の人間に被害が及ばないかどうか、じつさに間に合うかどうか、重なった威力がどうなるか。そういったさまざまな要件を加味した上で、一瞬で判断しなければいけないのだ。

いつ覚えたのかは分からないが、この子の年齢を考えると驚異的だった。

そしてまた、疑問も覚える。

——何故、と。

強いのは分かる。戦場育ちなのも分かった。鍛えているのもたしかだし、何よりこの子は場数を踏んでいる。

だがそれでも、疑問が残るのだ。

タシユアの強さは、たしかに同じように桁外れだが、理解できる範疇だ。パワー、スピード、魔力、それに冷静な分析と頭の回転の速さ。加えて、いままでにくぐった修羅場の数。こういったものが組み合わさることで、常人離れしたレベルに達している。

だがこの子は……アンバランスすぎた。

泣き虫で繊細で優しいルーフェイアが、戦闘となるとなぜこれほどの確に行動し、敵を屠っていけるのか。

先日の病院テロでのことといい、得体が知れない部分があるとしたか、言いようがない。

Episode:52

「……先輩？」

黙ってしまった私を、何か違うふうに取ったのだろう。ルーフェイアが心配そうに訊いてくる。

「だいじょうぶ、ですか？」

「ああ。ちよつと考え事をしてただけだ。

——もうすることもなさそうだし、戻るか？」

なんとなく頭を撫でてやると、少女の顔がほころんだ。嬉しそうな笑顔が、痛々しい。

「行こう」

「はい」

ルーフェイアと二人、乗せてきてもらった車で、ホテルへ戻る。運転している人の視線が、恐ろしいものでも見るようだった。

仕方ないと思う反面、やめてほしいと思う。それでも私はまだ、覚悟の上だから構わないが……ルーフェイアが可哀想だ。

まだまだこの子は子供なのだ。もっと気を使ってほしい。

かといって口にすれば、ルーフェイアがよけいに傷つくだろう。

そう思うと何も言えず、この子を抱き寄せるだけだった。

腕の中で身を硬くしている後輩の頭を、何度も撫でる。このままでは、また泣き出してしまいそうだ。

「——あの」

泣かせたくない一心で、勇気を出して運転している人に声をかける。

「え？ なんだい？」

人と話すのが苦手な私は、そこで詰まってしまつて……それでも必死に言葉を探した。

「ええと……あ、この辺で、景色のいい場所……ありますか？」

言っていることが、唐突過ぎて意味不明だ。だが幸い、相手もルーフェイアの様子に気づいて、こちらの話に乗ってきてくれた。

「そうだなあ、ここら辺でいい場所——あ、そうだ。風の丘があるな」

「風の丘？」

聞きなれない名前だ。

「ああ、地元でそう呼ばれてるだけの、ちょっとした丘だよ。ただ湖やなんかぜんぶ見えるから、なかなかの景色だね。

行ってみるかいい？」

「はい」

寄ればルーフェイアの気が、少しは晴れるかもしれない。そう思つてうなずく。

運転手の人が、ハンドルを切った。

「すぐ着くよ。そうだ、寄り道するつて連絡しておこう」

ルーフェイアにあんな視線を向けたのが、気まずいのだろう。ずいぶん饒舌だ。

それからほどなく上り坂に変わり、やがて車は止まった。

辺りは丘というよりは、山の中腹という感じだ。湖の南に広がる山脈の谷間へ、ここからの道が伸びている。おそらく山向こうの海まで、使われているルートなのだろう。

降りてみる。

「すごいな……」

思わずそんな言葉が口を突いた。

意外に高さがある丘からの眺望は、ホテルの窓から見た景色など、足元にも及ばない。

「うしろの山脈を越えてくると、最初に湖が見えるのが、ここなんだ。急に開けて風がよく通るから、いつの間にか『風の丘』って言われるようになったらしい。」

まあ今じゃ不便だから、誰も使わないけどね」
見ればルーフェイアも、景色に見入っていた。

Episode : 53

「こんなところ、あるんですね」

「ああ」

言葉では言い表せない透き通った青が、海と思うほど遠くまで広がりと、ところどころに緑の島が点在している。

この絶妙な青は、けして絵の具では出せないだろう。そういう、神秘的な色だった。

「あの島まで、うちの村から船が出てるんだ。日帰りで遊べるよ。あと、湖を半周する遊覧船も出てる」

運転手が説明してくれる。

「島に行くにはちょっと遅いけど、遊覧船なら夕日が見られて、いいんじゃないかな」

「そうなんですか？」

そんなに遅くまで運行しているとは、知らなかった。

「夏の間の、うちの村の目玉だよ。なんなら帰って、予約入れるかい？」

「はい」

夕日の湖上というのは、なかなか出られるものではない。

「じゃあ、早く帰ろう。遅くなって見られないんじゃない、つまんないからね」

運転手に言われて私たちも歩き出して——視線の先に不思議なものを見つけて、つい足が止まった。

「……石碑？」

草の中に平たい黒い石が、見え隠れしている。

「ああ、あれかい？　いつの間にかここに、置かれたんだよな。名前が刻まれてるから、誰かの墓らしい」

近づいてみると、誰かが供えたのだろう、置かれた花が朽ちていた。

表面に刻まれた文字を、読んでみる。

「ローズ……リュウローン?!」

それと、馴染みのない名前がもう二つ。動けなくなった。

タシユアはいつも夏休みになると、すぐに1週間ほど出かける。彼がどこへ行くのかは、私は知らなかった。以前訊いたことがあるが、「墓参りに」と言うだけで、具体的にどことは言わなかったのだ。

ただ身内を亡くしたというような話は昔聞いたことがあったから、たぶんそれだろうと思っていた。

もちろん、姓が同じだけで関係がない人、という可能性もある。だがリュウローンという姓は珍しいし、タシユアがシエラの傭兵隊に保護されたのは、たしかこのノネ湖の周辺だ。

そういったことを考え合わせると、おそらく間違いないだろう。

見てはいけないものを、見てしまった気分だった。

「先輩、これ……」

刻まれている名前の意味を、悟ったのだろう。ルーフェイアも何ともいえない表情になる。

「ルーフェイア、ここへ来たこと……タシユアには内緒に、してく

れないか？」

「——はい」

偶然知ったからといって、咎めるタシユアではない。それは分かっているが、ここは彼だけの場所にしておきたかった。

「おい、早くしないと日が暮れるぞー」

もともとは気のいい人らしい運転手が、向こうから大声で呼ぶ。
「すみません、今行きます！」

答えて、この場所を後にした。

乗り込んだ車が動き出す。

だが風にそよぐ草の中の墓石が、脳裏から離れなかった。

「……あの」

「え？」

見ればルーフェイアが、真っ直ぐな視線で私を見上げている。

Episode : 54

「どうした？」

聞き返すと少しの間があつて、この子が口を開いた。

「明日、ダメですか？ えっと、その、花を……持って」

思わず微笑む。

数日前、私が言つたのと同じ言葉だ。きっと、気を遣つてくれたのだろう。

「いい子だな、ルーフェイアは」

抱き寄せて頭を撫でると、この子が嬉しそうに体重を預けてきた。ほんとうに甘えん坊だ。

そのあとは、どちらもなんとなく黙つたままで、やがて車が止まつた。

「お疲れさん、着いたよ……って、なんだか人が多いな」

運転手の言葉に外を見ると、たしかにホテルの前に、人だかりが出来ている。

「なんか……影写機、持ってますんか？」

「報道がいるな……」

何か嫌な予感がする。

「すみません、裏へ回して——」

だが、言いかけたときには遅かった。車を取り囲まれ、とつさに顔を隠す。

「あー、地元の新聞だな。竜退治したからだろ。ちょっと待ってな、村長呼ぶから」

私たちが嫌がつてるのを見て、運転手の人が連絡してくれた。すぐになんだか偉そうな人と警察の人とが駆けつけて、取材人を追い払う。

後ろには、先輩の姿もあった。怪我人の治療は、無事済んだらしい。

「やあ、すみませんでした。話は先生から聞いてます。なんでも竜を、退治してくださったとか」

にこやかな顔で私たちに声をかけてきた老人が、おそらく村長なのだろう。

車の扉を自ら開けて、私たちに降りるよう促してくる。小さい村のせいか、気さくな人らしかった。

「慰労と祝いを兼ねて、会食の席を用意しました。ぜひご出席下さい」

ルーフェイアと顔を見合わせる。こういう展開は、予想していなかった。

（どう、しましょう……）

私以上に困惑した顔で、この子が訊いてくる。あまり、出たくなさそうだった。

それに私自身も、こういう席は困る。頼まれたから引き受けはしたが、学院が知らない非公式の依頼だ。大っぴらにされるのは、あまり都合が良くなかった。

「その、すみません、申し出はありがたいのですが……私もこの子も、疲れていて」

やんわりと言ってみる。

「そうは言われなくても、この村としてはいちばんの問題を、解決してくださったわけで。」

「ここは是非とも」

押しの強い村長に、どうしたのかと考えあぐねて——後ろのほうにいる先輩と目が合った。

ようすに気づいてくれて、先輩がこちらへ来る。

（どうしたんだい？）

（村長に、会食に誘われて……でも、出るわけには）

先輩もシエラの卒業生だから、これだけで理由が分かったようだ。

「村長、ちょっと」

先輩が近づいて何事かを囁き、聞いていた村長の表情が変わる。

「なるほど、そういうことなら確かに。」

お嬢さん方も、申し訳なかった。こちらとしても騒ぎになつては困るし、少々軽率でした」

そう小声で謝ると村長は、こんどは高らかな声で、周りに向かって喋り出した。

「——いやいや、これは私としたことが気が利きませんで。竜を三匹も倒したのでは、さぞお疲れでしょう。お休みになりたいのは当然です。」

皆の集、申し訳ないがここは私に免じて、この美しいお嬢さん方抜きでガマンしてもらえないか？」

かなりわざとらしいのだが、誰も反論はしなかった。ここではこういうやり方が、圧力として通用するのだろう。

Episode : 55

「もう席は用意してあるから、先に行って始めてもらえないか？ 私もすぐに、挨拶に行くから。」

それと酒場のマドさんに、追加の酒と料理を誰か頼んでおいでくれ。私のおごりだからいいものを頼む、とね」

村長の言葉に、村人がわっと沸き立った。このぶんなら私たちが出ないことも、そんなに問題にはならないだろう。

「すみません……かえって、面倒になって」

「いえいえ、お気になさらず」

辺りが静かになったところで謝ると、村長はそうにこやかに返してくれた。

「こちらとしても非公式な依頼になってしまうのを、すっかり失念していましたからね。盛大に公式の会食をせずに済んで、良かったくらいですよ」

こういうふうに返せる人だからこそ、今の地位になれたのかもしれない。

「とはいえ、何もしないのでは収まりが付きません。ホテルのほうに言って、良い部屋を用意させたいのですが……そのくらいは、お許しいただけますかな？」

「え、あ、でも……」

こういうのは、受けていいものなのだろうか？

困って先輩のほうを見る。

「村長もまったく何もしないじゃ、あとで立場的に、いろいろ困る

「んだよ」

「なる……」

「そういう世界ではちょっとしたことで、いろいろと言われたりするのだろう。」

「では、部屋を用意させますので。準備が出来たら、こちらに人を寄越すよう言つときますよ。」

「では、次があるのでこれで」

「あ、その、待ってください!」

「帰ろうとした村長を呼び止める。」

「なんででしょう?」

「あの、こういうことは……もう、なしにしてもらえませんか?」

「意味が伝わらなかつたのだろう、村長が怪訝そうな顔になった。」

「少しの間が合つて、聞き返してくる。」

「『こういうこと』とは、今回の竜退治ですか?」

「はい」

「話下手な自分に、どこまで出来るか。だがこれは、誰かが言わなければならぬことだった。」

「先輩は、たしかにシエラの卒業生ですが……医務官です。だから、戦闘訓練は受けてません」

「そうなのですか? でもシエラに在学しているあなた方は、あのとおりの強さでしょう。私たちに比べれば先生も、ずっとお強いと思います」

「いいえ」

「ダメかもしれないと思いつつ、はつきり言ってみる。」

「先ほども言いましたが、先輩は医務官です。そして医務官は通常、

自衛のための訓練しか受けません。これはシエラも同じです。

ですから竜相手の戦闘は、ほぼ不可能です。もし退治に向かえば、間違いなく返り討ちでしょう」

だが村長は、聞く耳を持たなかった。

「その話は何度も聞きましたよ。でもじっさい、そこのお嬢ちゃん
でさえ竜を倒せるじゃありませんか」

「それは……」

さすがにこれは、上手く説明できない。

Episode : 56

どうしようかと思いつつ、ルーフェイアを見る。

——辛そうな、表情。

その唇から、小さく言葉がつむがれる。

「あたしは……例外です」

泣きそうになりながら言った言葉は、嘘がないだけに説得力があった。

そのルーフェイアが、話し出す。

「あのクラスの竜だと、シエラでも安全を考えれば、上級が3名は必要です。ですからきちんと……どこかの組合に、依頼なさってください」

「いや、だが、そうは言っても……」

「——村長」

言葉を切ったルーフェイアが、村長を真っ直ぐ見る。

この子が滅多に見せない、強い瞳だった。

「もし医務官に……竜退治を依頼して死なせたりしたら、どこの組合にも、依頼を受けてもらえなくなります」

「なんと……！」

さすがの村長が青ざめる。

「い、依頼を受けないとは、それはどうして……」

「医務官は戦闘員ではなくても、プロです。そのプロの意見が無視するところの依頼は、どこも受けません。命が惜しいですから。」

仮に受けたとしても、おそらく通常の数倍の値段です」

理路整然とした話に、私までが圧倒される。ふだんのおとなしくて気弱なようすが、嘘のようだ。

だが同時に、どこかで納得してもいた。

以前任務に同行してもらったときにも、戦闘関係となるとこの子は、信じられない観察力と判断力を見せた。裏を返せばそれだけ……過酷な環境をくぐり抜けてきたのだろう。

泣き虫で甘えん坊のこの子が持つ、そういう一面は、驚きを通り越して悲しかった。

「村長、この子の言うとおりです。ですからもう、こういうことは二度と……」

ルーフェイアの頭を撫でてやりながら、言う。きっと内心では、この子はこのいう自分を、嫌っているだろう。

「……分かりました。事情をよく知らず、危うくともないことをするところだったようですね。」

お嬢ちゃん、教えてくれてありがとう」

「お嬢ちゃん」と呼ばれたのが嫌だったのか、一瞬ルーフェイアが、不満そうな表情になる。いちおうその辺のプライドはあるらしい。

——見かけが見かけだから、誰も年相応には扱わないだろうが。ようすに気づいた村長が、慌てて言いつくろった。

「いやいやごめん、別にお嬢ちゃんを子ども扱い——あ」
私もクーノ先輩も、これには思わず笑い出す。
村長もバツが悪そうに頭を掻いた。

「まあその、もう 先生に頼むなんてことはしないから。お嬢ちゃん、それで許してくれないかな？」

言いつくろうのを諦めたのだろう。そんなふうに言う村長に、ル
ーフェイアも微妙な表情ながらうなづく。

「許してくれてありがとう、お嬢ちゃん。」

では私がありますので、これで失礼をば。部屋の用意が出来
たら、どうぞ移ってください」

そう言って、村長が出て行った。

Episode : 57

「すまない、二人とも助かったよ」

姿が遠ざかるのを見ながら、先輩が言う。

「正直、もうこの村を出るしかないと思ってたんだ」

そこまで聞いて初めて、いまの村長とのやりとりだけでなく、竜退治のことも言われていたのだと気づく。

「本当は正規の謝礼を、出すべきなんだろうが……」

「先輩、気にしないで下さい。それに私たちも……学院に知れたら、困ります」

シエラ出身の先輩が笑った。すっかり外で勝手に依頼を受けて、大騒ぎになるというのは、他の人たちには分からないだろう。

「そう言ってもらえると助かるよ。」

——とりあえず、部屋へ戻ったほうがいい。そろそろ新しい部屋も用意出来てるだろうし」

ルーフェイアを連れてホテルへ戻ると、案の定「移る用意が出来ている」と知らされた。

「僕も手伝おう」

部屋からルーフェイアが持ち出そうとした荷物を、先輩が持つ。

「ルーフェイア、先に先輩と、新しい部屋へ行ってくれ。私はその、細かい荷物を……詰めてから、行くから」

さすがに干しておいた下着や何かを、先輩に見られるのは嫌だった。

「おいで、ルーフェイア。案内してあげるよ」

「はい」

素直にルーフェイアが、先輩についていく。

これならしばらくは、戻ってこないはずだ。なにしろルーフェイアは独りを嫌がる甘えん坊だし、先輩はタシユアと違って、それを邪険に出来る性格ではない。

いまのうちにと、急いでいろいろ鞆にしまっただが思いのほか早く、ドアがノックされた。

「入ってもいいかな？」

「あ、はい」

手に持っていたものを慌てて押し込んで、口を閉める。入ってきたのは、先輩ひとりだった。

「ルーフェイアは……？」

「あの子なら、着替えてるよ。戦闘服のままだったからね」
着替えには同席できなくて、こちらへ来たらしい。

——構わなかった気もするが。

体型もまだまだ子供だし、カーテンを全開で着替えてしまっただけ、そういう感情もまだ育っていない。

まああのままでは、先々困るだろうが……。

「荷物は、それだけかい？」

「あ、はい」

私の荷物に手を伸ばして——先輩が、動きを止める。

「先輩？」

「その、前から君に言おうとは思ってたんだが……」
なんだか深刻そうだ。

「ええと、また、竜でも？」

私の言葉に、先輩が苦笑した。何か的外れなことを言っただけらしい。

「そういう話じゃないんだ。」

——卒業したら、ここへ来ないか？」

「は？」

何を言われたのか分からなくて、しばらく考える。

Episode: 58

「ここへって……診療所の、手伝いですか？　でも私は、医務官の授業はほとんど……」

応急手当などはひととおり学んだが、それだけだ。何より人を相手にするのは、私は苦手だった。

だがそれを、どう言ったらいいものか。

黙ってしまった私に、先輩が言う。

「嫌なら、診療所は手伝わなくて構わない。そういうのを一切抜きにして、ここへ来てくれないか？」

ますます意味が分からない。

「誘っていただけるのは、ありがたいですけど……でも、あんまりそれじゃ、来る意味が……」

まさかここへ来て、毎日観光するわけにもいかないだろう。

それから思い当たる。

「もしかして、この村の……警護に、ですか？」

だとしても何年も先の話で、それまでにどこかと契約するだろうから、私に入る余地があるかどうか。

とはいえ、そう悪い話ではないだろう。のんびりしたところだし、今日のような騒ぎはそう多くない。医師をしている先輩の口添えがあれば、雇ってもらえそうだ。

もちろん、それまで先輩がここに居れば、だが。

「それなら、考えてみます。それでもし、雇ってもらえそうなら……」

……」

「そういう話じゃないんだ！」

とつぜん先輩が語気を荒くして、私は思わず黙った。何か、根本的に食い違っているらしい。

「ええと……つまり、どういう……」

「だからそういうのは抜きにして、一緒にここで暮らさないか、って言ってるんだ」

「……え？」

さつき以上に意味が分からなくて、考え込む。住むところを提供してくれるのかとも思ったが、なんとなく違う気がした。

悩む私に、先輩がさらに言う。

「だから、タシユアと別れたんだろう？」

「……勝手に決めないでもらえますか？」

自分で自分の声が、冷たくなるのが分かった。

「勝手に何も、夏休みの旅行にタシユアとじゃなく、後輩と来てるじゃないか。そう言うことなんだろう？」

「いい加減にしてください！」

気づいたときには、強く言い返していた。

「たしかにタシユアとは来てませんけど、それとこれとは別です！」
なんで私が、こんな思いをしなければいけないのか。

「あとは、自分でやりますから！ 失礼しますっ！」

鞆を掴んで部屋を飛び出す。後ろで何か先輩が言ってるようだが、聞く気もなかった。

なんで私が、またそう思う。

せっかくお金を貯めて予約も取ったのに、タシユアが勝手に出かけたせいで台無しだ。

しかも、こんなことまで言われるなんて……。
新しい部屋のドアを、八つ当たり気味に勢いよく開ける。

「……先輩？」

私の勢いに驚いたのだろう、どこか怯えたような表情の、ルーフ
エイアが居た。

「あの……？」

強引に抱き寄せる。

まるで枕か何かの代わりだが、この子は逃げなかった。満足そう
に、身体を寄せてくる。

こんな私に対する、絶対の信頼。

やわらかい金髪を撫でているうち、気が静まってきた。伝わって
くる子供特有の高い体温が、私の中の何かを溶かしていく。

「——ルーフエイア、何が食べたい？」

訊くと、この子がきよとした表情を見せた。

「えっと、えっと……」

急に言われて焦っているのだろう、困るようすが相変わらず可愛
らしい。

この子が文句を言わずについてきてくれて良かった、そう思いな
がら言う。

「今日は、とびつきり美味しいものにしよう」

「はい！」

ルーフエイアの顔に、嬉しそうな微笑みが広がった。

Episode : 59

R u f e i r

強い陽射しが、波間できらめいていた。

青い空が、不思議と近く見える。

いまいるのは、アヴァン大陸の南部で大陸列車の終着駅、ワサール国のプラジュだ。きれいな砂浜で有名で、温暖な気候なのもあって、一年中観光客が絶えない。

先輩との旅は、予想以上に長かった。

学院を出てアヴァンへ渡ってから、イマドのいるルアノンを通って、さらに列車で南下。とちゅうで2回ほど下車して、古代遺跡で有名なチメネーアや、世界最大級のノネ湖で泊まったりしている。

ただ、それもそろそろ終わりかな、と思った。

このプラジュからは、ケンデイクへの直行航路がある。どちらも知られた観光地だから、両方回るツアーは人気があるんだそうだ。休みもそんなに残っていないし、ここから船で学院へ戻るんだろう。

いろいろ見られたな、と思う。いままでずっと前線で、そのあとは学院の寮住まいだから、観光なんて初めてだ。

戦地を渡り歩いていろいろな国へ行っただけ、まだまだ世界は広いと、碧い海の中で思う。

「ずいぶん泳げるようになったな」

「はい！」

先輩の言つとおりあたしはこの夏で、だいぶ沈まなくなった。ア

ヴァンに始まってあちこちで泳いだ——シルファ先輩、泳ぐのは割と好きらしい——から、さすがに身体が覚えた感じた。

——まだ上手く進まないけど。

ただ浮いているだけならどうにかなるのだけど、息継ぎするとバランスが崩れてしまつて、前のように沈んでしまふ。

それでも泳げそうな手ごたえが出てきただけ、自分としては嬉しかった。

「一回あがろう。少し、頑張りすぎだ」

「え、そうですか？」

言つた矢先、運悪く来た大波でバランスを崩す。

「——！！」

でも溺れかけたあたしを、即座に先輩が引き上げてくれた。

「ほら、疲れているんだ。あがろう」

「……はい」

たしかに海から出てみると、身体が重い。浮力が消えたのもあるだろうけど、それ以上にだるい感じた。

「水の中は、意外と疲れるんだ」

「ですね……」

先輩がついていてくれて、ほんとうに良かったと思う。もしあたし一人なら、ムリをしすぎて溺れていたかもしれない。

あたしの様子を見ていた、先輩が言う。

「泳ぐのはまた明日にして、ケーキでも食べに行くか？」

「あ、はい！」

ほんとうは先輩が作ったケーキが食べたいけど……こんなところでそれを言うのは、さすがにワガママだろう。それに知らなかったけど、ケーキはいろいろ種類があってとてもきれいで、どれも美味しい。

シャワーを浴びて服に着替えて、先輩と二人町へ繰り出す。

「どこにするかな……」

土地勘がないから、行き当たりばったりだ。けど目抜き通りを歩くうち、小綺麗な店が見つかった。

中には工夫を凝らした手作りお菓子がいっぱいいて、美味しそうだ。奥には席があって、食べられるようになっていて。

同じ事を先輩も思っただみたいで、立ち止まってあたしを見た。

Episode : 60

「ここで、いいか？」

「はい」

ドアを開けて、お店へ入る。

強引にあたしを連れてきてしまったせい、シルファ先輩はとも
も気を遣ってくれる。正直母さんより、いっしょに居て落ち着く
らいだ。

でもそれだけに、申し訳なかった。

あともうひとつ、あまり先輩が楽しそうじゃないのも、引つか
つてた。ぜんぜん楽しくないわけじゃないけど、ちよつと物足りな
い。そんなふうに見える。

きっとこの旅行……シルファ先輩のことだから、タシユア先輩と
来るつもりだったんだろう。どうしてそれがダメになったかは分
からないけど、たぶんあたしはその代わりだ。

——ちゃんと代わりに、なってるんだろうか？

気を遣わせた上、代わりにもなつてなかったら、どんなに謝つて
も謝り足りないと思う。

じつを言うとなんか気になって気になって、こつそり実家の姉さん――
母さんには怖くて言えない――にも相談したけど、「放っておいて
大丈夫」っていう答えだった。

ただ「どうしても気になるなら、近くの別邸へ連れてきても」と
も言つてたから、まるつきりなんでもない話、って言つのも違
うらしい。

「これなんか、美味しそうじゃないか？」

「ですね」

先輩が指差したケーキは、白いクリーム(?)の上に、色とりどりのゼリーや果物が乗っていて、宝石みたいだ。

頼んで席に着く。

先輩はまた、心ここに在らずという感じだった。窓の外、どこか遠くを見てる。

「……先輩？」

「——え？ あ、すまない、何か言ったか？」

あたしが何も言っていないのにこう答えるほど、上の空だ。

「えっと、何もまだ……あの、でも、次はどこ……行くんですか？」
ずつと気になっていたことをやっと訊く。

「次？ ああ、そうだな……本当はもう、明日帰らなきゃいけないんだが」

ちよつとおかしな言い方だ。帰りたくないようにも聞こえる。

あたしは少し考えた。

休みは、まだある。最悪でも前日に帰れば、どうにかなるはずだ。もしかしたらもう少し、先輩と居られるかもしれない。そう思つて訊いてみる。

「あの、先輩、そしたら……うちの別邸に、来ませんか？」

「別邸？」

不思議そうな先輩に、あたしは説明した。

「ここからすぐの島が、買い上げてあつて……別邸が、あるんです。他の人もいますけど、泊まるだけならタダですし……」

先輩ともう少し旅行がしたくて、いろいろ付け加えてみる。

「だが、悪いだろう?」

「いえ、ぜんぜん!」

思わず言葉が強くなった。

「その、別邸って言っても、たくさん建物があつて……けっこう誰でも、泊まれるんです。」

家族で来て、長期で泊まるうちも、ありますし」

要するにシユマーの持ち物なのだけど、さすがにそれは言えないから、ちよつと説明がちぐはぐだ。

「……? 会社の、保養施設か何かなのか?」

「あ、はい、そういうのです!」

このくらいの勘違いなら、たぶんへいきだろう。

考え込む先輩を、祈るような気持ちで見る。ここで帰るのは仕方ないけど……できればもうすこし、泊まっていたい。

Episode : 61

「そうだな……もう少し、足を伸ばしてもいいな。ここから近いんだろっ?」

「はい! えっと、この町から見えます」
自分の声が、弾むのが分かった。

「見えるって……そんなに近いのか」
なんだか先輩が呆れたふうだけど、気にならない。もう少しっしょに旅行(?)なんて、夢みたいだ。

「あの、そしたらあたし、連絡してきます!」
つい勢いよく立ち上がって、椅子が倒れる。
先輩が笑った。

「いくらなんでも、急ぎすぎだろう。せめてケーキを、食べてからにしたらどうだ?」

「あ……けど、早めに……」
どっちを先にしたらいいのか、分からなくなる。
先輩がまた笑った。

「すぐ、連絡できるのか?」

「あ、はい、この先の……えっと、系列の店で」
ほんととは違うけど、まさか先輩をシュマーの隠れ家に連れて行くわけにはいかない。

「そうか。じゃあ食べたら、そこへ行こう」
「はい」

残りを食べて、先輩にお金を払ってもらって、店を出る。

「店と言ったが、どこかのホテルなのか？」

「はい、その、ホテルで。えっと、この先です」

きつとびっくりするだろうな、と思う。そんな業務は、管轄外なのだから。

でも先輩が一緒なのと、行き先とを知れば、支配人さん辺りなら分かってくれるだろう。

この町は別邸へ行く関係で、何度か来てる。だから系列のホテルの場所くらいは、覚えていた。

先輩の先に立って歩いて、そのホテルへ入る。

「おお、グレイス様！　こんなところへお立ち寄りいただくとは、光栄の極み！」

「えっと、あの……あんまり、言わないで……」

入った途端に支配人と鉢合わせして、大声で歓待？された。

「ああ、これは私としたことが！　ところで、何の御用ですか？　用件を訊いてくれたのはありがたいけど、声が大きいのはちつとも直ってない。

「えっと、その、別邸に行く用事が出来て……連絡、取ってもらえる？」

支配人が、一瞬怪訝そうな表情になる。けど後ろの先輩を見て、すぐ意味を悟ってくれたらしい。

「すぐ、行かれるのですか？」

「うっん、明日の……えっと、午後くらい？」

予定が分からなくて先輩を見ると、そうだと言つようにうなずいた。

「かしこまりました、少々お待ちいただけますか？ その間、どうぞこちらで」

指し示された近くのソファーに、座り込んで待つ。

支配人は、すぐ戻ってきた。

「明日の昼前から、棧橋のほうに船を待機させておくそうですよ。お好きな時間にどうぞ、とのことですよ」

「わかった。ありがとう」

ほっとしながら立ち上がる。

「すごいな……そんなにすぐ、使えるのか」

「使えるというか、がら空きなので……」

屋敷は迎賓館も兼ねてるから、部屋数が多いし、いつでもすぐ使えるようにされてる。ただ食材だけはその都度調達だから、明日はきっと、野菜やなんかと一緒に海を渡ることになるだろう。

それを謝ると、先輩が笑い出した。

「構わないぞ、そのくらい。むしろ、積み下ろしを手伝わないと」
「なんだか先輩、さっきまでより楽しそうで、嬉しくなる。やっぱり、帰りたくなかったのかもしれない。」

「そうだ、帰りの船をキャンセルしてこないと」

「あ、あたしも行きます」

支配人にお礼を言ったあと、日が傾き始めた町並みの中へ、あたしたちは出て行った。

Episode: 62

Tasha side

最初に目に入っただのは、変わりばえのしない天井だった。
起きだして、着替える。

壁面の棚を埋め尽くす本と、机と、その上の魔視鏡二台。寝室というよりは、仕事場か書斎の隅で寝ている、と言ったほうがいいだろう。

ロデステイオから戻ってきて、すでに数日。残った休みをタシュアは、手に入れた資料や情報を読み漁り分析するのに、費やしていた。

わざわざ行った甲斐はあった、そう思う。

予定を延ばしてなお時間が足りないくらいだったが、それでも当時の貴重な話を直接聞くことができたし、狙っていた「物」や書類も手に入った。これらを手がかりに、うまくやれば事態を変えられるだろう。

そもそもが、後ろ暗いところのある相手だ。突付けば必ず何か出る。あとはこちらが、どれだけ追い込めるかだった。

(と言っても、すぐにはムリですか)

焦るつもりはないが、かといって、あまりのんびりもしてられない。物事というのは時間と共に風化することを考えると、既に10年以上が過ぎている現在、時間的にぎりぎりと言っている。

だが調べたり分析しなくてはいけない事が多いし、場合によっては他人の手も借りなくてはならない。とても今日明日というわけに

はいかなかった。

顔を洗って、飲み物を淹れる。

この部屋に、とりたてて思いいれがあるわけではない。とはいえ慣れた場所は、旅先と違いやはり気が楽だった。

いつもどおりに用意していつものように飲みながら、ふと思い出す。

（シルファは、今頃どこにいるのやら）

学院を出る前に話したきり、ずっと会っていない。

旅先から何度が連絡したが、話ができたのは最初の1回だけだ。2回目以降は、「旅行に出ている」というのが、学院側の答えだった。

帰ってきてからも姿を見かけないとすると、長期の旅行なのだろう。どこへ行ったかは知らないが、楽しんでいれば、と思う。

そう考えるうち、ふと思ひ至る。

（1人で旅行に、出たのですかね……？）

自分が勧めたのもあって、今まで疑問にも思わなかったが、シルファは1人が苦手だ。そんな彼女が、自分だけで行くだろうか？

だが誰かを誘ったというのも、にわかには信じがたい。なにしろシルファは人が苦手だ。

（——ですがどちらにしても、いいことですか）

1人で行く気になったのなら、昔のトラウマが少しは薄れた事になる。逆に誰かで行ったなら、そういう相手が増えたという事だ。

どちらだったにせよ、悪いことではない。

そこまで考えているうちに、カップが空になった。

眺めながらまた考える。このまま資料の整理にかかってもいいのだが……お腹が空いた。

何か食べようにも、帰ったばかりのため魔冷库は空で、食堂を利用しようと部屋を出る。

学院は夏休みでも、変わらず賑やかだった。暑いのも相変わらずだが、真昼に比べればずっといいだろう。

今日のメニューはなんだろうなどと、他愛ないことを考えながら、食堂の前まで来た時だった。

「あ、タシユア、いいところに」

珍しい事に、呼び止められる。シルファと同じクラスのディオン又だった。

Episode : 63

「何か用ですか？」

例によつて感情のない冷たい声だったが、シルファとよく一緒に居て慣れているのだろ、彼女は気にする様子もない。

「用がなかったら、声かけないってば。

——シルファ、いま部屋？」

「知りません」

即答。これで会話は終わるはずだった。

「知らないわけないでしょ、一緒に旅行行ってた人が」

「彼女とは行っていないですよ。別行動です」

タシユアの返答に、ディオヌが考え込む。

「じゃあシルファ、どこ行っちゃったんだろ……」

「行き先など、提出された書類を見れば分かるはずですが」

日帰りでケンデイクへ行くだけでも、外出の許可は必要なのだ。ましてや長期の旅行なら、許可なしはあり得ない。

「上級隊の資格を持つあなたが、その程度も知らないのですか？」
ついでに毒舌を付け加えたが、ディオヌはやはり気にしなかった。

「そりゃ知ってるわよ、そのくらい。じゃなくて、居場所が分かんなくなってるの！」

予想もしない答えに、耳を疑う。

「どうということなのです？」

問いに「細かくは知らない」と前置きをしてから、ディオヌが

話し出した。

「元々は一昨日、戻ってくる予定だったらしいんだけど。でも帰る直前に、予定が変わって数日延びるって、連絡があっただって」
「別段、問題があるようには思えませんが」

全く連絡がないなら大問題だろうが、上級隊のシルファなら、この程度の事は許されるはずだ。

「それはそうなんだけど」

ディオンヌもその点は認める。

「でも、おかしくない？ あなたならともかく、真面目なシルファがそんなことするなんて」

他意はないのだろうが、ずいぶん失礼な言い方だ。

だが言い返す前に、彼女は言葉を続けた。どうやら話は続いているらしい。

「しかもいまだに、そのあとの連絡がないって言うのよね。学院がちょっと用事で連絡しようとしたけど、ぜんぜんダメだったらしいし」

さすがにタシユアの表情がわずかに変わるが、ディオンヌは気づかなかった。

「いつでも連絡が取れるようにするのが、上級隊の原則でしょ？ それをシルファが、知らないわけない。

まさかとは思うけど、何か事件に巻き込まれてたりして……」
「話はそれだけですか？」

長くなると見て、強引にさえぎる。結論の出ないことで、これ以上時間を取られるのは願い下げだった。

「ちょっとタシユア、心配じゃないの？」

「こんなところで立ち話をしているも、何も進展しませんね。時間の無駄です」

切り捨てて、その場を後にする。

ただそうは言いながらも、ディオンの言葉は引かなかった。たしかに、シルファが居場所も分からなくなるというのは不思議だ。

（いちおう、調べてみますか）

手早く食事を終え、自室へと戻る。

魔視鏡を立ち上げて、学内の通信記録をざっと当たると、すぐにシルファが入れた連絡が見つかった。だが内容はディオオンヌが言ったとおりで、予定が延びるというだけのものだ。

Episode : 64

(どこへ行つたのやら)

どちらにしてもこれだけでは、何が起こったかなど分かるわけもない。

少し考える。

事前の申請は書類で提出されているため、魔視鏡で調べることができない。理由をつけて教官から引き出すこともできないわけではないが、面倒だった。

ならばと矛先を変えて、最後の通信元である泊まっていたはずのホテルの記録へ、タシユアは潜り込んだ。

(つと、これですね)

目当ての記録はすぐに見つかった。だが、すでにシルファはチェックアウト済だ。要するにホテルを出たあと船に乗って戻るはずが、そのまま行方不明、ということらしい。

(まあ自分から連絡をしている以上、問題はありませんか)

その辺の下級生ならともかく、上級隊の資格まで持つ上級生だ。自分のことくらい、自分でどうにかできなくては困る。

そんなことを思いながら記録を眺めるうち、妙な点に気がついた。

(2人で宿泊していますね……)

シルファがいちばん誘いそうな友人というと、知る限りではディオンヌだが、彼女は先ほどの通りだ。
だとすると、他の誰かを誘ったか。

当たり前だがシルファが所属しているクラスには、ディオンヌ以

外にも女子の上級傭兵がいる。その中に、仲の良い相手でも増えたのかもしれない。

いずれにせよあと数日で、休みも終わる。その頃になればいくらシルファでも、戻ってくるだろう。

ならばその間に、少しでも例のものを片付けてしまおうと、タシユアはまた作業にかかった。

が、手をつけたところで、通話石で呼び出される。

『タシユア＝リユウロン、今すぐ学院長室へ』

学院生である以上仕方ないとはいえ、人の都合などまったくお構いなしの扱いだ。

（自分がやられたら、怒るのでしょうに）

立場に対して頭を下げるなど、タシユアにはない。敬意が欲しいなら相応のところを見せるべきで、それもせずに望むほうがおかしいという考え方だ。

——まあそれでもこここの学院長は、まだマシな部類だろうが。

長い渡り廊下を抜け、管理棟の最上階まで行く。この学院はゆったり造られているのはいいが、そのぶん移動が面倒だ。

ほどなくタシユアは、がっちりした扉の前に着いた。ノックして、部屋の奥に声をかける。

「タシユア＝リユウロンです」

「おはいりなさい」

相変わらず、のんびりとした声だ。

（年少組みでは、開けられないでしょうに。防御としても不十分ですし）

そんなことを思いながら、どれだけ歴史があるのかという、重厚

な扉を開ける。

瞬間タシユアの表情が、さらに冷たさを増した。

目に入っただのは、いつものように穏やかな学院長と――机の隣に立つ女性。

シエラ本校の生徒なら、誰でも簡単にこの女性の素性を言い当てるだろう。それほどまでに、ルーフェイアとよく似ていた。

ただし、それは外見だけだ。

「久しぶりねえ、相変わらず元気そうじゃない」

野性味と妖艶さが同居した、独特の雰囲気。学院生くらいの年頃なら、後を追いかけるものが出かねない。

――タシユアが気を惹かれた様子は、一切なかったが。

それどころか、嫌っているのを隠そうともしない。

Episode: 65

「あなたに会わずに済むのなら、体調を崩していた方が良かったです
ね」

シユマーの歴戦のツワモノさえ震え上がらせる、ルーフェイアの
母カレアナに向かって、タシユアは平然と言い放った。

さらに続ける。

「ただの茶飲み話に、逐一人を巻き込まないでいただきたいです
ね。私は酔狂で出かける方と違って、時間が余っているわけではありません
ので」

「はいはい、せっかくの夏休みなのに余裕のないこと言わないの。
そんなんじゃ、女の子に嫌われるわよ？」

皮肉を言ったのだが、相変わらずこの女性には通じなかったよう
だ。

以前に任務と称して連れ出されたときも、同じだった。元から、
そういう神経は通っていないのかもしれない。

「そんなものはジャマなだけだと、以前も言ったはずですが。それ
とももう、少し前のことさえ思い出せないほど、耄碌されましたか
？」

冷たさを通り越して、鋭利な刃物と化した声。ルーフェイアなら
これだけで、震え上がるだろう。

だがカレアナは、意に介さなかった。

「あたしもさつさと、隠居したいとこなんだけど。でもなかなか、
そう上手くいかないのよねえ。」

そういうわけだから、おばさんの話に付き合っ
てちょうだいね」

「遠慮します」

間髪いれずに断る。

「あらそう、困ったわねえ」

口ではそう言っているが、カレアナが困っているようには見えなかった。どう見ても、面白がっているだけだ。

曲がりなりにも重ねた年月、あるいは経験の差から来るモノだろうか。もしかすると単に、性格なのかもしれないが……。

いずれにせよ前回で十分に理解したつもりだったが、それでも苛立つ。

「用はないようなので、失礼させていただきます」

踵を返して、部屋を出ようと扉に手をかける。が、そこで声がかかった。

「聞く気がないんじゃないわね」

——シルファの事だったんだけど」

思わず足が止まる。相手の策に嵌められているのは分かるが、内容が内容だけに、無視も出来なかった。

「あの子いま、うちで預かってるのよねえ」

「どういう意味です」

タシユアの声から感情の色が消える。

そんな反応を予想していたのだろう。カレアナは楽しそうに笑った。

「意味も何も、言葉どおりよ。」

迷い込んだようなもんだけど、かといってそのまま返すわけにはね。で、ここへ話に来たってわけ」

「さすがシユマー、やることが違いますね」

おざなりな返答をしつつ、思索する。

カレアナの話から判断すると、現状シルファがいるのは、シュマ
ー関連の施設とみて間違いはない。

（先ほど調べたホテルの記録では、宿泊者が2人になっていました
ね）

そうとなると、同行者はルーフェアか。

予定の日程を終える直前に、まだ余裕があるからということであ
る。ルーフェアが誘ったと考えるのが妥当だろう。

（妥当ではありますが……）
何かひっかかる。

Episode : 66

「あら、黙っちゃってどうしたの？」

そしてもうひとつ引つかかるのが、このカレアナだ。

見かけと言動はともかくとして、彼女は名実共にあのシュマーのトップだ。当然それだけの権力を――是非は別として――有している。

その彼女が、何故わざわざここまで出てくるのか。

たとえ派遣要請でも、シエラはお金が支払れたのさえ確認できれば、対面交渉せずに済むのだ。むしろそうでなければ、有事のときに間に合わない。

それなのに、たかが「上級傭兵1人」に対してカレアナが来ると言うのは、大げさに過ぎる。

そもそもタシユアに用があるのなら、彼女の元呼び出せば済む話だ。カレアナは学院と、そういう契約を交わしている。

なのにわざわざ、ここへ来るというのだから、相応の理由があるはずだ。

（契約内容の修正、もしくは新規契約……）

いくつかの仮説が思い浮かぶ。

あの口のきき方からして、シルファのことも何か関係しているのは、間違いなさそうだ。

（もっとも、考えるだけ無駄かもしれませんが）

この女性に、理屈は通じない。その場のノリと勢いだけで行動するような輩だ。

タシユアが思考に沈んだのを何か勘違いしたのか、カレアナが言

った。

「言っておくけど、ここであたしに何かしても無駄なことくらい、頭のいいあなたなら分かるでしょ？」

なにしろシルファの居場所、ここから遠いんだから」

言葉の裏に何があるのかは、聞かなくても分かる。だがなお、タシユアは応えなかった。

（手を出せば、少なくとも私の気は晴れるのですがね。けれどもまずは、シルファですか）

幾つかシミュレートしてみる。

シルファがルーフェイアと一緒にという推測が正しいなら、シユマ―関連の施設とはいえ、身に危険が及ぶことはないだろう。

一方でこの推測が外れていたとしても、カレアナがこの場でシルファの名前を出した以上、何らかの形で関わっているのは確かだ。ならばやはり安全は、確保されていると見ていい。

人質は手元で生きていればこそ、人質になりうるのだ。そしてシルファのことを持ち出す以上、カレアナの手の届く範囲に、切り札として置かれているはずだった。

——かといって安心できないのが、シユマ―のシユマ―たる所だが。

形を変えられるサイズ（大鎌）の件といい精霊の完全憑依の件といい、シルファはその筋の人間からすると、垂涎の的であるのは間違いない。そしてシユマ―は、「その筋」の人間ばかりだ。

シルファが自ら漏らすことはないだろうが、いつどこで感づかれるか分かったものではなかった。

ここまで沈黙を保つタシユアに対して、さすがに疑問に思うところが出てきたのか、訝しげにカレアナが言う。

「うーん、聞こえなかったかしら？ もう一回言ったほうがいい？」
「結構です。それよりシルファの名前を出して、私に何をしろと？」
振り返って、カレアナの意図を問う。
だが何を思ったか、彼女は笑い出した。

「やっぱりあなた、面白い子ね。うちに欲しいわぁ」
「お断りします」

これは本音だ。こんな人間（？）たちの仲間入りなど、虫唾が走る。

「あら残念。ま、本人にその気がないのは仕方ないわね。

——で、シルファどうする？」

珍しいことに、ずれかけていた話が元へ戻った。

「どうするも何も、シルファに何かしているのは、そちらだと思えますか？」

答えながら、毒舌だけは突き返す。

Episode: 67

「さっさと解放するのが筋で、ここで相談される類のものでは、ないはずですがね」

「ああ、いまのとき、丁重にもてなしてるわよ。迷い込んだとはいえ、無碍にはできないしね」

どうやら推測通り、シルファの身は安全と見ていいようだ。

——言っていることが本当なら、だが。

ただこのカレアナ、意外に嘘を言わない人物でもある。それは前回連れ出されひどい目に遭った際、気づいたことだった。

「けど返すとなると、今のままじゃいろいろねえ。このままうちでずっと預かるのが、いちばんの気がするし」

「犯罪者の理屈ですね」

いくらもてなしているにしても、本人の同意なく身柄を確保している時点で、正当とは言わないだろう。

「事実を言ってるだけよ。」

とりあえずタシユア、シルファのどこまで来てちょうだいね。じゃないと返せないし」

「『事実』がどの部分にかかることやら……それにシルファを返すことと、私が行くことに、関係があるとは思えませんが」

赤ん坊ではあるまいし、外へ出れば自力で帰れるはずだ。

「関係なかったら、こんなとこまで来やしないわよ。遠いんだから」
「それほど遠いのでしたら、わざわざ足を運んでいただかなくても結構です。歓迎していませんので」

言っと、彼女は肩をすくめた。

「仕方ないわよ、サインが要るんだもの」

やはりカレアナは、何か契約をしに来たらしい。そうでなければ、直筆のサインなど要らないだろう。

（まあ、通常の派遣契約ではないでしょうね）

一定期間の契約はよく行われるが、来ているのはシュマーの人間だ。そんなものが必要なわけがない。シエラの傭兵隊で出来ることは、すべて自前で賄えるはずだ。

（だとすると……あれですか）

ひとつ、思い当たる。

どういう気まぐれかカレアナは、財力にモノを言わせてタシユアが卒業するまでの期間を、「丸ごと買い取る」契約を学院と交わしている。

教官の嫌味らしきものから察するに、生徒を指定しての、しかも卒業まで丸ごとというのは前代未聞だったらしい。だが金額で折り合いが付き支払いも済んだため、タシユアの意味とは関係なく成立してしまった。

本音を言つと、即座に破棄したいところだ。

しかし学院の傭兵隊に入った以上、派遣に関しては従うしかない。拒否するには年齢によるが、傭兵隊を辞めるか学院を辞めるかだった。

そしてその手段は、まだタシユアは使いたくなかった。ここに居て傭兵隊の仕事をしていれば、衣食住が保障されるうえ、給料等も手に入るのだ。

そんな理由で甘んじて受けているわけだが……カレアナがここへ

来たということは、似たような契約をまたしようとしているのだらう。

（狙いはシルファでしょうね）

最初ルーフェイアかとも思ったが、彼女の場合母親のカレアナから、学院へ莫大な寄付がされている。ならばそんな契約自体、必要ないだろう。

イマドの可能性も考えたが、彼はまだ傭兵隊に入る年齢ではない。それを今から買い取るとするのは、さすがに考え難かった。

となれば自分が買い取られている点から見ても、シルファが濃厚だろう。今現在、カレアナの手の内にシルファがあることも、その推測を補強する。

タシユアの考えを知ってか知らずか、カレアナが妖艶に微笑んだ。

「ともかく来てもらうわね。ちゃんと契約に則った形で、あなたの身柄は借りたから」

やはりそう来るか、と思う。最初からこのシュマーの総領は、自分を連れて行く気だったのだ。

先ほどのやり取りは、気まぐれから出た茶番だろう。この女性はそういう性格だ。

「午後一番の連絡船で出るわ。期間はそうね……最低数日は見ておいて」

カレアナが、雇い主としてタシユアに言った。

Episode : 68

Sylpha

ルーフェイアに連れられて来た島で、もう数日が過ぎた。

どうかと訊かれたら、「快適」と答えると思う。

宿泊場所として提供された屋敷の一室は、ホテルの極上の部屋よりまだ上等だ。食事もそれに見合ったものだし、ビーチは占有に近い。

他の人が、居ないわけではない。ルーフェイアが来る前に言っていたとおり、泊まりに来ている人をビーチで見かける。ただ私たちの居るのは、別の建物を使っているとのことで、あまり顔をあわせることはなかった。

ルーフェイアは、いま居なかった。「家がこの島を所有している」というだけあって、ここではいちおう主人になるらしい。そのせいか、時々この従業員(?)らしき人から相談を受け、何かをしに行く。

ただ私の見るかぎり、ルーフェイアはこの従業員に、かなり好かれていたようだ。大人しいうえに優しい子だから、皆に愛されている。

そんな子がシエラに居なければいけない理由を思っ、少し辛くなった。もしあれほどの戦闘力がなければ……こういうところで愛され、何一つ不自由の無い生活をしているだろう。

だが一方で思う。それは本当に、幸せなのだろうか。

もちろんルーフェイアやタシユアのような育ち方が、いいとは思

わない。だが何も知らず何の不自由もないというのも、幸せとは少し違う気がした。

空を見ると、陽が少し傾いている。

のんびり出来るのはいいが、独りがやっぱり嫌で、私は屋敷へ戻った。

「お帰りなさいませ。グレイス様なら、裏庭のほうに行かれましたよ」

私の姿を見つけて、若い女の人が話しかけてくる。

ここは以前行ったアヴァンの公爵家と違って、働いている人たちが気さくだった。慇懃なところもないし、私を見ると気安く声をかけてくれる。

だがせっかく教えてもらったのに、「裏庭」と言うのがどこか分からなかった。「裏庭」と言うからには、この建物の裏手なのだろうが……。

けれど私が言うより早く、向こうのほうから言ってくる。

「あ……申し訳ありません、『裏庭』だけじゃ分かりませんよね」不思議な事にここでは、問うより先に答えが返ってくるが多かった。それだけ、訓練されている人たちなのかもしれない。

「そちらに、この屋敷を回り込んで、道がありますよね？」

言って彼女が、私の左手を指し示す。

「ここを道なりに行くと、庭というか広場があるんです。グレイス様は、そこにいらつしゃいますよ」

「ありがとうございます。でもその前に、身体を流したいので……」
海から上がってきたばかりで、着替えないことには始まらない。

「あ、すみません、気がつかなくて。すぐに準備しますから、いつ

もの離れへどうぞ」

「こちらこそすみません」

預けておいた着替えを受け取り、屋敷の脇にあるシャワー室——お茶まで飲める——で身体を洗う。それから着替えて髪を乾かして、気づけばだいぶ時間が過ぎていた。

さすがにもう、裏庭にはルーフェアは居ないだろう。そう思いながら、なんとなく行ってみる。

「あ、先輩！」

意外にも何人もの子といっしょに、金髪の姿がそこにはあった。その子たちを見て、足が止まる。

「先輩？」

不思議そうに問いかけてきたルーフェアに、私は笑顔を作って答えた。

「ずっと、ここに居たのか？」

「はい」

自然な表情のルーフェア。構えてしまう自分が、ひどく情けなくなる。

ルーフェアの周りに居るのは……どう見ても、何か障害を持つ子ばかりだった。それも、知的なものだ。

Episode : 69

「この子たちは？」

訊くと、少女が視線を落として答える。

「うちの子たち、なんです。」

身体が弱い子が多くて……ここでよく、静養してて」

詳しくは分からないが、どうやら関係者の子供たちで、ここへ静養をかねて遊びに来てにいるらしい。

慣れているのだろう、「あーあー」と言葉にならない声をあげる子に、ルーフェイアは優しく微笑んだ。

「もう、お部屋に帰る？ お腹空いたでしょ？」

驚いたことに、話しかけられた子たちが嬉しそうに笑った。

「……先輩？」

「いやその……こういうふうに、笑うんだな」

シエラには、こういう子は居ない。だからこの年まで、こんなに間近にこういう子たちを、見たこともない。

たまに町で遠目に見ながら、何も分かっていないのではないかと、そう思っていた。

だが、それが間違いだったと気づく。この子がルーフェイアに向けた笑顔は、限られた能力で意思を伝えようとしていることを、はつきり示していた。

「だー？」

「あ、えつとね……あたしの、先輩。いい人よ？」

ルーフェイアの説明が通じたのだろう。ひとりが私の前に来て、見上げた。

お世辞にも聡明とは言えない、そういう表情。その顔が、笑顔に変わる。

——可愛かった。

初対面の私を、好きだと言っているのが分かる。

「……はじめまして」

言ってこの子の頭を撫でると、さらに嬉しそうな表情になった。その笑顔につられて、私もつい笑う。身体こそけっこう大きいけど、シエラに居る小さい子たちと、変わらないと思った。

「グレイス様ー、すみません、助かりました」

声に振り返ると、見知らぬ女性が手を振りながら駆けってくる。

「あの子、やっと落ち着いて。ありがとうございました」

「ううん。あたしも久しぶりに、みんなに会えたし」

短いやり取りのあと、女性が子供たちに声をかける。

「さ、おやつあるから帰ろうね」

世話係なのだろう、子供たちは大喜びで女性のあとをついていった。

「やっぱりああいう子の世話は、いろいろ……たいへんなんだな」

「ええ……」

ルーフェイアは否定しない。つまり、そういうことなのだろう。

「いつも、あの子たちと遊ぶのか？」

「えっと、ここじゃない実家なら、いつもです。」

うち、ともかく手が足りなくて……でもあたしでも、遊ぶのはできるのだ」

なんだかいまいち要領を得ないが、要するにたまに帰る場所では、

いつも相手をしているらしい。だから慣れているのだろう。

同時に、面白いところだと思う。

いままでのいろいろなことを見るかぎり、ここでのルーフェイアの立場は、間違いなく「令嬢」に相当するものだ。なのにそれが、走り回って手伝いをしているというのだから、かなり変わっている。気さくなこの人たちといい、ふつうの「お屋敷」とは、少し違うようだった。

Episode : 70

「私たちも……戻るか？」

他に誰も居なくなつてがらんとした庭に、なんとなく言う。

「……ですね」

二人で日の傾きかけた庭を、屋敷のほうへ戻る。

夕暮れが迫るたび、少しだけ憂鬱だった。

休みの終わりが近い。あと数日のうちには、学院に戻らなければならぬ。

分かつてはいるのだ。何も考えず、ただ帰ればいいのだと。

なのに、躊躇う自分が居た。タシユアの事を考えるたび、どうにも複雑な気持ちで、ずっとここに居たくなる。

帰ればタシユアは、何ごともなかったように私を迎えるだろう。

そのことが癢に触った。

いろいろ立てた計画も、ホテルの予約も何もかも、なかったことになってしまう。私一人が、右往左往しただけになってしまう。

ワガママだとは思いつつも、やっぱりそれは嫌だ。

そんなことを考えながらルーフェイアと一緒に屋敷へ戻ると、先客が居た。

「姉さん！」

嬉しそうに、この子が駆け寄る。

同じような金髪に碧い瞳の……車椅子の女性。年齢は、私より上だろうか？ 二十代の半ばくらいに見える。

姿は似ているが、ルーフェイアのような優しさや儚さよりは、強

さを感じる人だった。

「姉さん、いつ来たの？」

「さっき、着いたところよ。」

——ルーフェイア、そちらが先輩かしら？」

彼女の言葉に、慌てて頭を下げる。

「おじゃまして……すみません。シルファ＝カリクトウスです」

私の挨拶に、彼女が微笑んだ。

「こちらこそ、挨拶するのが遅れて申し訳ありませんでした。サリーアと申します。ルーフェイアの従姉ですわ。」

シルファさんのことは、ルーフェイアからよく聞いております」
丁寧な言葉遣いに、にこやかな表情。だがなぜか、圧倒される。

「何かご不自由なことがないと、いいのですけど。この者にはよく申し付けておきましたが、大丈夫でした？」

この人を前にして「問題がある」と言える人が、いるのだろうか。
一瞬、そんな思いが頭をよぎった。

理由が分からないが、ともかくそういう感じの人なのだ。

「何かあったら、遠慮なく言ってくださいね。ルーフェイアはこのとおり、抜けた子ですから」

「姉さん……」

「あら違ったの？」

少し怒ったようなルーフェイアと、面白そうに笑う従姉のサリーア。どうやらここでもルーフェイアは、オモチャにされているようだ。

拗ねる様子が可愛くて、気の毒と思いながらも、私もつい笑う。
サリーアが、ルーフェイアの頭を撫でてやりながら言った。

「お夕食はどうなさいます？ もしご予定がなければ、私も一緒に
緒させていただければと、思うのですけれど」

「あ、はい、もちろん」

気づくとそう、答えていた。だいいちこの状況で、断れるわけも
ない。

この女性が、にっこりと微笑む。

「嬉しいですわ、許していただけで」

言葉遣いといいしぐさといい、ルーフェイア以上にしとやかそう
だ。どこかの貴族の娘と言っても、通用するかもしれない。

そこへ、この人らしい男性が来た。私たちの手前で止まって、
丁寧に一礼する。

サリーアが私たちに会釈して、男性を近くへ呼び寄せた。

Episode : 71

「……それで、先方はなんと？」

何かを耳打ちされた瞬間、彼女の纏う雰囲気さがらりと変わる。

「それが条件が変わったとの理由で、契約の修正を求めておりまして……」

「そう。」

——たしかあの社はユズベクで、魔力石の原石をを採掘していたわね。標準のレートより、ずいぶん安いと有名ではなかった？」

その辺の野菜の値段でも訊くような、そんな口調。

「はい、仰るとおりでございます。」

ずっとサリーアの瞳が、細められた。

「ルートは洗ってあるのでしょうか？　すぐにまとめて出してくださいね。交渉には私が出ます。」

そうそう、ロデステイオどなたかと、話せないかしら？　交渉のあとでいいわ」

「かしこまりました」

人を見かけで判断してはいけないというが、ここまで外見を裏切る人も珍しい。足の悪い、気の毒な深窓の令嬢と思っていたら、じつは雌豹だったというやつだ。

去っていく男性を見送ってから、ルーフェイアの従姉は、私たちのほうに向き直った。

「ごめんなさいね、なんだか落ち着かなくて」

さっきとはうってかわって、穏やかに微笑んで言いながら、ルー

フェイアの頭をまたなでる。

「すぐ……出るの？」

「いいえ。交渉するにしても、明日以降の話ですもの。それに、資料が揃わなくてはね」

不安そうなルーフェイアに、優しく答える。先ほどの迫力が嘘のようだ。

「でも事前に少し、見ておかないとダメね。夕食まで、資料に目を通してくるわ。」

シルファさん、ごめんなさい。また後ほど」

言って行きかけたサリーアが、ふと止まって振り向いた。

「そうそう、忘れてたわ。ルーフェイア、おばさまがそろそろ、ここへ着いてよ」

「え……」

文字通りルーフェイアが石化した。理由は良く分からないが、その人に会いたくないらしい。

「面白いものを、持っていくとおっしゃってたわよ。」

——あら」

サリーアが途中で言葉を切った。なんだかずいぶん、楽しそうな表情だ。

「噂をすればなんとやら、ですわね」

「え？」

後ろを指し示されて、振り返る。

「あらあ、みんな勢揃い？　ちょうど良かったわ」

豪華な金髪に、海の碧の瞳。ルーフェイアやサリーアによく似た

この女性が、話に出てきた「おばさま」だろう。

だがそれよりも、私は隣に目が行く。

白にも見える銀髪に、紅い瞳。

——タシユアだった。

いつもと変わらない様子で、私に訊いてくる。

「旅行はどうでした？ それにしても、妙なところへ迷い込んだものですね。シエラの上級生がほいほい人の後についていくのは、どうかと思いますが」

この言葉を聞いて思った。タシユアは……何も分かっていない。私が言われたとおり旅行へ行つて、それなりに楽しんだと思っている。

Episode : 72

「おやおや、話しかけられたのに黙っているとは、休みの間に礼儀まで忘れましたか？」

「——うるさいっ！」

無性に腹が立って、手に持っていたバッグを投げつける。だが彼は、軽々と受け止めてみせた。

「なんで取るんだっ！」

「なんでと言われましても」

何のことか分からない、そんな口調。

いつもそうなのだ。タシユアはいつだって、思うとおりに好きなことをして、好きなところへ出かけて。

相手に迷惑がかからなければ、好きにしてい。それがタシユアの考え方なのは分かっている。そしてたしかに、迷惑がかかったわけではない。

だが、納得できるわけもなかった。

「何を怒っているのかは知りませんが、とにかく落ち着いてはどうです」

「……………」

もう何も言う気にならず、きびすを返す。本当に分かっている。そのままっすぐ部屋まで行って、ドアを開けようとしたところで、人影に気づいた。

心配そうな表情のルーフェイア。

「ついてきて……くれたのか？」

上目遣いに私をみながら、この子がうなずく。きつと事の成り行きに驚きながらも、慌てて後ろから来てくれたのだらう。

「ルーフェイアは、いい子だな……」

抱き寄せて、頭を撫でる。ルーフェイアがすぐに、私に身体を預けてきた。

人を疑わないこの子に、どれだけ助けられて癒されただらう？

タシユアはいろいろ言うが、この子のこういうところは、悪いものではない。

毎回自分でも同じことで呆れるが、ルーフェイアの頭を撫でているうちに、気が静まってきた。

息をひとつ吐いて、言う。

「何か、飲むか？」

「あ、そしたら、あたしが」

気を使ってくれたのだらう、この子がぱたぱたと、部屋にしつらえられた小さな水場に向かう。

「えっと、カップこれで、お茶は……」

次の瞬間、けたたましい音がした。肘でも引っ掛けたのだらう、カップと受け皿とが床に散らばる。

「あ……」

ひとつ欠けてしまつて、ルーフェイアが泣きそつだ。

「手は、切らなかつたか？」

「え？ あ、はい」

急に違つ話を持ち出されて、この子が泣きかけていたのが止まる。

「良かった。片付けは私がやろつ」

慰めてやりながら、またタシユアのことを思う。

——こんなはずじゃ、なかったのに。

ただ単に二人で旅行がしてみたくて、ついでに驚かせたかっただけだ。なのに些細な食い違いから、こんなことになってしまった。

誰が悪いわけでもないのに、どうすることも出来ず、納得も出来ず。

そんな自分に、余計に嫌気がさす。

なんとなく感じ取ってくれているだろう、黙って傍に居てくれるルーフェイアの頭を、また撫でて立ち上がった。

お茶を淹れてやり、テーブルの上にあったお菓子を並べると、この子が下を向く。

Episode : 73

「すみません、あたし……」

「気にするな、食べよう」

傾きかけた陽と、美味しいお菓子と、整った部屋。ここだけ時間が止まったようだ。

そして、思う。このままここに居ようかと。

もちろん、実際には出来るわけもない。ただそう思ってしまうほど、ひどく疲れていた。

甘さを控えた、さくさくとした食感の焼き菓子。なのに、ひどく味気ない。

一緒に食べているルーフェイアが心配そうな表情で、そんなふうに見わせてしまう自分が、さらに情けなかった。

「その……まだ、飲むか？」

言いながら立ち上がって、答えも聞かずにお茶を継ぎ足す。

「ありがとうございます」

それだけで、会話はまた途切れた。時折この子は何か言いたそうにするが、上手く言えないのか、すぐ下を向いてしまう。

どうにかしないと自分でも思うが、私もため息についてあらぬ方を見るだけだった。

と、ドアがノックされる。

「入るわよー」

答えるより早く、先ほどの「おばさま」が入ってきた。

「母さん！ もう、どうしていつもいきなり」

「あら、自分の家だもの、別にいいじゃない」
その場で言い合いが始まる。

「けど、今ここ、先輩の部屋！」

「あらそうだったの？　じゃあ次から気をつけるわ」
やり取りから察するに、親子喧嘩らしいが……。
そこまですばんやり思ってから、驚く。

「る、ルーフエイアのお母さん?!」
「そうよ」

あっけらかんと言われて、思考停止する。
確かに似ている。同じような金髪だし、瞳の色もそうだ。年の差
もまあそうだろう。
だが……。

「ルーフエイア、ホントにそうなのか？」
「はい……」

小さくなつて答えるこの子に、思わず同情した。これは確かに、
「いい母親」とは少し違う。

「母さん、それで何の用？」
「えーっと、何だったかしらね」
ルーフエイアがため息をついた。

「ならもう、いいでしょ……」
「良くないわよ。ああそうそう、思い出した。サリーアが探してた
わよ」

言動に脈絡がなくて、ついていくだけでも大変だ。これでは周り
は、振り回されっぱなしだろう。

「姉さんが？ 何だろう……」

「何でもいいじゃない、早く行ってあげなさいな。あの子、忙しい子だしね」

分かったというようにうなずいて、ルーフェイアが立ち上がった。それから心配そうに、私を見る。

「行ってくるといい。待たせたら、悪いだろう？」

「すみません、すぐ戻ります。」

——母さん、先輩、困らせないで」

釘を刺してから、ルーフェイアが部屋を出て行った。

Episode : 74

「まったくもう、あの子ったら親をなんだと思ってるのかしら」

閉まるドアを見ながらひとりごちるお母さんに、相槌を求められなくて良かった、などと思う。申し訳ないが、同意が出来ない。

「やれやれ、まあいいわ。シルファ、だったわね？　いつから学院に？」

「え？　8歳からです」

視線が合う。海の底を覗くような、ふしぎな碧の瞳だった。

「8歳からって言うと、かれこれ10年近くだわね」

お母さんの手が、すつと伸びる。

「大変だったわね」

言葉と共に、抱き寄せられた。恥ずかしくて少し抵抗してみたが、意外に力が強くて逃げられない。

あるいは私自身に、あまり逃げる気がなかったのかもしれない。お母さんが続ける。

「辛いのに我慢して、よく頑張ったわ。いい子ね」

瞬間、何も考えられなくなった。

そんなつもりはなかったのに、涙がこぼれる。

——そう、辛かった。

両親が死んだのも、居場所がなかったのも、学院へ来たのも、私にはどうすることも出来なかった。だから、そういうものだと思え入れるしかなかった。

けれど自分でも分らないところで、やっぱり辛かったのだと気づく。

「少し、ゆっくりして行きなさい。学院のほうには、あたしから適当に言っておくから」

もし母親が生きていたら、こんなのだろうか？ 甘えてはいけないと思いつつも、腕の中でほっとしている自分が居た。

頭を撫でられる。

「大丈夫、頑張りすぎて疲れただけよ。少し休めば、あなたならすぐまた、進めるから」

「……はい」

いろいろ言いながらもルーフィアが、この人に懐いている理由が、分かった気がした。

顔を上げると、また目が合う。いたずらっぽい笑顔に、優しい瞳だった。

「さて、ずっとこうしてあげたいけど、そろそろルーフィアが戻ってくるかしらね？ 後でまた夜にでも、話を聞きに来るわ」

「……すみません」

申し訳ないのと、恥ずかしいのとで謝ると、この人がまた笑った。

「いいのよ。あなたたちがこんな思いするのも、元を正せばあたしたち大人のせい。謝るのはこっちだわ」

偽善とも取れそうな言葉。でもこの人はたぶん、そういうのをすべて承知の上で、なお言っているのだろう。

いろんな意味で、ふしぎな人だった。

「そうそう、あなたシエラの上級隊よね？ そうしたらあとで、手合わせしてもらおうかしら」

突然こういうことを言い出すあたりは、困りものだが。ただ、憎めないのも確かだ。

「ルーフエでもいいんだけど、お互いクセ知ってるのがねえ。何よりあの子、嫌がって逃げちゃうし」

それはそうだろうと内心思う。が、さすがに口にはしなかった。この人は気にはしなそうだが、あえてコトを荒立てる必要もない。

Episode : 75

「あー楽しみだわ。久々に面白そう。なんなら今から外へ行く？」
表情を見る限り、本気で手合わせしたいようだ。今が何時か、全く考えていない。

「あの、でも、もうそろそろ暗く……」

「あらそうだった。夜間訓練と洒落込んでもいいけど、今やることじゃないわね」

意外にもあっさりと、この人が引き下がる。どういつ思考回路かは分からないが、無事に私と同じ結論に達してくれたらしい。

「んじゃ、その件は後日として。」

——あんまり、思い詰めないほうがいいわよ？」

言いながらこの人が、私の額をつついた。

「はい」

その通りかもしれない、と思う。悩んでかえって出口が見えなくなるのは、よくある話だ。

私の顔を見て、ルーフェイアのお母さんは満足気に笑った。

「そうそう、そうこなくちゃね。じゃあまた夜にでも、時間が取れたら遊びに来るわ」

ひらひらと手を振りながら、この人が部屋を出て行くこうとして……
…ドアの前で不意に立ち止まった。

振り向いたお母さんと、視線が合う。

「それにしても、タシユアもタシユアだわね」
なぜか面白がるような口調。

「実力はともかく、女心は分かんないし、他人に何かするってこともないし。ひねくれてるし毒舌だし、好き勝手だし」

「……………」

癢に触るのだが、すべて事実だから言い返せなかった。

「あなたのことも、パートナーとか言う割にはほったらかしだし。いつそ、別れたほうがいいんじゃない？」

さすがにカチンと来る。

「ああいうのと一緒にになると、苦勞絶えないわよ？」

からかうように言われて、もう我慢出来なかった。

「タシユアは、そういうんじゃない！」

「あらそお？ その割には、あなたに嫌がらせばかりじゃない。気づいてないからお悪いわね」

悔しいが言い返せない。そして言い返せない自分が、余計に悔しい。

「何があつたにしろ、それであなたにまで嫌な思いさせるくらいなら、いつそ引きこもってればいい——」

「違うっ！」

言ったときにはもう、テーブルの上の水差しを掴んでいた。

中の水がぶちまけられて、この人がずぶ濡れになる。

「タシユアは、タシユアは……………」

あとの言葉が出てこない。

そんな私の前で、ルーフェイアのお母さんは笑い出した。

「かわいいわあ。そんなにタシユアが好きなのね？」

水をかけられたことなど、微塵も気にしていない。むしろ私のほうが、虚を突かれて思考停止する。

「あつさり挑発に乗って、ムキになっちゃって。でもまあ、いいことだね」

言われて、やられたと思う。この人は最初から分かっている、あんなことを言ったのだ。

——理由は、よく分からないが。

何かを伝えたかったのかもしれないが、言動を見ていると「単に面白かった」だけの気もする。

ただお母さんには申し訳ないが、動いたせいかちよつとすつきりした感じだ。

「さて、今度こそ行くわ。

シルファ、しばらくこの屋敷に居なさい。時間が経てば、また変わってくるだろうから。もちろん、帰りたければ帰っていいしね」

「……すみません」

私の言葉に、またひらひらと手を振って、今度こそお母さんは出て行った。

Episode : 76

Tasha Side

強引に学院から連れ出され、着いたのは小さな島だった。学院の本島より、まだ狭いだろう。

カレアナの話ではケンディクから海を越えた、ワサールの南部ということだった。そこにシュマーの保養施設として、島を丸ごと買い取ってあるらしい。

もっとも用心深いタシユアは、その話を鵜呑みにしたわけではない。だがカレアナが嘘をつく理由がないのと、自分で計測した太陽の角度などから、おそらくそうだろうと思っていた。

（念のため精霊を持ってきて、正解でしたか）

普段から精霊を憑依させることをほとんどしないタシユアだが、持っていないわけではない。そもそも学院の傭兵隊には、無ければ貸し出しされるくらいだ。

ただ上級隊ともなると、かなりの人数が自前の精霊を持っていた。

実際には精霊を発見・捕獲した場合、学院側に報告・提出することになっているが、多くはそれを無視している。しかも学院のほうも、「その場合は何があっても自己責任」と、黙認していた。

タシユアもまたその例に漏れず、手持ちの精霊は全て、自力で捕獲し未提出のままだ。

その中で今は、飛行系の精霊を持ってきた。

多くの場合精霊は攻撃に使うが、それしか出来ないわけではない。

実際これは、攻撃させずに現界時間を引き延ばすことで、巨鳥の代わりになる。

もちろん、長時間は無理だ。だがこの小島から近くの街までなら、十分に持つだろう。

シユマー関連の施設だからというだけではなく、こういった小島では気象条件次第では、簡単に孤島となりうる。さすがに食料などの備蓄はあるだろうが、脱出手段は多いに越したことはない。

それに、タシユアをここに連れてきたカレアナにも、敵は多いのだ。一緒に居ては、何かに巻き込まれる可能性も無視できなかった。

棧橋は小さいが、造りはしっかりしていた。今乗ってきた船の他にも、学院で使っている連絡船のような、小型艇が泊っている。おそらくは最寄の、プラジユの街まで往復しているのだろう。

すぐ近くに、建物が見える。あそこが今夜の宿泊場所らしい。

「こつちよ」

だがカレアナは、違う方向へ歩き出した。とりたてて訊くこともないので、黙ってあとをついていく。

島内は、きれいに整備されていた。道は歩きやすく舗装され、あちこちに案内板まで出ている。

（どこかの観光地ではあるまいし）

自分の敷地なのだし、そう広い場所でもないのだ。迷うとは思えない。それともシユマー家というのは、よほどの方向音痴ばかりなのだろうか？

潮騒の音を聴きながら海岸沿いを少し歩くと、木々のむこうに別の屋敷が見えた。造りから判断するに、カレアナたちは先ほどの建物ではなく、この屋敷を使っているようだ。

——それにしても。

正直、よく分からない。旅行に行くだけならまだしも、なぜこんなところへ迷い込んだのか、と思う。

ルーフェイアを旅行に同行させたようだから、あの子が何かの弾みで提案し、シルファがそれに乗ったのだろう。

ただいつもの彼女から考えると、珍しい選択だった。こういう形の突発的な行動は、シルファはあまりしないタイプだ。

カレアナが屋敷の中へ入り、タシユアもあとに続く。

「……あらま」

彼女が声をあげたのは、廊下に人影があつたからだ。

Episode : 77

ちょうどこちらを向いている車椅子の女性と、話しているらしい背を向けた2人。長身の黒髪と小柄な金髪は、シルファとルーフェイアの組み合わせに間違いない。

向こうが気づいて振り返ったときには、タシユアとカレアナはかなり近くまで行っていた。

何故ここにいるのかと言わんばかりの、シルファとルーフェイアの表情。

（ずいぶんですね）

たしかにおかしな経緯で立ち寄ったが、それを言うならシルファも、ここに居る人物ではないだろう。

とりあえず久々に顔を見たパートナーに、声をかけてみる。

「旅行はどうでした？」

それにしても、妙なところへ迷い込んだものですね。シエラの上級生ともあろうものが、ほいほい人の後についていくのは、どうかと思います」

瞬間、シルファの表情が変わった。

（怒った……のですかね？）

そんなことを言った覚えはないのだが。
当のパートナーは、そのまま答えない。

「おやおや、話しかけられたのに黙っているとは、休みの間に礼儀まで忘れましたか？」

「——うるさいっ！」

瞬間、シルファが手にしていたバッグが飛んできて、とっさに受

け止める。

「なんで取るんだっ！」

「なんでと言われましても」

条件反射を、どうしろと言うのか。

そもそも会ったなり物を投げるなど、理不尽にもほどがある。

「何を怒っているのかは知りませんが、とにかく落ち着いてはどうです」

「……………」

怒気をはらんだまま、シルファがきびすを返す。

ルーフエイアがおろおろしていたが、母親がうなずいて見せると、急いでシルファの後を追っていった。

「八つ当たりされても、困るのですかね」

「ぜったい違うわよ、それ」

カレアナが突っ込んできた。

「それよりも、ずいぶんと嫌われましたのね」

「そりゃ、そーゆーことしたんでしょ」

なにやら女性2人が、盛り上がっている。

「客に自己紹介もせず、品定めですか。さすが殺人集団は、礼儀が行き届いていますね」

タシユアの言葉に、初めて見る女性が小首をかしげてみせた。

「あら、よくお会いするから勘違いいたしましたわ。そういえば直接顔を合わせるのは、初めてでしたものね」

（やはり、私の存在はシュマーに知られていますか）
彼女の言葉に思う。

もつともカレアナが自分を買い取ったことを思えば、当然とも言えた。加えてシユマーともなれば、学院でこなしてきた多くの任務とその結果も、分かっているだろう。

ただ自分の出自のことを考える、とあまり歓迎できない状況ではある。

（まあもともルーフェイアに声をかけたのはこちらですから、自業自得ですか）

ふだんの言動は抜けたところがあるが、彼女とて仮にもシユマーのトップで、しかも戦場育ちだ。危機管理だけはしっかりしている。だとすれば、タシユアが訓練後に声をかけた時点で、何らかの行動は起こしているだろう。

（気まぐれの行動が高く付きましたかね）

とはいえ、今更だ。

目の前の車椅子の女性のほうは、タシユアの毒舌になにか感じた様子はない。やはりルーフェイアだけが例外で、シユマーはみな図太いのだろう。

Episode : 78

「サリーアと申しますわ。こちらを預かっておりますの。もっとも形だけで、実務は他の方がやってくださるのですけどね」

たおやかに微笑みながら、ルーフェイアに似た金髪碧眼の、車椅子の女性が挨拶する。

「タシユア＝リユウローンと申します。お招きにあずかつて、光栄ですよ」

毒舌と皮肉の応酬をしながら、記憶を探った。サリーアという名は、もぐりこんだシュマーの通信網で目にしたことがある。

現総領はルーフェイアの母カレアナだが……たしか、その片腕だったはずだ。

——まさか、半身不随とは思わなかったが。

シュマーには、戦えなくなったものを切り捨てる印象があったが、少々違うようだ。

「まあ。喜んでいただけなんて、こちらこそ光栄ですわ」

「私は喜んでいるなどと、言った覚えはありませんが？」
すかさずタシユアは返す。

「集団の是非はともかくとして、人の上に立つような方がまともに言葉も理解できないのは、かなり問題でしょうね」

「あら、そうでしたの？ それは失礼しましたわ」

平然とうそぶいてみせるあたり、このサリーアという女性、相当したたかしい。

「ともかく立ち話もなんですから、こちらへ。飲み物でも用意させ

ますから。

おばさまもいらつしゃいます?」

タシユアを無視することはない、だが話には乗らずに進めていく。

「シルファさんが何故ここへ来たかだけは、先にお話させてくださいね。荷物のほうはなんでしたら、お部屋のほうまで運ばせておきますわ」

「結構です」

サリーアの申し出を断る。もろがたいした荷物ではないし、何より他人に触らせたくないかった。

「では、お持ちになったままで」

学院からシユマーの船で直接来たため、タシユアは例の大剣を持つたままだ。

だがそれを、彼女は恐れるふうもなかった。まるで見えていないかのように、ごく自然に振舞っている。

甘く見ているのか、それともよほど自信があるのか。あるいは最初から諦めているのか。だが目の前の彼女の態度は、どれも微妙に違う気がした。

いずれにせよ、かなりの食わせ者なのだろう。

（片腕と呼ばれているのは伊達ではない、ということですか）

案内された部屋で示された席に着くと、お茶と軽食とが出された。

（おや、ありがたいですね）

細身の身体の割に、食べるタシユアだ。

「お口に合うかどうかは分かりませんが、どうぞ」

「では、遠慮なく」

口に運ぶと、材料も調理法も手が込んでいるのが分かる。

毒の心配は、別にしなかった。最高権力者のルーフェアとカレアナがここに居て、なおかつそういう気がないのだから、取り越し苦労になるだけだ。

だいいち彼女らが本気なら、ここへ来る間にどうかなっている。

「それで、シルファさんのことなのですからけれど」

間をおかず、サリーアが話を切り出した。

「私に言われても困りますが？ 先ほどの様子から見ても、シルファは自分の意思でここにいるようですよ」

「……ホントにタシユア、あなた分かってないわねえ」
話を聞いていたカレアナが、また突っ込んでくる。

「あなたが何かを分かっているつもりなのは、分かりますがね。そのつもりとやらを、私に強要しないでいただけますか」

女性二人が、顔を見合わせた。

少し間を置いて、サリーアが訊いてくる。

Episode : 79

「シルファさんが旅行に出られたのは、ご存知ですわよね？」

「ええ。ですがそれが何か？」

たしかに勧めたのは自分だが、シルファ自身が決めたのだ。幼児ではあるまいし、自分が口を出すべきことではない。

だがサリーアは、やれやれというようにため息をついた。

「何か言いたいことがあるのでしたら、はっきり言っていたくださいですね。人外のシュマーはともかく、他人の頭の中などというのは、ふつうは理解できませんから」

こんなことで連れて来られた拳句、よく分からない話を聞かされるのではたまらない。手をつけた軽食だけ食べ終えたら、さつさと帰るのが吉だろう。

タシユアの考えを知ってか知らずか、カレアナがまた横から口を挟んできた。

「だからね、シルファがうちの子連れて、旅行に出たのはいいいしで。

あの子が言うにはその旅行、アヴァンからここまで延々、半月近くかけて南下したらしいわよ？」

「そうでしたか」

大陸沿岸を縦断は初耳だが、だから何だと言うのか。

ただカレアナのほうは、タシユアの答えに驚いたようだった。

「まさかとは思ってたけど……こういうのは、久しぶりに見たわねえ」

「そうでなくては、こういうことにはなりませんわ」

女性2人のやりとりが、どうにも気に入らない。説明不足にもほ

どがある。

「だからね、タシユア——」

「おばさま、私が」

何か言いかけたカレアナを、サリーアが制した。説明は自分がする、ということだろう。

正直タシユアにしてみても、そのほうが楽だった。常識をわきまえないルーフェイアの母親は、脱線の連続で説明の入り口にさえたどり着かない。

金髪の従姉が話し始める。

「タシユアさん、旅行に出かけられるときは当たり前ですけど、ホテルや何かを予約なさいますよね？」

「状況によりますが、基本的には。中には何も考えずに行く、無計画な人間も居ますがね」

暗にカレアナのこと——以前やられた——を言っただつたが、当人には嫌味は届かなかったようだ。

「私も、そういう方に心当たりはありますが、今は別の話ですね。」

ともかく予約するのが常なら、シルファさんも当然、そう言ったと思われませんか？」

「そうですね」

意外な面も持つてはいるが、シルファはおおむね堅実だ。どこかの誰かのように、予約もなしで泊まろうなどとはしない。

そして、気づいた。

——話が矛盾する。

学院で確認したとおり、シルファの旅行は長期だ。

そのすべてを計画なしで、というのも考えられなくはない。だがそれでは、かなり無理のある旅行になるはずだ。下手をすれば、野宿する羽目になりかねない。

だとすれば発ったのは通話石で連絡があつたの当日だが……かなり前から計画していたはずだ。

そして何より、ルーフエアの同行。

いくら子供とはいえ、いきなり連れて行くのは無理だろう。当人自身はどうかになるとしても、急に人数が増えては、行った先のホテルや何かですぐに困る。

何よりシルファは、そこまで無計画で無責任ではない。あんな小さい子を、野宿しかねない旅行になど、連れて行ったりしないはずだ。

その辺から考えるに、やはり旅行は前々から、計画していたと見ていい。

ひとつ引つかかることといえば、なぜルーフエアと行ったのか、という点だが……。

Episode : 80

（あの組み合わせなら、事前に騒ぐでしようし）

意外に気の合うあの2人は、こういう計画だとすぐうれしそうに喋る。下手をすればイマドたちクラスメイトまで巻き込んで、大騒ぎしながら準備するはずだ。

だが、そういう話は一切聞いていなかった。

つまりルーフェイアは、事前には旅行のことなど知らず、急に行したと考えていい。

（そつえば……）

自分がロデスティオに発つ前、シルファが何か企んでいた様子だったのを思い出す。

たしかケンディクまで頻繁に買い物に、それも独りで行っていたはずだ。ほかにもし考えれば、おかしな点がいくつも浮かぶ。

なぜ、シルファはそんなことをしたのか。

ルーフェイアとでないなら、誰と行くつもりだったのか。

頭の中で情報の断片が、一気に組みあがって形を成していく。

「ご理解いただけたようで、良かったですわ」

聖女の仮面で、サリーアが微笑んだ。ただその瞳は、明らかに面白がっている。

だがタシユアが返した言葉は、予想外だったようだ。

「それで？」

彼女の仮面が、虚を突かれたものに変わる。それを尻目にタシユアは続けた。

「シルファがここに至った経緯は、理解しました。それで私にどう

しろと？」

シルファが旅行の計画を立てていた、そのこと自体は予想外だったが、彼女がこの島に来る理由、そして学院に提出した予定を過ぎても帰ってこない理由は理解できた。

つまりは、こういうことだ。

「まさか、拗ねて飛び出した挙句、会わせる顔がないからと帰るのを逡巡している人間の機嫌を取れと？」

通話機による会話の最後を思い出す。

向こうからけたたましい音を立てて通話が切れたのは、取り落としたわけではなく、シルファが通話石を叩きつけたのだろう。

「途中たぶん違うわよ」

カレアナが笑いながら言うのが、不愉快だった。

サリーアのほうは無邪気な表情で小首をかしげ――演技だろう――不思議そうに言う。

「でしたらタシユアさん、なぜシルファさんと一緒にいらっしゃいますの？」

そういうことなら最初からお一人の方が、何かと楽だと思いますけど？」

「また随分と論旨が飛びましたね。今回の件で私がシルファの機嫌を取ることに、一緒にいることに、なんの関係があるのです。

それに質問に対して質問で応答するのは、いかななものかと思いますがね。」

「はいはい、2人とも喧嘩しないの」

カレアナが手を鳴らして、間に割って入った。

「議論と喧嘩の区別さえ、つかないようですね」

「あら、これが喧嘩に見えまして？」

あまり面白くないが、この点だけは意見の一致を見たようだ。
だがカレアナのほうはいつものように、意に介さない。何を言われても、この調子なのだろう。

「そお？ てつきり仲良くケンカだと思ったんだけど。

ともかくタシユア、あなたが勝手にどこかへ行っちゃったからシルファ怒ってるんだけど……それ、分かってる？」

「勝手に、ですか」

彼女の言い分に、やれやれと思う。何を言ったところで、この二人はシルファの擁護をするのだろう。

Episode : 81

「休暇期間をどのように使おうが、私の自由だと思いますがね。

私が約束を破ったということであればいくらでも責めは受けま
すし、シルファの機嫌も取りましょう。」

前もって何かしら一言あれば都合をつけただろうし、ましてや無
視して出かけたりは決してなかった。

「ただ、今回、私は彼女が旅行の予定を立てていることを知らな
かったですよ。」

加えるなら、予定を開けておいてくれ、と頼まれてもいません」
何かしていることに気づいていたのは事実だが、本人が隠そうと
していることを詮索するような真似はしない。それに詮索したこ
ろで、シルファはまともに答えなかっただろう。

「それを言ったらタシユア、あなたも同罪だわねえ」

カレアナが、可笑しそうに言う。

「予定を知らなかったのは、シルファも同じ。だからこそ、あなた
と旅行に行こうと思ったわけだしね。」

珍しく話を寄り道させず、ストレートに来た。

「ただあの子なら、空いているかどうかくらいは、訊いてきたんじ
やないかしら？　なぜその時に、予定があると言ってあげなかつた
の？」

「聞かれていませんが？」

何かそういう話があったのならともかく、何もなかったのだ。訊
かれもしないことなど、分かるわけもない。

「あら。じゃあどこで空いてるって知ったのかしら」

「予定表でしょう。夏期休暇中の上級隊の当番は、発表されますからね」

それを見て「空いている」と思い込むのは、どうかと思うが。

「なるほどね。でもそれにしたって、タシユアあなたいったい、何処で何してたの？ 1人で観光なんて洒落たこと、するガラでもないでしょうし」

「その一人旅です。殺伐とした任務が多いものですからね、人気のないところに行きたくなるのですよ」

カレアナが笑い出す。

「その割には、ずいぶんと人の多いところへ行ったわね！。まあ目当では、例の武器商でしょうけど」

「さて、何のことやら」

そう返したが、やはり調べあげていたようだ。この調子では向こうで誰と会っていたかも、分かっているのだろう。

それを裏付けるかのように、カレアナが訊いてきた。

「あそこをシルファ絡みで突付くなら、いろいろ必要でしょ。口の堅いところ、手配するわよ」

「そのシルファですが、いつになったら私の質問に答えていただけるのですかね？」

一瞬の間。

「なんだっけそれ」

本気で帰ろうかと思う。サリーアのほうも、呆れ顔だ。

「ですからおばさま、シルファさんのご機嫌を誰が取るのか、の話ですわ」

「あー、そうだったかしら？」

「正確に言えば私に何をしろと、という質問ですがね」

これでよく、前線で生き延びられるものだ。しかも答えは、さらにあらぬ方向へ行った。

「その件、もう置いときましょ。シルファはうちで預かる、これでいいじゃない」

今までの話を、たったこれだけですべて無しにしようとする。

「タシユア、あなたは今晚はここへ泊まって、明日にでも帰ればいいわ。棧橋のところで誰かに言えば、船を出してもらえるから」

「『勝手』という言葉を、そっくりお返したいですね」

連れてこられたうえ、時間の浪費としか思えない議論をさせられ、拳句に帰れというのではたまらない。身勝手にもほどがある。

Episode : 82

「でも、あなたに何もする気がないんだもの。しょうがないじゃない？ それにシルファもここなら、学院みたいに任務で危険な目に遭うこともないんだし」

見事なくらい典型的な好意の押し付けだ。確かに言うとおり、任務におけるような危険はないだろう。ただ。

「一部とは言え、人体実験やら魔法生物実験やらを行っているような輩が跋扈するシュマー家を、総領が安全というのならそうなのでしょね。」

組織が大きくなればなるほど、目が届かない部位が存在する。シュマーのような巨大かつ古い組織となると、その傾向はより顕著だ。それゆえかシュマーの内部には、正視に耐えない所業を行っている輩もいる。

言われたカレアナのほうは、これと言って表情を変えなかった。彼女にとって瑣末事なのか、あるいは既に把握しているか、どちらかなのだろう。

「まあ、いいでしょう。帰れということであれば帰ります。」

物分りが悪い、というよりも根本的にすれ違っているらしい。ならば何を言ったところで無駄だ。

「今回はこれで終了ですね。部屋を教えてください」
言って立ち上がり、荷物を確認する。

「……もしかしてタシユアさん、何か勘違いなさってませんか？」
サリーアが、唐突に口を開いた。

「確かに事の発端は予定のすれ違いですけど、すでに問題はそこではありませんわ。」

シルファさんも、予定が食い違った件そのものは、既に理解なさっているでしょうし」

「勘違いしているのは、そちらだと思えますがね？」

この言葉に、サリーアは若干眉をひそめて、カレアナに視線を向けた。

「おばさま、タシユアさんを連れてくるとき、何とおっしゃいましたの？」

「よく覚えてないけど、『契約通り、あなたの身柄は借りた』だったかしら？」

サリーアが小さくため息をつく。

「話がかみ合わないわけですね……」

「ん？ どゆこと？」

けろりと言うカレアナと、やれやれという調子で首を振るサリーア。どちらが年上かまったく分からない。

「そういうことでしたら、話を振り出しへ戻したほうがよさそうですね。」

もうご存知のとおり、こちらにシルファさんがおりますわ。そしておばさまが学院へ出向いた理由は、タシユアさんにこちらへ来てシルファさんに会っていただくことでしたの」

おかしな形で達成されましたけど、とサリーアが付け加える。

「おばさまはああいう方ですから、とりあえず横から入った命令は無しとして、シルファさんに会ってくださいな」

「本当にシュマーの総領家というのは、なんにでも首を突っ込みた

「がりますね」

内心うんざりしながら言う。

「そんなに他人のことが、面白いのですか？」

「私はべつに。一銭にもなりませんし。心配ないから放って置くようにと、ルーフェイアにも言ったのですけれどね。でもあの子ったら、とても心配して。」

しかもこの話、おばさまの耳に偶然入ってしまったものですから」

あの性格のカレアナだ。聞いたとたん、お節介に動き出したに違いない。

いずれにせよ、母娘揃ってずいぶんと物好きだ。

Episode : 83

「ルーフェイアの話ではシルファさん、相当荒れてたようですね」
まあ分かりますけどと、サリーアは小さく付け加える。
「そうでしょうね」

ふだんは他人が苦手でおとなしくしているが、本来の彼女は意外に気性が激しい。先ほど、出会い頭にバッグを投げつけてきたのが、それを端的に示している。

根は優しく面倒見がよいから、ついていったルーフェイアが被害を蒙ることはないはずだ。だが他のところでは、ひと悶着くらいはあっただろう。

（まったく、素直に言えばいいものを……）
つい、そんなことを思う。おかしなことを企んだりしなければ、こんな騒ぎになっていない。

「いま、案内の者を呼びますわ」
「それには及びません。場所だけ教えていただければ、自分で行きます」

幼児ではないのだ。このあたり、もてなしと云えばそうだが、度が過ぎると思う。

サリーアが部屋の場所を説明し、付け加えた。

「お夕食のときには、お知らせしますわ」
「部屋に運んでください。」

言って部屋を出て行こうとした彼の背に、言葉が飛ぶ。
「タシユアあなたね、もう少しシルファ構わないとダメよ」
本当にお節介だ。

「蔑ろにしたことはありませんよ」

「そうじゃなくて、あなたのほうからシルファの喜ぶようなこと、してやりなさいって言ってるの」

あれやこれやと、学院の教官並みに五月蠅い。当人は親切のつもりなのだろうが、押し売りもいいところだ。

堪えないだろうが、一言言ってやろうかと口を開きかける。が、カレアナのほうが早かった。

「何かは知らないけど、シルファあなたに、相当のことしてくれたんじゃないの？　だったら日頃から構うくらい、どうってことないと思うんだけど」

「……………」

言われて思い返す。

——あの日の、あの味を。

遠い記憶の彼方というほどではないが、ふだん意識することもなくなつた、それ。

ただあれは、決定的な分岐点だった。

「あなたが相手しないから、シルファは怒ってるの。だから放っておいたら、いつまでも怒ってるわよ」

先ほどの言葉でこれ以上何かいう気概は薄れたが、それでもしつこい……と思う。

ただ、カレアナもサリーアも、一応シルファと同じ女性だ。その意味では思考パターンは、さほど隔たりはないだろう。

ならば当たらずとも遠からずなのかもしれない、とそんな風に思った矢先。

「タシユア、シルファのこと強引に捕まえて、キスでもしときなさい。それで収まるから」

背後でサリーアが、笑いをこらえている気配がする。

「別に押し倒してもいいけど、場所だけ考えてね。ほら、ここには小さい子も多いから」

それを完全に無視して、タシユアは自分に充てられた部屋へと向かった。

Episode : 84

S a l i y a

「あれでだいじょぶかしらねー？」

「おばさま、心配すぎですわ」

本当にこの方は、何にでも首を突っ込む方。しかもそのほとんどが、厄介ごととセット。

「ご当人は「向こうから厄介ごとが来るだけ」と言うけれど、私にはわざわざ集めているようにしか見えませんし。」

「だいいちこういうことは、当人が試行錯誤して覚えるものでしてよ？ それをわざわざ手助けなんて、物好きにもホドがありますわ」
けどおばさま、今日はうまく切り返してきて。」

「だからって、タシユアが自力で分かると思う？」

「それは……」

さすがにこれは、イエスとは私も言えないのが。

「ほらね。だいいちあのままじゃ、シルファが可哀想よ」

この辺もまあ、言いたいことは分かるのですけど。

「それにしたって、事態を余計にややこしくする必要はありませんわ」

「あら、あたしそんなことした？」

「一事が万事これなのが……」。

「先ほどのやり取り、もうお忘れでした？ おばさまがタシユアさんを、おかしい言い方でお連れになるから、さらに混乱したんです」

のよ」

「そんなこと言ったって、ああでも言わないと動きそうになかったんだもの」

言い訳の仕方、子どもじみてますし。

「おばさまが面倒くさがりなのは承知してますけど、だからって任務と称することはないでしょうに。だいいちこれの、どこが任務になりまして？」

「そう？ やっぱならないかしら」
「なりません」

いつもこの調子。尻拭いするほうの身にも、なっていたきたいもの。なによりこんなこと、他人が口を突っ込むことではないでしょうし。

「それにしても……冷めてるといっつか枯れているといっつか、変わってるわよねえ」

おばさまに変わってると言われたなんて知ったら、タシユアさん嫌な顔するでしょうね。私だってこれは嫌ですもの。

もっともご当人はそんなこと思ってもないようで、話は続いています。

「ほら、あの年頃の男の子って、良くも悪くももっと女の子にがつつているものじゃない？」

ましてや、シルファのみたいな可愛い彼女がいたら、余計だと思うんだけど」

「私に訊かれても困りますわ。そういうことは、当人に訊いていただかないと」

ホントにおばさまにかけると、どの子もまとめて我が子扱い。い

つたい何人、子供を抱えれば気が済むのやら。

「それにしても、今回のことはやりすぎでは？ おかげでずいぶんな出費ですよ」

「あらそお？ 何ならあたしのところから、引いてちょうだい」
案の定、まったく考えてらっしゃらないし。

出費というのは、タシユアさんを連れてきたことではなくて、学院と交わした契約のこと。何をどう思ったのかシエラの上級傭兵を、もうひとり卒業まで丸ごと借り上げるなんて。

しかもこちらの依頼がない時は、学院は対価を取って派遣して構わないというのだから、一方的にこちらが不利。

「タシユアさんの件だけでも驚きましたのに、もうひとりなんて。

そもそもこんな契約、学院のほうも前代未聞とおっしゃってましたわよ？」

「いいでしょ、別に。それにシルファとセットじゃなきゃ、タシユアが可哀想だし」

思わずため息。

そんなことだろうとは思ってましたけど……本当にそれだけというのも、振り回される側としては複雑なもの。

Episode : 85

「たしかに能力があるのは認めますけど、シユマーに加わると思えませんし。」

孤児が理由なら、学院にはほかにたくさんいるわけですし」

「そうねー、あなたには言つといたほうがいいわね」

珍しく神妙な口調。いつもこうなら楽なのですからね。

おばさまが、話し始めて。

「昔の大戦の頃、前線でヴァサーナの正規兵と知り合って、意気投合しちゃってね」

「……ちよつと待つてくださいな。おばさまが雇われてたロデステイオ、ヴァサーナと敵対してたじやありませんか」

あの当時のヴァサーナ国は、ロデステイオと敵対してたアヴァンを裏から支援してたわけで。ですから直接じゃないとは言え、ロデステイオとは敵味方の関係だったはず。

「なのにどうして、意気投合してるんです」

「それがね、運悪く両軍遭遇して交戦になったのがニエナム国で。でもあそこ、外国排斥でしょ？ だから横から全力で攻撃されちゃったのよー」

「両軍とも、不注意すぎますわ……」

おばさまのようなことを、軍団単位でやらなくてもいいでしょうに。

「ともかくそんなわけで、散り散りになって取り残されちゃってね。出会ったのも何かの縁、一緒に国外出ようか、って」

それで納得できてしまふ、相手の方もすごいと言うか。

というか、毎度のこととは言え、話が横道へそれ過ぎてますし。

「で、そのことと今回の件、どう関係ありまして？」

「だから、彼女の子」

「あら……」

そこまで素性が分かっていて、なおかつタシユアさんがシエラに居るということは。

「——亡くなられましたのね、その方」

「そゆこと。」

向こうが切羽詰ってたときに、うちもほら、ちょうどルーフェが大怪我してゴタついてるときだね。だから知らないまま、何もできなくて」

寂しく笑って、おばさまが視線をそらす。

「タイミングも悪かったし、どうすることもできなかったのは分かっているのよ。」

でもほら、どうしても引きずるのよね」

つかの間悲しげな表情を見せた後、一転、いたずらっぽい微笑み。

「悪いわね、自己満足につき合わせて」

「あら、おばさまはいつも、自己満足が基準じゃありませんの？」

お互いの視線が合って、思わずどちらも笑い出す。

でもこれで、例の契約がこちらに不利なものも納得。要するにあれは、2人をうちで使うことではなくて——保護が目的。

シエラの本校は、噂じゃけっこう厳しいのだそう。それに学院からの派遣要請は、生徒はまず断れないとも。もちろんそんな任務で、中には命を落とす生徒も居る。

けれどこの契約があれば、それを盾に断ることが可能。学院がこ

ちらへ確認を取っても、おばさまが口裏を合わす気満々だから、ばれないでしょうし。

いまさら引き取るわけにもいかない友人の子を、彼女と2人まとめて間接的に庇護を与えた。つまりはそういうこと。

「っていつのが、今までの主な理由だったんだけど」

「あら、他にも理由がありました？」

この方にいくつもの理由が出る事のほうが、珍しいのに。

「なんて言うのかしら、敵に回したくないっていうのも出てきたかしらね。まったく、どこまで情報掴んでいるのやら……」

「通信網にあるのは、ほぼ全部かと。まあ、どうにかありますわ」
ルーフェイアの一件から、出入りしているのはこちらも分かっている、監視してたりしますし。

「まったく、ローズだったらどんな育て方をしたのかしらね」

「おばさまと、意気投合するような方ですよ？ 推して知るべしでは？」

「あー、確かにそうね」

とりあえず確かなことは、さらに厄介ことが増えた、ということ。

「例の経費、一部はおばさまのところから、出していただきますからね」

「はいはい。」

さて、かわいいルーフェの様子でも、見てこようかしらね」

とってつけたようなことを言いながら、おばさまも部屋を出て、扉が音を立てて閉じた。

Episode : 86

Tasha side

月明かりが、辺りを照らしている。

気晴らしと涼を取るのを兼ねて出てきた外は、思っていたより快適だった。このまま外で一晩過ごしたほうが、いいくらいだ。

どういう理由か例の屋敷は、室内を冷やすということをしていない。そのせいで夕食後、若干ではあるが持参した例の資料に目を通していたのだが、いまひとつ頭に入らなかった。

こうして歩いている庭も、意外なくらい暗い。節約なのか別の理由なのか、屋敷の内外は魔光灯があまり点いていなかった。

内装には贅を尽くしているにもかかわらず、冷やさなかったり明かりをほとんど点けないのを面白く思いながら、裏庭を抜けて歩を進める。

（さて、どうしたのですかね……）
よぎるのはシルファのことだった。

黙って準備をしていたのは、二人での旅行を計画した際に、ついでに驚かせたいというのが出てきのだろう。

ただ、それが次第に、驚かせたうえで旅行をしたい、という目的にすり替わってしまっただけらしい。

こちらにしてみれば学院を発つ直前、もしくはベルデナードから連絡した際に打ち明けてくれれば、都合をつけることができた。だがシルファは前者の時は動揺して、後者の時は最後の一言で頭に血が上ってしまって、言えなかったのろう。

（目的がすり替わってどうしますか……）

まあその辺り、らしいと言えばそうなのだが。

シルファ本人が隠し切れていると思って、何か企んでいるのを見るのは可愛いと思うし、それを迷惑に思ったことはない。

今回も結果的にこんなことになり、シュマーの総領であるカレアナに呼び出されはしたが、シルファに対して負の感情は抱いていなかった。

一方で彼女が怒っているのは……要するに、気持ちの整理がついていないのだろう。しかもその状況でいきなり会ったために、現状、全ての想いをあんな形でぶつけてきている。

（困りましたねえ）

普段ならそつとしておいて、シルファが落ち着くのをただ待つのだが。

片をつけようと思えばあっさり片付くのかもしれない。

ただ、こうも思う。

本当にそれでいいのか、と。

先ほどの会話が浮かんでくる。もっと構え、喜ぶことをしてあげろ、と。

——だが。

学院やケンディクでの、恋人同士のべたべたした、甘ったるい言動を思い起こす。

シルファがああいったのを望んでいるとは思えないし、そもそも望まれても自分には無理だ。

そして、何よりも自覚していることがある。

他人に何かをして欲しいと思わないだけに、他人に対して何かをする、ましてや喜んで貰おうという考えが、欠落していることを。

（良い機会なのかもしれませんね）

自分自身のシルファへの、そしてシルファ本人が己の感情を見直すのに、だ。

学院で最後に顔を合わせてから今日まで、およそ3週間。一緒に居るようになってから、これほど長く顔を合わせなかったのは、初めてのことだった。

とは言うものの彼女の实家を調べていたこともあってか、普段よりもシルファのことを考えていたような気がする。

現状、自分に最も近い他人。

単純に構うだけなら、できると思う。声をかけ、誘い、話せばすむことだ。

だがやはり……それは何か、違う気がした。

Episode : 87

一人になるのが嫌いなシルファ。

一人でも生きていくと決意した自分。

見ているところがあまりにも違うのに、一番近い。

交友関係が広がり、親しい友人ができ、自然と薄れていけばよかったのだろう。だが、何の巡り合わせか、彼女はタシユアの近くに
いるようになった。

それを見るたび、思っのだ。

いつでも側にいられるために、逆に一人になるのを怖がっていないか。かえって依存する結果になっていないか。

自分の隣にすることが全てになってしまい、それ以外の可能性を考えられなくなっていないか。

シルファが精神的に立ち直る機会を、そうとは知らずに奪っていないか。

出遭ったころの記憶をたどる。

最初は、間違いなく偶然だった。

次でシルファを助けたのも、気まぐれに近い。当時の自分はシルファどころか、他の人間すべてに興味などなかったのだから。

だがそうだったことが重なるうち、気づけば彼女は側に来るようになっていた。

そして自分も追い払うようなことはせず、時に相手をした。

ただどれも、偶然の産物だ。

どこかで何かが少し違ったなら、いまだにお互い、赤の他人に過

ぎない。あるいは違う誰かが彼女の側に居あわせたなら、やはり自分は無関係のままだったろう。

そんな思いが、常に頭の隅にある。

（きつかけは、きつかけに過ぎないということですか）

シルファとて、近寄らないという選択肢はあったはずだ。なのに側に来るようになったと考えるなら、彼女はその意思で選んだことになる。

それなのに確信が持てないのは、シルファのトラウマを知っているからだ。

自分の存在が、そのトラウマを不自然な形で埋めて、歪める結果になっているのではないか。そんな考えが、タシユアの頭からはどうしても離れない。

なにより、彼女が己の感情を勘違いしてはいないだろうか？

必要とされたいがために、そのように考え、行動する。実はそれだけの話で、なのに好意と勘違いしていたら？

どう見てもそれはいずれ歪んだ感情になり、やがて破綻するだろう。

もしそうなら……何があっても避けたかった。

そうなれば傷つくのはシルファで、しかもかなりのダメージを負うことになりかねない。

（さすがに、考えすぎでしょうかね）

思考が一段落したところで、ふと周りが明るくなったことに気づく。どうやら、屋敷脇に広がる林を抜けて、砂浜まで来ていたようだ。

（随分と没頭していたようですね）

ふと見上げると、満月にほど近い月が存在を主張していた。

（よい月ですし、このまま砂浜をまわって戻りますか）

闇を映した海に、白い砂浜が浮かび上がっている。暗い中、月明かりに照らされてた砂浜は、ぼんやり光っているようにも見えた。その砂を踏みしめ、波の音を身体に満たしながら、感情を整理していく。

と、遠くに人影を認めた。

（……シルファ？）

背格好や髪の色から見て、間違いなさそうだ。

ただ、散策とは言いがたかった。時折反射する光は、サイズ（大鎌）の刃だ。

早い話、誰も居ない夜の砂浜で、大鎌を振り回して訓練をしている。

（あの時と逆ですね）

昔のことを思い出す。まったく関係のない二つの事柄が、なのにどこか似た状況になるのは、不思議で興味深かった。

邪魔をしないよう少し距離をとり、木に背を預けて様子を伺う。

Episode : 88

夜のせいかな、袖なしのシャツブラウスにショートパンツという、珍しい格好だ。

月光にさらされている四肢に、目を奪われる。彼女がこういうふうに肌をさらすのは、滅多になかった。

そのシルファが、サイズを振り下ろし、振り上げ、薙ぎ払う。

月明かりの下、動きに合わせて舞う髪が綺麗だった。

（――髪だけではありませんか）

真剣な表情。

あまり意識したことはなかったが、こうして見ると美人だと思う。

可愛げがない、同学年から上の男子生徒は彼女のことをそう言うが、表向きだけだ。実際には、シルファの人気は高い。

加えてスタイルがいいだの色気があるだの、様々な噂を耳にする。

――まあ中には、ろくでもない噂もあるが。

だがそれも裏を返せば、それだけ注目されているということだ。

けれど当のシルファは、タシユア以外にいまのところ、興味を示さない。

それがいいのか悪いのか、タシユアには分からなかった。

身体を入れ替え、切りつけ、下がる。サイズ（大鎌）の切っ先が軌跡を描き、その動きを追いかけるように黒い髪が舞う。

（休暇中ぐらいゆつくりすればよいものを……）

この様子では、旅行中も身体を動かしていたのだろう。下手をす

ると、何かひとつかふたつ、退治までしていそうだ。

行動派の彼女らしいが、せっかく旅行に出たのなら、もう少しのんびりしてもいいのと思う。

それにしても、あれだけ大きさのものを自在に操るのだから、相当の努力だ。

武器をサイズに変更すると唐突に言い出したとき、シルファが自分で決めたこととはいえ、難色を示したのを覚えている。

槍、せめてグレイブならまだしも、サイズとなると扱いが格段に難しくなる。加えて扱いの難しさから、攻撃の方法までが限られるのだ。大きければそれだけ重さも増し、いろいろな意味で女性の細腕には荷が重い。

そう思っただけで忠告したのだが、彼女は頑として譲らず、代わりに自らに厳しい訓練を課した。

今の舞うような動きは、その結果だ。

もっともタシユアは、シルファに対して頑張れと声を掛けたことは、今まで1度もない。むしろ、やり過ぎないように注意したくらいだ。

だが彼女は、ひたすら努力を積み重ねていく。

——タシユアに追いつきたい、その一心で。

タシユア自身は、シルファが追いつかなくても、一向に構わないと思っただけ。人には得て不得手があるし、限界もある。努力せざるに出来ないとは騒ぐのは論外だが、どうしても出来ないものを責めるつもりは、毛頭なかった。

またそれを理由にシルファを下に見る気もそう扱うつもりも、全

くない。きちんと努力している人間は、相応の尊敬を受けるべきというのが、タシユアの考え方だ。

だが彼女は、それでは納得いかないのだろう。必死に努力し、Aクラスを不動のものにし、上級隊にも入った。

（十分、立派なのですね）

そもそも、シルファが努力しているのを一番そばで見ってきたのは、タシユア自身なのだ。

ただ気になるのはやはり、その努力が何を理由にしているのか、ということだった。

目標としてタシユアを置き、追いつこうとしているのならいい。けれど今のシルファは、そういうふうには見えなかった。独りになるのが怖くて、居場所が欲しいがために、並び立とうとしているように思えてならないのだ。

（そんな必要は、ないのですが……）

ここだけは、何とかしたほうがいいのではないか。この食い違いが先々、何か大きな危険を呼び込むのではないか。

どうしてもその考えが、頭の隅から消えることがない。

グレイブ：薙刀のようなもの

Episode : 89

そんなことを思いながら、どのくらい見ていたのだろうか？ シルファが刃を下ろした。置いてあったタオルでも取ろうとしたのか、こちらに背を向ける。

息を弾ませる姿を綺麗だと思いながら、近づいた。

彼女のほうは、気づいた様子はなかった。タシユアがいつものように気配を消しているのと、まさか誰かいるとは思っていないのとの、両方だろう。

その彼女が、振り向いた。

驚きに声が出ない、そんな表情。

「今日はもう、終わりですか？」

なんと言ったらいいか分からなくて、そんなことを言ってみる。

「ああ。いつから……そこに？」

また怒るかと思ったが、意外にもシルファはごくふつうに反応した。暴れるだけ暴れて、すこし落ち着いたのかもしれない。

「先ほどから」

言ってから、夕方のカレアナの言葉を思い出して、付け加える。

「強くなりましたね」

シルファが先程とは違う驚きを見せた後、下を向いた。

——心配しているとおりかもしれない。

彼女の反応を見て、そう思う。

ただ褒められて喜んでいるのなら、いい。素直な反応をそのまま

見ていられる。

けれどシルファの場合、やはりトラウマの穴埋めという意味合いが大きくて、自身の意思や感情と乖離している気がするのだ。

これを、放っておくわけにはいかない。

「シルファ、話があります」

意を決して言う。

この話をしたら……彼女を傷つける結果になるかもしれない。少なくとも、過去の傷口をえぐる可能性は高い。

だがこのままにしておけば、いつかシルファは、もっとひどく傷つくだろう。

「話……？」

何かを察したのか、不安そうな彼女にタシユアは言った。

「夏の終わりとは言え、汗に濡れた服では風邪をひきます。屋敷に戻ってからに」

「あ、ああ……」

彼女がざつと汗を拭き、サイズ（大鎌）をブレスレットに戻すのを待ってから、歩き出す。

砂浜に響く、砂を踏む音を聞きながら思った。

出会った頃は、いつも自信なさそうにしていたシルファ。だが少しずつ、着実に変わっていった。

上級傭兵になってからは、いくつも任務をこなし、後輩たちの指揮も執るようになったせいか、急速に伸びていると思う。

話を聞く限りでは、友人も増えつつあるようだ。

だとすればトラウマの克服は、もう一息なのかもしれない。

——それならば、なお。

自分のそばから一步踏み出せば、彼女の世界が広がり、拓けていくのではないか？ そんなふうにも思う。

もしかすると既に、シルファは立派に独りでやれるのかもしれない。それならばタシユア自身が、彼女の回復を邪魔していることになる。

（どれが事実なのでしょうかね）

もっとも、分かれば苦労はしない。そもそも人の心というのは、そんな単純なものではない。

Episode : 90

歩いてすぐの屋敷へ、二人して戻る。

「部屋はどこです？」

「こつちだ」

さすがにシルファの部屋は分からないため、彼女の先導で廊下を歩いていく。

暗くて足元が見えづらいのだろう、シルファの歩調はゆっくりだった。

（せめて客が居る間くらい、明かりを点ければいいものを）

夜目の利く自分はさほど困らないが、シルファはそうは行かない。だいいちこれでは、夜中に部屋を出た客が、何かにぶつかって怪我をしかねない。

そんなことを思いながら着いた部屋は、タシユアにあてがわれたのと同じ階だった。どうやらこの階すべてが、客用になっているらしい。

鍵を開け中に入ったシルファに続いて、タシユアも部屋に足を踏み入れる。

（……おや）

点けられた明かりに目を慣らしながら、見回した室内は、タシユアの部屋より立派だった。ルーフェアの客ということで、最上位の部屋が充てられたのだらう。

「それで、話とは何だ？」

声を少し尖らせて、シルファが言う。先程はだいぶ気持ちの整理

がついたように見えたが、違ったようだ。

「その前に、着替えを。風邪をひきます」

促すと、彼女はうなずいてクローゼットを開けた。しばらく逗留しているせいで、持ち物は鞆から出してあるらしい。

着替えを持って、部屋に備えられた浴室へ、彼女の姿が消えた。

扉ごしに響く水音を聞きながら、どう言えばいいのか考える。

シルファが向けている好意がどんなものは、分かっているつもりだった。彼女自ら身体を許すのが、どういう意味を持つのか、さすがのタシユアでも理解できる。

むしろ、だからこそ、だった。

それだけの好意を向けてくれているのに、何かの形で彼女の成長を邪魔するようなことは、あつてはならないと思う。

いまのうちにと呼び鈴を鳴らし、温かい飲み物を頼み、待つ。

やがて水音が止み、髪を纏め上げたシルファが姿を見せた。

「それで、話というのは……」

「二点ほど。ですがまず、かけてはどうです？」

椅子を勧め、落ち着いたところで話し出す。

「一点目ですが……あなたの学院内での立場が、変わったのは知っていますか？」

「何のことだ？」

どうやらカレアナは、まだこの件を話していなかったらしい。

（真っ先に当人に言うべきでしょうに……）

もっともタシユアのときも、頭越しに決めて事後通達だったことを思うと、今回もそうなのだろう。

「私が卒業までの期間、すでに買い取られていることは知っていますね？」

「ああ、聞いた」

タシユアもこの件については、シルファに話している。それをきちんと、覚えていたようだ。

「推測ですが、シルファ、あなたも同じ状況になっています」

彼女が、いぶかしむような表情になった。

「……どうということだ？」

「そのままとしか言いようがないのです」

言って、簡単に説明する。

学園長室であった、幾つもの意味ありげな会話と行動。加えて先程のカレアナの、「シルファはうちで預かる、これでいいじゃない」の台詞。

これから考えられる結論が、シルファの買取しかない。そう彼女に言う。

「よく分からないが……買われるとどうなるんだ？」

「特には。時々急に呼び出されて、よく分からない任務まがいのことを、させられることはありませんが」

シルファがあきれた顔になった。

「それじゃいったい、何のために買っただ？ 意味がないじゃないか」

「私に訊かれても。買った当人に聞いてください」

そうは言ったものの、だいたいの見当はついていた。おそらく、母親がらみだろう。

タシユアの養母であるローズとカレアナは、かなり親しかったらしい。

そして、あの性格のカレアナだ。友人に子が居た——ルーフェイアからの連絡で気づいたのだろう——と知って、保護のために策を立て、こんな形で庇護を与えようと思いついたに違いない。

それがシルファにまで及ぶとは、さすがに思わなかったが……。

当のシルファはまだ、不思議そうだった。

「ともかく、買われたんだ……。何を、どうすればいいんだ？」

「何も。なにしろこの買い取りは、保護が目的ですから」

「保護？ 意味が分からないんだが……」

当たり前だと思う。こんな常軌を逸した話など、分かるほうがおかしい。

その「常軌を逸した話」を、シルファに順を追って説明していく。

「買取りというと分かりづらくなりますが、これは言うなれば、無期限の任務のようなものです。ですからこれを盾に、他の任務を断れるのですよ」

「え……？」

任務を断る学院生は、まずいない。断れば何らかの不利益が発生し、最悪の場合退学となるからだ。

それが可能ということが、どれほどの特権なのかは、上級隊のシルファにはすぐ分かったようだった。

「もちろん、限度はあるでしょうがね」

「そうだろうな」

いくら盾があるにせよ、生徒の面倒を見ているのは学院だ。その学院が損失をこうむるようなことは、さすがに許されないだろう。

「それにしてもそんなこと、誰が、何のために……」

「『誰が』は、ここの主ですね。」

何のためにというのは先ほと言ったとおり、当人にでも訊いてください。まあ状況から察するに、保護を与えなくなった、と言ったところでしょうが」

シルファが考え込む。

「理由はともかくとして、ここの主というのは……あの車椅子の人か……」

「違いますよ。ルーフェイアの母親のほうです」

一瞬の間。

そしてシルファは、納得したように何度も軽くうなずいた。

「あの人なら……確かにやるかもしれないな」

どういうわけか、あっさりと受け入れてしまったようだ。

（何をしたのやら）

カレアナの行動は常に常識外だが、シルファに対しても、そういうことをやったらしい。

「だがこれじゃ、ちゃんとした保護には……ならないか？ 断れない任務は、危険なものが多いだろうし」

シルファの問いに、感心する。いつの間にかこういうことを、瞬時に気づくようになったようだ。

実際シルファの言うとおり、断れない任務があるとすれば、「他の生徒では代えが利かないもの」だ。

当然そういうものは、名指しされた生徒の能力でしか為せないもので、それだけに危険も伴う。

その点を、シルファは指摘したのだ。

Episode : 92

「あなたの言うとおりですが、この買い取りの意味は、おそらくそこだけではありません」

推測であることを前置いて——だが間違っではないはず——タシユアは話し始めた。

「もう気づいているでしょうが、私たちを買い取ったルーフェアの母親とその家は、財界の実力者でもあります」

「だろうな……。アヴァンでのルーフェアも、すごかった」

何があったのは知らないが、どうもルーフェアまで、その手の権力を使っただけらしい。

タシユアの視線に気づいたのか、シルファが言いわけめいたことを言う。

「その、あれだぞ。別にわざとじゃなくて……私が困っていたのを、助けてくれたんだ」

「後輩に助けられてどうするのです」

つい突っ込むと、シルファが睨んできた。どうやらまた、怒りが再燃したらしい。

（困りましたねえ）

よほど根が深いようだ。

もつともこの件に関しては、タシユアはそれ以上突っ込む気はなかった。

基本的に大人しく受け身のルーフェアが、横からそれだけのことをしたのだ。通常では手に負えないような事態が起こり、それを何とかしたというところだろう。

なのでそれ以上は触れず、話を先に進める。

「ともかく、そういう家です。だとすれば私たちが学院を出たとしても、職には困らないでしょうね」

「……！」

シルファも気づいたようだった。

シエラの本校では、要件さえ満たせば卒業は随時可能だ。特に上級隊は、入った時点で卒業の要件を満たすため、その気になればいつでも学院を出られる。

しかし実際には大多数が、年齢制限ギリギリの20歳の春まで在籍していた。

理由は単純で、経済的なものだ。

本校生は孤児が多い。このため学院を出ても経済的な後ろ盾がなく、まず仕事を探すところから始めなくてはならない。

一方で学院そのものには、「シエラ本校生」というブランドを目当てに、かなりの方面から募集が来る。加えて20歳まで在籍してきちんと単位を取れば、士官学校卒業と同等とみなされ、各国の軍へ士官候補生として採用される道もあるのだ。

結果、学院側の仲介を経てどこかへ就職を決め、20歳の春に卒業する生徒がほとんどだった。

だが後ろ盾があるなら、話は別だ。

カレアナがどのような契約をどう学院と交わしたかは知らないが、相当の額が動いているのは間違いない。

それは裏を返せば、タシユアとシルファの二人に対してそれだけのことをする用意がある、という証明にでもあった。

いくら学院側に有利な条件とは言え、上級隊を2人だ。ちよつと

やそつとの額ではないだろう。が、カレアナはその条件を飲んで
いる。

加えて彼女は今現在、シュマーの実質的なトップだ。そしてシュ
マーは傭兵業から派生して、軍事、医療、科学と、多岐に手を広げ
る、一大財閥を有している。

その彼女が後ろ盾となったのだ。こちらが望めば就職先くらい、
いくらでも探してくるはずだ。ならば早々に学院を出て好きな道へ
進むことも、不可能ではない。

だから、問う。

「シルファ、あなたはこの先、どうして行くつもりなのですか？」
ギリギリまで学院にいるのはいい。だがその先を考えたとき、今
までになかった選択肢が、突如としてできている。

もちろん、早急に答えを出す必要はない。ただ、今後やりたいこ
とはあるのか、どういう道を選ぶのか、それらを含めて考えるには
よい機会だ。

Episode : 93

「どうすると言われても……夏休みはもう、終わりだろう？ 学院へ帰るしか……」

少々ズレたシルファらしい答えに、思わず苦笑する。

「そういう意味ではありませんよ。もっと先、学院を出てからどうするか、ということですよ」

「出てからって、学院で就職の手配をしてもらって、働くのだろう？ あるいは、ルーフェイアのお母さんに頼んで」

予想通りの答えが返ってくる。

「そうですね。ではどういった場で働くのか、端的に言えばやりたいたいことはないのですか？」

「え……」

シルファが答えに詰まった。やはり、心配していたとおりだったらしい。

彼女がいま目標にしているのは、タシユアだ。目の前に居る相手に、少しでも追いつくことだけを考えている。

（それが悪いとは言いませんが……）

ただ、将来へはなかなか繋がらない道だ。ひたすら追いかけて、結局何にもならなかった、ということも考えられる。

当然だが、そうなって欲しくはなかった。

「漠然としすぎてわかりづらいですかね。具体例を出しましょうか」
困惑しているシルファに、順に説明していく。

「例えばより専門的な知識や技術が身につけられる、大学へ進学と

いう道もあります。あるいはこのまま学院に残り、士官候補として各国の軍に進むこともできます。もし、やりたいことが見つからなければ、それを探すために各地を見て回るのも、良い経験になると思いますよ」

状況が変わった今、選択肢は多岐にわたる。本人がただ遊んで暮らそうというのでなければ、ほとんどのことでサポートが受けられるはずだ。

（まったく、たいしたお節介ですこと……）

だがそれが、的確に働いているのは事実だった。シュマーで采配を振るっているのは、伊達ではないようだ。

「やりたいことは別に、学院や軍と、関係がなくてもいいのです」シルファがはつとした表情になった。何か思い当たったらしい。本来なら、シエラに来ることもなかったシルファ。あんなことさえなければ、財のある両親に守られ危険を冒すこともなく、不自由のない生活ができていただろう。

そして今、そういう生活へ戻る選択肢までも、彼女の目の前にはある。

何しろあの性格のカレアナだ。シルファが本気で望むなら、彼女が追い出された武器商の実家を、強引に買い戻すくらいやってのけるに違いない。

—— やや癢に触るが。

だがそれで彼女の望みが叶うなら、タシユアとしては受け入れられる範囲だった。

「目標、夢、野心、言い方はこの際何でも良いでしょう。ともかく、そういうものです」

「……考えたこともないな……」

一途なシルファにとっては、遠大な話に思えたのだろう。どこか遠くを見るような瞳になる。

実際、学院生が最終的な進路を真剣に考え出すのは、最終学年かその前の年くらいだ。まだ少し間があるシルファが実感がないのも、そうおかしいことではない。

それでもタシユアは、そのままにしておけなかった。自分たちが在籍しているのはM e Sのシエラ学院、それも本校だ。何があるか分からない。

タシユアはかつて身内と呼べる存在を、目の前であっさりと亡くした。それ故に、「何もないだろう」と樂觀視できない。

ここから先は、彼女のトラウマに触ることになるかもしれない。

そう思いながらもタシユアは、核心へと話を進めた。

Episode : 94

Sylpha

暗い砂浜で訓練をしていた私のところへ、「話がある」とタシユアは来た。

汗をかいているのに気づいて、気を使ってくれたのだろう。彼の部屋ではなく、私の部屋へ向かった。

ちよつと悪い気はしたが、タシユアに勧められたのもあって、先にシャワーを浴びて着替える。

「それで、話というのは……」

「二点ほど。ですがまず、かけてはどうです？」

だが話は私が想像していたような、今回の旅行のことではなかった。「私を買われた」ということと、そこから派生して進路のことを、彼は整理しながら私に言ったのだ。

「目標、夢、野心、言い方はこの際何でも良いでしょう。ともかく、そういうものです」

「……考えたこともないな……」

もちろん、同級生とそんな話になることはある。だがまだもう少し先のことなので、悩むほど真剣に考えたことはなかった。せいぜい、先輩たちから採用の情報を仕入れるくらいだ。

だいいちそれでみんなやれているし、私自身も、仕官候補の単位も取っている。具体的にどこになるかはともかくとして、上級隊に居ることも考えると、就職先に困ることはないはずだった。

しかもタシユアの話では、ルーフェイアのお母さんが私たちの、

後ろ盾になってくれたのだという。ならばなおさら、心配はないはずだ。

それなのに、なぜこれほどまでにタシユアはこだわるのか。今までになかったことに、不安を覚える。

「それにしても……どうしたんだ？　突然、こんなこと……」

「環境が変わりましたからね。視野を広げるには丁度良い機会かと思ひまして」

恐る恐る訊くと、タシユアはこともなげに答えた。

「卒業まではまだ間がありますが、今回の件を有効活用するのでしたら、早い時期から考えるのもよいかと」

「そ、そうか……」

安堵の息を小さく吐く。何かもつと深刻なことかと思っていたが、違ったようだ。

「急に言うから、何か……あつたのかと思つたぞ」

ちょうどその時ドアがノックされ、お茶とお菓子とが届けられた。私がシャワーを浴びている間に、頼んでおいてくれたらしい。

「冷めないうちに飲んだらどうです？」

「そうだな」

手を伸ばし、揺れるカップの中身を見ながら思う。

「将来」と言われてもピンと来ない。それに私は、タシユアといつしよにいられさえすれば十分だ。

タシユアといられれば、それで……。

「……タシユアは、何か考えていたりするの？」

ふと思ひ至つて聞いてみる。

もしかすると私と同じで、今回状況が変わつて初めて、考え出し

たのではないか。そんな考えが頭をよぎったのだ。

「ええ、そうですね。考えてはいますよ」

「そ、そうなのか。やっぱり私とは違うな……」

よく考えてみれば、私にそれを問うタシユアが、考えていないはずはない。

けれど次の言葉は、意味深だった。

「正確に言えば、その道以外はないと言っているのですか」

「……その道？」

聞き返す。

「戦場ですよ」

自嘲気味に、彼が答えた。

Episode: 95

「そんなことはないだろう……？ タシユアなら、それこそ大学に
だつて……」

教官からの評価が低いという問題はあるが、タシユアは実技と同じくらい学科も出来る。しかも在籍しているのは、英才教育で知られるシエラの本校、それもAクラスだ。どんな難関校でも難なく入れるはずだった。

だいいち私には、軍とは関係ない進路があると言っている。なに自分はまた戦場へ戻るなど、矛盾だらけだ。
言葉を続けるタシユアから、表情が消える。

「私は、そういう存在ですからね。他に行くべきところなど、ありません」

凍りついたような、表情のない横顔。

深い溝が、そこにはあった。

たぶん、心のどこかで期待していたのだと思う。私がタシユアと居られればいいように、彼にも同じであつてほしいと。

だがそんな思いが、どれほど甘いものだったのかを思い知る。

「すでにこの身は血塗れです。直間接を問わなければ、手にかけて命は、ゆうに三桁を越えるでしょう」

私さえも見たことがない、そういう修羅場を知っている者の言葉。何か言わなくてはと思うが、声にならない。

「怨み憎しみ……どこでどれだけ買っていることが、最早想像することすらできません」

「けど、それは、タシユアのせいじゃ……」
「やっとそれだけ言う。」

彼の言っていることは事実だが、好きでやったことではない。そういう立場に無理やり置かれて、生きるためにはそうするしかないのだ。

「殺された側にしてみれば、そんなことは関係ありませんよ」
私の必死の言葉に、タシユアが冷静に返す。

「ただひたすらに戦い続けて、惨たらしく死ぬのが、私にはお似合いでしょね」

あまりにも冷たい言葉と表情に、背筋が凍る思いだった。
たぶん、怒っているのだろう。感情を向けている相手は……彼自身か。

「まあ、私のことはよいでしょう。何せ気まぐれな性格です。こんなことを言いながらも、どこぞで生き延びているかもしれませんね」

まだ茫然としている私に、タシユアが少しだけ声のトーンを変えて言う。

あれは本音だろうが、言いすぎたと思っているのかもしれない。

「ただ、シルファ、あなたの選択肢が広がったということは、間違いありません。今までよりもっと自由に、好きな進路を選択できますよ。」

無限の可能性、などとは言いませんけどね」
いつものタシユアに、ほっとする自分が居た。

「慌てる必要も、まだないでしょう。卒業まで二年半ありますし、理由さえ正当ならルーフェイアの母親は、もう数年はおそらく待ち

ます。いろいろな情報を集めながら、ゆっくり考えるのがいいかと」
「……そうだな」

確かにタシユアの言うとおり、今から考えておいてもいいことだ。とはいえ学院で斡旋してくれるところ以外は、何があるのかさえよく分からない。まずはそこからだろう。

帰ったら調べてみよう、そんなことを思いながら、ぬるくなったカップの中身を飲む。

「とりあえず、少々脱線してしまいましたが、以上が一点目です。それで、二点目ですが……」

「まだあったのか？」

ここまでもずいぶん深刻な話なのに、終わりではなかったらしい。

「最初に、二点あると言いましたが」

「そうだったか……？」

言われてみれば、そんな気はする。だが他の事——なにしろ私の部屋へ押しかけてきたのだ——を考えたりしていて、よく覚えていなかった。

Episode : 96

「まったく。上級隊がそれでは、命が幾つあっても足りませんよ。それで、二点目なのですが」

突っ込んだあと一旦言葉を切って、タシユアがまっすぐ私を見た。真剣な紅い瞳に、なぜかどきりとする。もしかしたら、そんなことを考える。

「シルファ、私が死んだら、あなたはどうします？」

「——え？」

予想もしなかった言葉に、すべてが止まった気がした。言われていること自体は分かる。だが、理解できない。

タシユアが——死ぬ？

「そんなこと……」

あるわけがない。私が死ぬならともかく、タシユアが死ぬなんてあり得ない。

「……冗談……だろう？」

多分私は、笑い飛ばそうとしたのだと思う。けれど表情は、意志に反して固まったままだった。

「冗談で済めばよいのですけどね」

ほんの少し、タシユアが哀しげな顔をする。

「無いとは言えませんが。なにしろ、傭兵として任務に出る身ですから。予想外のことは、いつでも起こり得ます」

畳み掛けるように続く言葉。

「そのとき、あなたは立ち直れますか？」

「……」

答えられるわけがなかった。

——タシユアが、居なくなる。

そうしたら私は、また独りになってしまふ。やっと見つけた居場所が、なくなってしまう。

「いや、だ……」

呼び起こされる記憶に、手足が冷たくなってくる。
血の気が引いていくのが、自分でも分かる。

「独りは、いやだ……」

ありありと思い出す。楽しそうな話し声を、壁越しに聞いていた日々を。

暗い部屋の中、ひざを抱えて、聞き耳だけを立てていた。

本当は中に入れてもらって、一緒に話をしたかった。手の触れる場所に、誰かに居て欲しかった。

けれどそれを口にするのは、家から追い出されることを意味して
いて……。

「置いて……行かないでくれ……」

怖くて涙がこぼれる。

優しくしてくれた人と、何度も何度も引き離された。泣いて追いつがると、ひどく怒られた。

だから目立たないように、追い出されないように、家の隅で息をひそめて、ただ黙って毎日を過ごしていた。

暗く、冷たく、寂しい記憶。

辛くて悲しくて、このまま消えてしまいたいと、何度思っただろ

うか？

「シルファ、落ち着いてください」
タシュアの声。

「別に、今日明日死ぬわけではありませんよ。生き汚いのが取り得
でしてね。ただ――」

何か言っているが、頭に入っていない。
いやだ……独りはいやだ……。

Episode: 97

「——あなた自身の居場所を——」

「そんな話、聞きたくないっ!」
思わず叫ぶ。

何も聞きたくなくて、耳をふさぐ。言葉を振り払いたくて、頭を振る。

居場所はある。ここにある。他になんてない。
それなのに……。

「ですから、シルファ——」

タシユアが言いかけたのを無視して、立ち上がる。テーブル越しに手を伸ばし、彼の首に腕を回す。身を乗り出して、引き寄せて、しがみつく。

——離れたらきつと、独りになってしまう。

どこかがカップに引っかかったのだろう、床に落ちて割れる音がした。

服越しに伝わる、体温。

タシユアがまた何か言おうとしたが、強引に唇を重ねる。

——聞きたくない。

タシユアと居られればそれでいい。他に何も要らない。将来がどうでも構わない。だから……。

タシユアの手が、私の頭を包み込んだ。

息をついたところで少しだけ離されてから、抱き寄せられる。
広い肩と胸。その中で震える。また何もかも失くしてしまうかも

しれない、その恐怖から逃れられない。

「独りは、いやだ……」

答えはなくて、代わりにそつと頭を撫でられた。

彼の手が動くたびに、少しずつ不安が溶ける。小さな安心感が、徐々に広がっていく。

何度も頭を撫でられたあと、必死にしがみ付いていた腕をそつとほどかれて、座らされた。

「……少しは落ち着きましたか？」

子供に語りかけるような、やわらかい口調。

怒ったりしていないのは分かる。気を使ってくれているのも分かる。

けれどそれでも、離れると、まだ震えが収まらない。涙が止まらない。

——怖い。

置いていかれるのが、誰も居なくなるのが、独りになるのが怖い。やっと抜け出したのに、またそうになったら……。

「言葉が過ぎましたかね……」

タシユアが言って、私の隣に席を移した。

子供のように頭を抱き寄せられて、また撫でられる。

「先に死んだりしないと、言えればよいのですけどね……できない約束に意味はありませんから」

言われて、必死に首を振る。

「意味がなくても、いい……」

言葉が欲しかった。だがタシユアは、何も言わない。

「独りに……しないでくれ……」

「シルファ、今のあなたなら、独りではないでしょう?」
やっと返ってきたのは、思っていたのとは違う答え。

「私以外にも一緒にいてくれる友人、慕ってくれる後輩……見えて
いるのに、目を閉じていませんか?」

そうじゃない。私が欲しいのは……。

「そして何より、今まで頑張ってきた自分自身を、もっと評価——」
言葉の途中で、泣きながら抱きつく。

勢いでタシユアまでバランスを崩し、2人で椅子から落ちて、床
へ倒れこんだ。私がどこもぶつけなかったのは、タシユアがかばっ
てくれたのだろう。

いつもそうやって、気を使ってくれる。どうしても必要なときは、
必要なだけ助けてくれる。

なのに、今はどうして……。

それからどのくらい、腕の中で泣いていただろう? はっと気づ
くと、ベッドの上だった。

——夢?

一瞬そうも思ったが、すぐ違うと思い直す。たぶんあのまま、泣
きながら寝てしまったのだろう。

「おやすみなさい。私が言つのなのですが、良い夢を」。タシ
ユアのそんな言葉を、夢うつつに聞いた気がする。

テーブルクロスには染みがあったが、割れたはずのカップはなか
った。きつと、片付けてくれたのだろう。

そして代わりに、書き置きがあった

『新学期が始まるので、一足先に学院に戻ります』

丁寧に書かれた文字。

タシユアは何を思いながら、これを書いたのだろうか？

『私が一言言えば、もしかしたらそれでよいのかもしれませんが。ただ、その時点でおそらくあなたは他の可能性を考慮しなくなるでしょう。』

今回の旅行中、色々な人や土地に触れたものではありませんか？

時間をかけて、よく考えてみてください。自分のやりたいこと、そして自分の生きる道を。

あなた自身が持つもの、周りにあるもの……気づいていない何かがあるかもしれませんよ』

言葉を選んで、彼の言いたかったことが書かれている。

ただ私の心に浮かんだのは、違うことだった

——行ってしまった。

これから私は、何をどう考えてどうすればいいのだろうか……。

Episode : 98

R u f e i r

学院へ戻ってきて、数日が過ぎた。

でも戻ったのは、あたしとタシユア先輩だけだ。シルファ先輩は途中で具合が悪くなったらしくて、そのまま屋敷に残ってる。

——大丈夫かな？

姉さんの話じゃ、旅の疲れが出たらしい。心配で帰る前に会おうとしたけど、寝てるからダメだと言われてしまった。

医者と呼ぶって言うてたから、平気だとは思っけど……。いつそ向こうの屋敷に訊いてみようかと思いながら、制服に着替える。

「ルーフエ、早くしないと朝ごはん、食べそこねちゃうよ？」

「うん、今……」

ナティエスの言葉に答えかけて、気づく。魔視鏡の告知灯が点滅していた。

「どしたの？」

不思議そうに、彼女がドアの影から首を出す。

「なんか……どこからメッセージ、みたい」

「無視しちゃえば？ 朝ごはんのあとでも、間に合うだろうし」

彼女の言うとおりで。本当に緊急なら、学院へ通話石を使ったほうがいい。

けど今日に限って、気になって仕方なかった。

「ごめん、なんかすごく気になるから……先に、行っって」

「え？ いいの？ まあルーフェがそう言うなら、行かせてもらうけど」

学院の食料争奪戦はすごいから、ナティエスが心配顔だ。

「大丈夫、これだけ見たら、行くから」

「じゃ、おばさんたちに頼んで、ルーフェの分ちよつと取り置いてもらうね」

「ありがと」

お礼を言いながら、急いで伝言を開封する。

差出人は、姉さんだった。

「え……」

急いでタシユア先輩に知らせたほうが、いいかもしれない。中を読んでそう思う。

ただ、探さないと居場所が分からない。

この時間だと、やっぱり確率が高いのは……食堂だろうか？ どっちにしても、ナティエスを追いかけたほうがよさそうだ。

急いで鍵を閉めて、食堂へ向かう。

「あ、ルーフェ、こっち！」

食堂の中には先輩の姿はなかった。代わりにナティエスに呼ばれる。

「ルーフェのぶん、これでいいよね？」

「うん、ありがと」

途中でナティエスと合流したんだろう、シーモアも一緒だ。

「そういえば……ミルは？」

「あいつなら、まだアヴァンさ」

シーモアが答えた。

「なんでも、向こうで爺さんの具合が悪くなったらしくてね。数日様子見てから帰るって、連絡あったらしい」

「そうなんだ……」

身内の人が具合が悪いんじゃ、さしものミルも心配なんだろう。

「それまで静かでいいさ」

「シーモアってば」

思わずみんなで、顔を見合わせて笑った。

「ともかく食べない？ お腹すいちゃって」

「そうだね」

みんなで話しながらの、朝食が始まる。

天気のこと、教官のこと、テストのこと、そして夏休みのこと……。

「そいえばルーフェ、今年の夏ってたしか、シルファ先輩と旅行行つてたんだよね？」

「うん」

思いもかけなかったことだけど、いろいろ回れて楽しかった。たぶんナティエスたちは、そのことが聞きたいんだろう。

Episode : 99

「その旅行ってさ」

「うん」

相槌をうちながら、何があったか思い返しておく。
けど訊かれたのは、ぜんぜん別のことだった。

「シルファ先輩、どうだった？」

「どうって……？」

何を言われてるのが分からない。

「だから、シルファ先輩の様子。ヘンだったりしなかった？」

「ヘンっていうか……優しいけど、怒ってた……かな？」

おおむねよく面倒を見てくれて、お姉さんみたいだったけど、たまに近づけないほど怒ってたのを覚えてる。

「うーん、じゃあやっぱりあの噂、ホントだったのかな？」

話を聞いたナティエスが、首をかしげながら言った。

「噂って……？」

「タシユア先輩とシルファ先輩が別れた、って噂」

どうやら寮で、仕入れてきたらしい。

「どっからそんな話、出てきたのさ」

「なんかいろいろ」

そう前置いて、ナティエスが噂の内容を話し始めた。

「最初シルファ先輩が、激怒して学院出てったらしくて」

旅行に行った、その日のことだろう。あのときはものすごい怒り方で、問答無用で連れて行かれた。

「しかもそのあと、シルファ先輩は行方不明。そのうえタシユア先輩も、単独でどっか行った上、独りで帰ってきてる。だから……って」

まくしたてるナティエスに、シーモアが突っ込んだ。

「でもそんだけじゃ、別れたって証拠にはならないじゃないか」

「それはそうなんだけど……でもルーフェも、シルファ先輩怒ってたって言うし」

ナティエスの言葉に考え込む。

シルファ先輩が激怒してたのは事実だけど、行方不明っていうのはあたしがシュマーの島へ誘ったからだ。それにタシユア先輩とも、その島で顔を合わせてる。

ただ会った瞬間いきなり物が飛んだから、ケンカしてるのは間違いないさそうだった。

けどそれが、別れるってとこまで行くだろうか……？

悩んでる横で、ナティエスがさらに噂を披露する。

「あとね、タシユア先輩が浮気した、って話もあったかな」
さすがに、シーモアと顔を見合わせた。

「そういうタマかい、あの先輩」

「違うと思う……」

上手く言えないけどタシユア先輩、そういうことはしない気がする。

「あたしもそう思うんだけど」

そこで一口ジュースを飲んで、ナティエスが続けた。

「タシユア先輩が、年上の美人と出かけて帰ってくるの、見た人が

いるって。だからきつとタシユア先輩が浮気してて、気づいたシルファ先輩が激怒して、別れたんだろうって」

「全部違うと思う……」

「なんだか腑に落ちない。なにより、「年上の美人」というのが、何か引っかかる。」

「うーん、ルーフェ的にはやっぱりそう思う？ でも見た人多いって言うし……」

「どんな人か、聞いてないのかい？」

シーモアに訊かれて、ナティエスが思い出すような顔になった。

「えーっと確か、年上で美人でグラマーですごい色気あって、人妻で金髪？」

「なんか心当たりがあるのは、気のせいだろうか。」

制服のイラストをアップしました♪ > i 1 6 2 5 — 1 6 6 <

お願いして描いていただいたものです

こちらは以前のイラスト > i 1 1 1 2 7 — 1 6 6 < > i 6 2 7

— 1 6 6 <

なおイラスト等、随時募集中です♪

あとがき

新作を読んでもらって、ありがとうございます♪ いつもどおり

【夜8時過ぎ】の更新です。

ここからリメイクでなく、完全な新作に変わります。

評価・感想大歓迎です。一言でもお気軽にどうぞ。

Episode : 100

「ずいぶんはつきりしてるじゃないか」

「だって、割と最近の話だし。それにタシユア先輩も目立つから、そんな金髪人妻と居たら、余計じゃない？」

また何か引かかる。

しばらく考えて、今度はあたしは、違和感の正体に思い至った。

「人妻って……なんで、分かったの？」

ふつつなら、そうだと言われない限り、結婚してるかどうかなんて分からないはずだ。なのにそういう話になってるってことは、何か証拠でもあったんだろうか？

「あ、それ？ あたしも聞いたんだけど、なんか娘連れてたって……

あれ??」

「……………」

今度は三人で顔を見合わせた。

「ルーフェ、あんたこの間、おふくろさんと一緒に帰ってきたんじゃないかったかい？」

「うん」

シーモアに訊かれてうなずく。あたしはいいつて言ったけど、母さん学院長と話があると言って、学院までついてきた。

「もしかしてその時、タシユア先輩とも一緒だったりした？」

「うん」

ナティエスの質問にもうなずく。何度も船を出すわけにも行かないから、あの島から学院まで、タシユア先輩も一緒だ。

「じゃあ、タシユア先輩の相手の、人妻金髪美人って……」

「それたぶん……母さん」

「なんだか知らないうちに、話がとんでもないことになってるらしい。」

「……あの人はあり得ないだろ」

「だよ。ルーフェのおばさん、そういうタイプじゃなさそうだもん」

「会ったことがあるせいか、二人とも分かってくれたみたいだ。」

「おばさんの好み、ディアスさんタイプだろうしねえ。タシユア先輩だとちよつと違うし、年下好みに思えないな」

「そうそう。クリアゾンのボスとならありそうだけど、タシユア先輩はないよねー」

「何かすごく違うところで、すごいことを言われてる気がする。」

「えーっとそうすると、浮気はなしかー」

「ケンカしただけじゃないか？」

「二人がなんだか、検証を始めた。」

「シルファ先輩が怒ってたのは事実らしいから、その辺じゃないかね」

「やつぱそつかなー。ルーフェなんか知ってる？」

「いきなり話を振られる。」

「えっと……」

「何をどう言ったらいいんだろう？」

「シルファ先輩がなんだか怒ってたのは、事実だ。そして理由は、タシユア先輩との何かだろう。じゃなきゃいきなり、物が飛んだりはない。」

でも、分かってるのはそれだけだ。
それを言っと、ナティエスがちよつとがっかりした顔になった。

「シルファ先輩と一緒にたつていうから、何か知ってると思ったんだけどなー。ってそういえば、ルーフェ、シルファ先輩どこ行っちゃったの？ 一緒だったんでしょ？」

「えっと、その、分らない……」

とつさに嘘をつく。シルファ先輩が具合が悪くて、そのうえシュマーの島にいるなんて、ぜったいに言えない。

「んー、そつか。もしかして先輩、任務？」

「あ、うん、たしかそう……言つてたかな？」

「じゃあ分かんないねー」

ごまかせたみたいだ。

結局そのあとは、肝心な情報が抜けてるのもあって、ナティエスとシーモアの「検証」は堂々巡りだった。

制服のイラストをupしました♪ > i 1 6 2 5 — 1 6 6 <

お願いして描いていただいたものです

こちらは以前のイラスト > i 1 1 2 7 — 1 6 6 < > i 6 2 7

— 1 6 6 <

なおイラスト等、随時募集中です♪

あとがき

新作を読んでくださって、ありがとうございます♪ いつもどおり
【夜8時過ぎ】の更新です。

ここからリメイクでなく、完全な新作に変わります。
感想等、お気軽にどうぞ

Episode:101

「まあそのうち、何がホントか分かるんじゃないか？」

「そだね」

元が噂話だから、棚上げすることで落ち着いたらしい。これ以上は追求されなさそうで、ほっとする。

——それにしても。

最初にこの噂を言い出した人、何を考えてたんだろう？ 浮気とか別れたとか、あの先輩じゃありそうにないの、分かりそうなのに。何より、あの母さんを捕まえて浮気相手とか、先輩が可哀想だ。

だいいちこの話だって、母さんが強引に着いて来たところから始まって。せめてケンディクまでにしてくれば、こうはならなかった。

母さん的にはなかなか一緒に居られないから、少しでも一緒に居ようっていうんだろうけど、けっこう迷惑だ。

そんなことを思いつつ食べていて……周りを見回して気づく。

「人……少なく、なってる？」

いつの間にか、食堂の中ががらがらだ。

「え？ あ、やだ。話してたらこんな時間！」

「ヤバいね。急いで食べて、教材持って行かないと」

話に夢中になって、時間を忘れてたらしい。みんなで慌ててご飯を食べて、立ち上がる。

「1時間目、なんだっけかね？」

「えっと……魔法物理学」

「きゃー、予習してないっ！」

そんなことを言いながら、ともかく遅れないようにと、あたしたちは走り出した。

放課後日も暮れたのに、あたしはまだタシユア先輩を探してた。教室にも二度ほど行ってみたけど、どうも時間割が合わないらしくて、どちらも空振り。昼休みも会えなかったし、そのあと今日はいろいろやることがあって、けっきょくこの時間だ。

少し考えて、図書館へ向かう。タシユア先輩は、ここがいちばん確率が高い。

けど先輩の姿はなかった。もう時間が遅いから、どこかへ行ってしまったのかもしれない。

かといって、部屋は分からないし……。

誰か男子を捕まえて訊けばいいのだろうけど、なんだか気後れする。

しばらく考えて、あたしは食堂へ行ってみることにした。

先輩がどこにいるかは分からないけど、食べにこないってことはないだろう。だったら食堂で待っていれば、捕まえられるはずだ。

食堂のおばさんにわけを話して、入り口近くの席で、待たせてもらうことにする。

少しづつ人が増えていく、食堂内。

それを眺めながら、どのくらい経っただろう？ 見間違えようの

ない銀髪が、やっと入ってきた。

先輩が食事を揃えて席に着くのを待って、急いで立ち上がる。

タシユア先輩はなんのだから分からないけど、フォークを片手にもう資料を見ていた。

「あの、タシユア先輩……」

「なんの用です」

顔を上げた先輩の、いつもどおりの声。けどシルファ先輩を心配してないわけじゃ、ないと思う。

「その、シルファ先輩のこと……なんですけど」

「彼女が何か？」

言っているのかどうか、ここまで来て迷っている自分が居た。でもシルファ先輩のことを一番知りたいのは、タシユア先輩のはずだから、言う。

「シルファ先輩……かなり具合が、悪いらしくて。まだしばらく、帰せないって……」

「そうですね、ありがとうございます」

ただそれだけの返事。先輩がどんな気持ちでいるのかは、見ているだけでは全く分からない。

「まだ何か？」

そのまま立っていたせいだろう、先輩に言われる。

「え？ あ、すみません」

謝ってテーブルから離れかけて……でも振り返って見たタシユア先輩は、少しだけ悲しそうにも見えた。

Episode:102

Sylpha

潮騒の音が、響いていた。

あの日から何日経ったのだろうか？ 何度か夜があった気がするが、よく分からなかった。

——タシユアが、いない。

思っのはそればかりだ。

クラスや学年が違うから、常に一緒というわけではないが……それでも私が望めば、任務でもない限り一緒に居られた。

なのに、行ってしまった。ずっと恐れていたことが、起こってしまった。

怖かった。また独りになるのが怖くて、だから置き去りにされないよう、隣に立っていられるよう、必死に勉強し、訓練を重ねてきた。

それでもこうなったということは、やっぱり私では、ダメだったのだろうか……？

彼の言葉を思い返す。

自分が死んだらどうするのか、立ち直れるのかと、タシユアは訊いてきた。訊いてきたからには、何か答えるべきだったのだろう。けれど、

考えることさえ出来ない。

タシユアが死ぬということは、私が独りになるということ……。

思っただけで、身体が震えて涙がこぼれる。あの辛さが甦る。

良くない状態だということは、自分でも分かる。何かの拍子にこ
うなるようでは、先々問題だろう。

けれど、どうすることもできない。どうしたらいいのか分からな
い。

「私は……」

誰にともなく、言葉が口をついた。

何かにすがりたくて、視線をめぐらす。

と、タシユアの置き手紙が視界に入った。

手を伸ばして、引き寄せる。

『新学期が始まるので、一足先に学院に戻ります』。そう始まっ
て、『時間をかけて、よく考えてみてください。自分のやりたいこ
と、そして自分の生きる道を』と続く文字。

「私は……何をしたいんだろう……」

言葉にしてみたが、よくわからない。

タシユアに追いつきたい、横に並んで歩きたい、その一心だった。
それではダメなのだろうか……？

今までタシユアは、私の決めたことを、そのまま認めてくれてい
た。

明確に反対の色を示したのは、武器を変更すると決めたときぐら
いだ。それでも結局は、認めてくれた。

だから、今回が二度目になる。

——だとしたら、何故。

あるいはもう愛想が尽きて、行ってしまったのだろうか？
自分で考えたことに怖くなって、それでも泣きながら考える。

なぜタシユアは、ここに居てくれないのだろう？ 何を考えようと
言うのだろう？

堂々巡りをするばかりで、答えが出ない。

ただ確かなのは、隣に居てほしいという私の思いが、彼の思う「
何か」と食い違っていることだ。

どうにも考えがまとまらなくて、ぼうつとしてくる。

テーブルの上には、食事が置かれていた。記憶と違うから、眠っ
ている間に取り替えてくれたらしい。

私が食べないせいだろう、冷たいスープやムースなど、口当たり
のいいものばかりだ。

その中からなんとなく、ゼリー寄せを手取る。甘くしたお菓子
ではなく、煮た野菜などが入ったタイプだ。

ひと口食べてみると、予想以上の美味しさだった。さすが、この
屋敷の厨房を預かるだけはある。

Episode : 103

同時に、申し訳なくも思った。

タシユアと話をした翌朝から、食事はこの部屋に運ばれている。

頼んだわけではないのだが、気づくとそうになっていた。

だがとても食べる気にはならなくて、ほとんど手を付けていない。

それなのにここの人は嫌な顔ひとつしないで、適当な時間に下げてきて、代わりにお菓子や飲み物を置いていつてくれている。

食事の内容も、喉越しがいいものに変わってきている。

ここへ顔を出す人たちも、私が眠っていれば起こさず静かに、起きていれば一言二言声をかけてくれて、いつもにこやかだ。

気を遣ってくれているのだと思う。

——どうすれば、いいんだろう。

ずっとここで、こうしているわけにはいかない。何か決めなくてはならない。

私は何がしたいのか、どうすればいいのか……。また振り出しだ。そのままずいぶん長い間考えて——やはりダメなのだろうと、思った。もしこのままでいいのなら、タシユアはあんなことは言わない。

——何か、期待されているのだろうか？

ふと、そんな考えが浮かんだ。

急いで食事を置いて、手紙を手取る。もしそうだとしたら、手がかりはこの手紙だ。

何度も読み返す。

時間をかけて、考えてほしい。気づいてない何かがある。タシユアが言いたかったことは、これだろう。

一方で、気づく。タシユアは別に、すぐに何かをどうしろと言っ
てはいない。私に対して、時間がかかってもいいから、「何か」を
分かることを願っている。

タシユアの言葉に裏はない。何かで駆け引きをする必要があるな
らともかく、彼の言うことは基本的に、言葉どおり受け取っている。
だからやはり私に、期待しているのだと思った。

少しだけ冴えてきた頭で、もう一度考える。

もしタシユアが本当に愛想が尽きたのなら、彼の性格なら、こん
なことはわざわざしない。何も言わず、静かに姿を消すだろう。

だとすればこのまま戻っても、タシユアは受け入れてくれるとは
思う。彼が望む私に知ってほしい「何か」は、気づくまでに時間が
かかるものだと、彼自身が書いているのだから。

だが期待されていると分かった以上、このまま戻ることはできな
かった。

——何を、望んでいるのだろうか？

突然、自分が死んだらどうすると言い出したタシユア。

正直、今も考えるだけで震えるほど怖い。そのことは、タシユア
も分かっているはずだ。

それなのに、わざわざ持ち出した。ならばきつと、それが鍵だ。

だから必死に考えようとして……瞬間、恐怖に襲われた。

これではいけない、何とかしなければと思うが、どうすることも
出来ない。あの頃の辛さが甦ってきて、考え続けることが出来ない。

——どうしよう。

これを何とかしないと、タシユアが望んだ答えには……。

「大丈夫？」

突然耳元で声がして、飛び上がるほど驚く。

「あらま、驚かせちゃったわね。で、大丈夫？」

顔を上げると、ルーフェイアのお母さんがいた。

「ノックしたんだけど、気づかなかったみたいだから、入ってきちゃった」

言いながら悪戯っぽく笑って、手を伸ばしてくる。

「何だかよくわかんないけど、頑張ってたみたいね」

言葉と共に抱き寄せられて、頭を撫でられた。

「あんまり、根詰めると逆効果よ？」

「でも……」

たぶん、それではダメなのだ。踏み出さないといけないはずだ。

そんな私を見て、お母さんがふっと笑った。

Episode : 104

「頑張る子ねー。まあだから、タシユアも離さないんだろうけど」
また頭を撫でられる。

「タシユアに、何言われたの？」
思わず身体が硬くなった。思い出すだけでも辛い。
様子に気づいたのだろう、お母さんが私を強く抱きしめた。

「大丈夫、怖いことなんてないわよ」
やわらかい胸と、暖かい腕。まるで小さな子供のようなが、安心
している自分が居た。

「で、何があつたの？」
促されて、私は話し始めた。
「タシユアが、自分が死んだらどうする、って……」

つつかえながら話していく。こんなこと普通に考えたら、赤の他人に言う話ではないはずなのだが、この人になら言ってもいいと思
った。

もしかしたら誰かに、聞いてほしかったのかもしれない。
ずいぶん時間をかけて、途中でまた怖くなって泣いたりしながら、
ようやく話し終える。

「タシユアもしようがないわねえ、大事な彼女にそんなこと言って
私を抱きしめながらお母さんが言った言葉は、それだった。
「焦る気持ちも分かんなくはないけど、こういうことは焦ってもダメ
なのに。」

——ねえシルファ？」

突然呼びかけられて、顔を上げる。

お母さんが優しく微笑みながら、訊いてきた。

「あなたにとって、いちばん大事なものって、なに？」

「それは……」

考えるまでもない。

けれどタシユアに、それを否定されてしまつて……。

お母さんがまた笑った。

「ねえ、じゃああなたそれ、捨てて納得できる？」

思わず首を振る。

捨てられるわけがない。納得なんか出来ない。そんなことをしたら、一生後悔する。

私の額を、ちよんとお母さんが突付いた。

「なら、それでいいんじゃない？」

「え……？」

あまりに単純な答え。

言つたお母さんのほうは、にこにこ顔だ。

「だってそうでしょ？ どうやつたつて捨てられないって分かつてるもの、捨てたつてしょうがないし」

確かに言つとおりだ。

ただ問題は、タシユアがそれではダメだと言つてること……。

「——シルファ？」

急に身体を離されて、視線を合わされる。

「自分が譲れないものは、譲っちゃダメよ。そもそも譲つたとして

も、納得できないでしょ。

そういう時はね、反対押し切ったっていいの。それで何かあったって、むしろ納得がいくってmondaw

そこで一旦切って、お母さんが真剣な表情になった。

海のような、綺麗な碧の瞳。

「あなた、その大事なものが何故大事なのか、分かってるでしょ？」
一瞬置いて、うなづく。

「なら、迷うことないわ。それでいいじゃない」
「はい」

答えた瞬間、久々に澄み切った気持ちになる。この数日が嘘のようだ。

Episode:105

お母さんが満足そうな表情で、言う。

「世の中なんてね、突き詰めちゃえば簡単なのよ。いろいろ混ぜてこんがらかって、ややこしく見えるだけ」

「……そうですね」

ひとつの真理だろう、と思う。原点に立ち戻ってみれば、見えてくるものは多いのだから。

「自分の信じるところを、思う存分行きなさい。いつ死ぬか分からないなら、なおさらだわ」

あっさりと言っているのに、なぜだろう、不思議な迫力がある。ある意味、タシユアにも通じるような……。

そこまで思っただけだった。そういえばこの人は以前、「手合わせ」と言っていなかっただろうか？

あまりにもさらっと言われたので気づかなかったが、こちらは曲がりなりにもシエラの上級隊だ。それを知っていて「手合わせ」と言うのだから、腕には自信があるのだろう。

だとすると、この人は実戦が何かで、相当鍛えていることになるわけだ……。

「ん？ 何なの？」

私が考え込んだらどうだろう、お母さんが訊いてきた。少し迷ったが、訊いてみる。

「あの、私と手合わせって……どこかで、格闘技でも？」

「あら、言っただけだった？」

言われて初めて気がついた、そんな顔でお母さんが言った。

「あたしね、これでも現役で傭兵やってるの」

「……え？」

思わず、そんな間の抜けた答えになる。

このお母さん自身はいい。言われてみればそうかもしれない、そんなふうになんか納得させてしまっただけがある。

ただ問題なのは、そういう人がこんな屋敷の持ち主で、私たちを買い取るほどの資産家ということ……。

「まあいいじゃない、世の中っていろいろあるのよ。なにせ、あのルーフェの親だしね」

「……」

これではいけないのだろうが、納得してしまう自分が居た。ルーフェイアといい、このお母さんといい、常識で測るほうが間違いの気がする。

「だからちょっと、手合わせしてみたかったんだけど……今日はまだムリそうね。元気になったときの、お楽しみにしとくわ。」

——とりあえず、食べられそうならなんか食べたなら？」

テーブルの上に起きつばなしの食事を見る。さっき食べていた野菜寄せでなく、その隣のデザートに目が行った。

崩した薄水色のゼリーと、上に載せられたクリームが涼しげだ。

それに、何かが小さく弾けている。

不思議に思いながら手にとって口に入れると、驚いたことに口の中で炭酸がはじけた。

——どんなレシピなんだろう？

そう思ってから、可笑しくなる。こんなときでもまだ、お菓子のレシピを気にするだなんて、我ながら大したものだ。

面白い舌触りを楽しみながら炭酸ゼリーを食べ終えて、他の物も少しづつだが口をつける。

どれも素直に、美味しいと思った。

「それだけ食べられれば、もうだいじょぶね。あーあたしもお腹空いた。なんか持ってきて貰おうかしら」

言いながら通話石を出し、どこか——たぶん厨房——と話しはじめる。「早く早く」と相手を急かしている辺り、まるで子供のようだ。

Episode : 106

お母さんに急かされたからだろう、思いのほか早く、同じデザートが届く。

「これこれ。美味しいのよねー」

嬉しそうに食べる様子が、やはり子供のようだった。

「あら、あなた食べないの？ もう終わり？」

「あ、はい……」

昨日までずっと食べていなかったせいか、なかなか入らない。

「まあ仕方ないわね。急に食べて、お腹壊してもアレだし」

そんな風に言いながら、デザートを食べていたお母さんが、不意に訊いてきた。

「それにしても、タシユアはなんで唐突に『自分が死んだら』なんてこと言い出したのかしらね？」

「え……？」

答えが何も思い浮かばない。

「私がどうするか」ということは、ずっと考え続けている。でも、「なぜ」タシユアが言ったかは、考えていなかった。

だが言われてみれば、不思議だ。なぜタシユアは急に、そんなことを言い出したのだろうか？

私に考えて欲しかったから、それは分かる。だがなぜ、「考えて欲しい」などと思ったのか。

「何か心当たり、ないの？」

「そう言われても……」

返答しようとして、ふと思い出す。その話の直前に、タシユアがこれからどうするのか、と言っていたことを。

これからどんな進路を選び、何を目標にどう生きるか。

大事なことだと思う。だが答えるのはとても難しいし、そもそも一朝一夕で、結論が出せるようなものではない。

考え込んでしまった私に、お母さんが問いかけた。

「思うにね、彼、怖かったんじゃないかしら？」

「タシユアが——怖がる？」

全く想像がつかない。だいいち彼は、出来ないことを数えたほうが早いくらいだし、どんな事態でも冷静だ。

そもそもタシユアが、そんなふうに感じる物があるのだろうか？

「ああ、別に敵が怖いとか、そういう話じゃないわよ。

そうじゃなくてね、自分が死んだ後って、責任持てないじゃない

？　なのにその時シルファ、あなたに何かあったら……って」

「あ……！」

私の中で何かが繋がる。

シエラ傭兵学校ということもあって、死は案外身近だ。同級生が、命を落とすことさえある。

だがそんな環境でも、私は自分が死んだ後のことを、心配したことはなかった。

タシユアに申し訳ないから、とことんまで生き延びる気ではあるが……万一そうなくても、タシユアはきっと生きていくだろう。

けれどタシユアから見た場合、私はそうは見えなかったはずだ。

私は独りを極端に嫌う。それをよく知っているタシユアには、自分が死んだ後私が自力で立てるようには、思えないだろう。

だからあんなことをいい、私にパニックを起こさせてまで、考えさせようとしたのだ。

なんだか可笑しくなる。

タシユアはいつもそうなのだ。だからと言って何か強引に手を出すのではなく、せいぜいが助言だけで、あとは待っている。

責めるわけでも、急かすわけでもない。ただただ、答えを出すまで待つのだ。

そして今回も置き手紙までして、ひたすら待っているのだろう。

——気が長いな。

つい、そんなことを思う。

けれどそれは、信頼の証とも言えるだろう。タシユアがこうやって待つ相手は、ほとんど居ないのだから。

Episode : 107

いつも私の出した結論を、認めてくれたタシユア。だから今回も、認めてくれるだろう。

出た答えは、単純だ。

もちろん独りが嫌で、だから傍にいる部分も、ゼロとは言わない。だがそれは、主要な理由ではない。

「なんか、納得行っみたいね。いい顔になった」
「はい」

視線が合って、互いに笑顔になる。
と、つぶやくようにお母さんが言った。

「……タシユアもほんと、一途よね」
「一途？」

さすがに考え込む。

常に自分が最優先で分かりやすいことを差して、「単純」と言う人は居たが……一途というのは初めてだ。

「だってそうでしょ？ 大事な彼女のために、ここまでするんだもの。しかも場所までちゃんと選んで」

「……？」

悩む私に、お母さんが言う。

「喧嘩した挙句、片方はさっさと帰っちゃって、片方引きこもり。タシユアったら、うちならちゃんと面倒見ると踏んだんでしょ？ けど、これがどこかのホテルだったら大騒ぎよ？」

確かにそうだ。

「すみません、ご迷惑をおかけして……」

「ああ、いいのいいの。ここのみんなも何やかや言いながら、けっこう楽しそうだったしね。滅多に客も来ないから、やり甲斐あったみたい」

言って明るく笑う。

この人はきつと、この懐の深さで、好かれているだろうと思った。

「……あの」

思い切って、訊いてみる。

「見ず知らずの私に、何故ここまで……」

「んー、なんとなく？」

ちよつと首をかしげながら——ルーフェイアと同じ癖だ——お母さんが言う。

「……っても、あなたじゃ納得しないかな」

言って、どこか寂しい表情になる。

「タシユアってね、友達の子なのよ。っても、最近までシエラに居ることさえ、知らなかったんだけどね」

それだけで、何があつたかは察しがついた。同時にあのよく分からない契約の内容も、腑に落ちる。

その友達が亡くなったとき、恐らくこの人は知る機会さえなく、何も出来なかったのだろう。

罪滅ばし……とは少し違つたろうが、これもまた自分を納得させるための、ひとつのやり方なのかもしれない。

——そこで私まで含めるのは、やりすぎの気もするが。

ただタシユアからしてみれば、私にも庇護がある方がいいだろう。お母さんもその辺まで読んだ上で、今回の措置を取ったには違いな

かった。

しかもオマケのはずの私を、身内のように可愛がってくれている。これで文句を言っていては、天罰ものだ。

そのお母さんに、笑顔で問われる。

「これから、どうするの？」

「分かりません。でも一旦学院へ帰って、またよく考えます」

進路のこと、生きていく理由、考えることは山ほどある。しかもそのどれもが、難関中の難関だ。

だが時間をかけて、考えていこうと思う。

「もしかするとタシユア、あなたの視野を広げたかったのかもね。もつとも、他のやり方があったとは思うんだけど」

「タシユアですから」

言って、二人で顔を見合わせて笑う。この会話を聞いたら、彼はどんな顔をするだろう？

「——あの子、いろいろと異常だから。頼むわね」

「はい」

もう一度、私たちは笑った。

Episode:108

Tasha side

学院に戻ってから、すでに10日近く。タシユアは連日、旅先から集めてきた資料を元に、調査に没頭する日々だった。

とはいえ授業その他は通常通りあるし、自主訓練も手を抜くわけには行かない。そのため睡眠時間を削って、時間を作り出している状態だ。

今日は新学期が始まってから初めての休日で、タシユアは少しでも調査を進めようと、朝からかかりきりだった。だがずっと徹夜に近いせいだろう、どうにも進まず一旦切り上げる。

昼には少し早い食堂は、まだ空いていた。さつさと食事を取ってきて、適当な席に座る。

いつもと同じ、高級料理店のようには手が込んでいないが、素朴で温かみのある味。

だがデザートは、物足りなかった。食堂のものも十分美味しいのだが、シルファの作ったもののほうが、タシユアには好みだ。

シルファはまだ、帰ってきていなかった。

先日ルーフェイアから聞いた話では、状態もあまり思わしくないようだ。恐らくは精神的なものが原因だろうが……ともかく、帰れるような状況ではないらしい。

(何も言わず、待つべきだったのですかね)

最初出会った頃は何に怯えているのかと思うほど、自信がなさそうだったシルファ。

けれどいつの間にか、それは薄れていった。実力をつけるにつれ、自信もつけたのだろう。

だとすれば、何も言う必要などなかったのかもしれない。あのまま待っていれば、そのうちトラウマも克服できたのかもしれない。

ただ、自分の性格からすると、言わずに済ますことができたかどうか。

（無理でしょうね……）

最後に残った飲み物に口をつけながら、思う。

そもそもが、居る学校が学校だ。何が起こるか分からない。そして危険が分かっているながら対処しないのは、自分にはできない相談だった。

空になった皿を所定の位置に片付け、食堂を後にする。

午後からは、少し身体を動かすつもりだった。自主訓練は日課だし、何より全く動かないと、かえって身体が辛い。

校舎を抜け、島内の森へと足を向ける。

訓練施設へ行くつもりはなかった。あそこに居る敵は弱いものばかりで、タシユアほどのレベルになると全く相手にならない。しかも狭うえに他の生徒も多くて、存分に訓練など無理だった。

いつも使っている、森の奥に着く。ここは丘の影になっていることもあって、ほとんど人は来ない。

——イマドが授業をサボって、寝ていたことがあったが、
とはいえそのくらいで、滅多に人は見かけなかった。

（さて……）

一旦身長ほどの両手剣を置いて、身体をほぐしにかかる。が、その動きが途中で止まった。

ともかく眠い。元から訓練を終えたら仮眠するつもりだったが、逆にしたほうが良さそうだ。

まだ暑い日差しを避け、木陰へ座り込む。
またシルファのことが、脳裏をよぎった。

（帰ってこないかもしれませんね……）

トラウマにあえて触った結果、あの取り乱しようだ。かなりのシ
ョックを受けたのだろう。

用意したシルファへのプレゼント——もう誕生日は過ぎた——も、
無駄になりそうだ。

Episode : 109

ただ彼女の行く末は、心配していなかった。

シュマーの象徴的存在で、トップに君臨するルーフエイア。

そしてその母で、実質的な統治者のカレアナ。

シルファはその二人がバックに着いた状態で、シュマーの施設に居るのだ。逆らって手を出す輩がいるとは思えない。ある意味、学院に居るより安全だろう。

加えてカレアナは、あのとおりのおせっかいだ。シルファに何かあれば、全力で面倒を見るに違いない。

（まああのシュマーの総領も、利用されていることには気づいているでしょうが）

それでもなお面倒を見る姿勢には、呆れるしかなかった。とはいえ有用なのは確かだし、だからこそあれほどのことを言えたのだ。

この件を機に、シルファが学院から離れた道を選ぶのも、いいだろうと思う。その場合、シルファとはこれきりになるかもしれないが、それも構わなかった。

だがそう思った思いの奥に、もっと昏く歪んだものがあることにも、タシユアは気づいていた。

——これで潰れるなら、その程度のこと、と。

こちらが常軌を逸した状態にあるのは、シルファも分かっているのだ。それでもなお、自身のトラウマを埋める代償行為として関わり続けるのは、自滅の道でしかない。

なにしろこちらは、傷つけ、壊し、滅ぼすことしか出来ないのだから。

恐れ、慄き、怯え。学院に入学してから、自分に向けられた視線。誰もが自分に向けて、同じ言葉を言った。

（狂っている……ですか）

自嘲する。当然のことだ、と。

そんなことは学院に来る前からのことだ。戦場で命を刈り取るたび、敵からも味方からも言われた。

そして最後、身内と呼べる存在をあんな形であっけなく失ったとき、かろうじて残っていた何かも壊れたのだらう。

いずれにせよあの時、どんな状況になろうとも、自分は生き続けていくと決めた。そのためには味方を見殺しにしても、だ。

今も変わらない。仮に誰か一人しか生き残れないとなれば、シルファさえもためらいなく、この手にかける。

自分が一番よくわかっている。こんなことを考え、それを迷いもなく受けて入れてしまうのだ。正常のはずがない。

だが常軌を逸した自分に、シルファは恐れも怯えもなく近づいてきた。

真っ直ぐな紫の瞳で、偏見や先入観なしに手を差し出し、自分に異なる世界を垣間見せてくれた。

——だから。

時間がかかってもいい、何か見出してくれれば、自分で見出した道を進んでくれれば、と思う。

少なくとも彼女には、可能性があるのだから……そんなことを考えているうち、意識が眠りに沈んだ。

それからどれほど眠ったのか。ふと、人の近づいてくる気配に目が覚めた。

（……シルファ？）

だがいつもと少し違う。どこか怯えたような気配が感じられない。薄目を開けて視線をめぐらすと、歩いてくる彼女の姿が目に入った。

（これはまた珍しいですこと）

胸元が大きく開いた水色のキャミソールに、丈の短い白のタイトスカート。そこへ無造作に、やはり白いジャケットを羽織っている。形のいい長い足はむき出しで、白いサンダルが涼しげだ。

そして足首では見覚えのあるアンクレットが、午後の陽を反射させていた。

（何があつたのやら……）

こんな格好のシルファは正直、初めてだった。

その彼女がすぐ脇まで来て、立ち止まる。

「すまない。寝ていたのか？」

「いえ」

初めて見る、華が綻ぶような笑み。あの自信のなさは、どこにも見当たらない。

「おかえりなさい、シルファ」

「ああ、ただいま。ついさっき戻った」

自己に裏打ちされた、ごく自然な表情を見て思う。

——大丈夫だと。

例え自分に何かがあっても、今度は彼女は、きつと乗り越えてい

けるだろう。

そしてこうも思う。

また1つ、死ねない理由が出来た、と。

そんなことを思いながらも、どこかでほっとしたのだろう。抗えない眠気に、タシユアはまた目を閉じた。

Episode:110

Sylpha

青い海の上を、船が滑っていく。

学院への連絡船の中は、私たちだけだった。今日は学院も休日はずだが、まだ午前中なので、本土から島へ戻る生徒がいないのだろう。

緑の島が近づいてくる。

——何日ぶりだろう？

旅行とはいえ思わず飛び出した状態で、しかもその後、思わぬことで帰るのが遅れて……数えてみれば一ヶ月近い。

こんなに学院を空けたのは初めてなので、部屋の中が心配だ。もともと旅行に行くつもりで居たから、部屋の中は片付けておいたが、それでも気になる。

船が小さな岬を回りこんで、船着場のある湾の奥へと進む。

軽い衝撃が伝わってきて、動力音が消えた。接岸したのだろう。

「何回来ても、ここいいわねー」

なぜかここまでついてきてしまった、ルーフェイアのお母さんが、立ち上がって言う。

「そんなに、来てるんですか？」

「ここんどこ多かったわね。半月の間に、今日含めて3回来たかしら？」

確かに多い。

3 回目が今だとすると、2 回目は数日前、ルーフェイアとタシユアが学院へ帰ったときだろう。

1 回目はよく分からないが……可能性があるとするれば、タシユアが来た時か。

ずいぶんいろいろと気を遣って、裏で動いてくれたらしい。

「荷物、持つわよ?」

「いえ、大丈夫です」

このくらいのことはしないと、鈍った身体が元に戻らない。

両側が崖になった坂道を、二人で並んで登っていく。これからケンデイクへでも行こうというのだろう、何組もの学院生とすれ違った。

だがその生徒たちが……全員が全員、私たちを見つめてくる。

「あの、みんなこっち見てて……やっぱりこの格好、おかしいんじゃない……」

「そんなことないわよー、似合っててカッコいいわよ? だから見られてるんじゃない?」

あっさりとそんなことを言われた。

初めて履いた丈の短いタイトスカートは、なんだか脚が変な感じだ。上はジャケットを羽織っているからまだマシだが、キャミソールは胸元が開いていて、やはりこちらも妙な感じだった。

まあ夏だから、涼しいといえば涼しいのだが……。

そんなことを考えながら歩いていて、気づく。すれ違う生徒の視線は私より、隣のお母さんに注がれていた。

——分かる気はするが。

人目を引く黄金の髪に、深い碧の瞳。背も私より高いし、胸も腰もある。

加えて着ているのが、はっとするような青のタイトなワンピースに、私と揃いの白のジャケットだ。これで目立たないほうがおかしい。

けれどお母さんは、平然としたものだった。

「見られてて……気にならないんですか？」

「こんなの普通でしょ。取り囲まれたら、そりゃ考えるけど」
どうも基準が違うらしい。

これほど目立つ人が、ちゃんと傭兵家業をこなせるんだろうか……
…などと、要らぬことを考えてしまう。
そうしているうちに、玄関に着いた。

「さてつと。あたしは学院長のところへ行くから、ここまでだわね」
お母さんに言われて、慌てて居住まいを正す。

「その、お世話になりました」
「いいのいいの、気にしないで。娘が出来たみたいで、こっちも楽しかったしね」

たぶん、本音だろう。

あれほどの財力がある企業を背負い、一方で傭兵家業までこなして、この人が今までに相当黒い裏側を見てきているはずだ。

それなのに、これほどまでに強く優しい。

私ではとてもこうはなれないだろうが……それでもこういう風になれたら、と思う。

Episode:111

「じゃあね。またそのうち、遊びに来るわ」

まるで学院生のような挨拶を残して、お母さんが廊下を歩き出す。

「ありがとうございました」

私の言葉にひらひらと手を振って、後姿が遠ざかっていった。

辺りを見回してから、私も歩き出す。

どこも変わっていない学院——当たり前なのだが——は、なんだかとても懐かしかった。

まずは荷物を置こうと寮へ向かう途中、見知った顔に出くわす。

「シルファ！」

私を見つけるなり駆けてきたのは、同じクラスのディオヌだ。

「無事だったんだ？ 急に連絡が取れなくなったって聞いて、心配したんだから」

「そ、そうか、済まなかった……」

こちらへどう通知されたのかは分からないが、心配させてしまったらしい。

「ようやくご帰還？」

もう一人ディオヌの後から来たのは、シェリーだ。同じ上級傭兵で、ディオヌを通じて知り合った。

「ずいぶんゆつくりだったわね。もうとっくに休みは終わってるわよ？」

「ああ。現地で急遽、任務が入ったんだ」

私の答えを聞いて、ディオヌがうなずいた

「なるほどね。でも考えてみりやそうよね。シルファのカレシじやあるまいし、消えたりするわけないものねー」

酷い言いようだが、否定できないところが辛い。

ディオヌとは対照的に、いつも冷静なシェリーが口を開いた。

「ところで、シルファ。タシユアと別れたって本当かしら？」

言葉の意味が分からず空回りする思考で、なんとか聞き返す。

「……誰が？」

「シルファが」

「……誰と？」

「タシユアと」

余計に分からない。

「……なぜ？」

「わたくしに聞かれても困るわ」

「そ、そうだな。すまない」

何がどうなっているのか私にも分からないのに、シェリーに分かるわけがない。

ただ彼女自身は、何か納得したようだった。

「その反応なら、ただの噂にすぎないってところかしら」

そんな風に訊かれて答える。

「そうだな。別れたつもりはないな」

「ん、それならいいのだけれど。じゃあ、タシユアが年上金髪美人妻と不倫しているっていうのも、根も葉もない噂なのね」

今度も思考が空回りしかけたが、少し考えてどうにか理解した。どうも私が出かけていた間に、かなりややこしいことになっているらしい。

「その人妻に心当たりはあるが……その人は、私とタシユアの依頼人だぞ」

「あらそう、やっぱりね。そんなことだろうと思ったわ」

「え、じゃあやっぱりあれ、誰かの勘違いだったんだ」

幸いディオヌとシェリーは、あつさりと分かってくれた。そのことがなんとなく、嬉しくもあり誇らしくもある。

「——シルファ、旅行中何かいいことでもあった？」

私の態度に気づいたのか、シェリーが今度はそんなふうに訊いてきた。

「前のあなたと、少し違うわね」

「いいことかどうかは分からないが、いろいろあったのは間違いないな」

本当に、いろいろあったと思う。出かける前はこんなことになるなんて、自分でも想像もしていなかった。

Episode : 112

「いろいろねえ。じゃあその、シルファにしちゃ珍しい服も、『いろいろ』のうち?」

「あ、いや、これは……」

なんと言っただけなのか、答えに困る。

「パンセレーノン」の服よね? あなたにしては珍しいわ。ましてやミニのタイトなんてね」

シェリーに突っ込まれて、さらに言葉に詰まる。

「普段、あんなにスカートを嫌がって、あなたズボンばかりじゃない。どういう風の吹き回し?」

「その、これはだから、依頼人から……」

何とか言いつくろつ。

「ふうん……」

二人の視線と言葉が重なった。半信半疑、というところなのだろう。

「で、タシユアにはもう見せたの?」

「見せると言うか、挑発じゃない?」

ディオンヌもシェリーも、容赦がない。

これ以上突っ込まれると、ややこしいことになりそうで、必死に話題を変える。

「と、ところでヴィルは?」

ヴィルこと、ヴィルシア。シェリーと旧知の仲で、だいたいこの2人は一緒だ。なのに今日は姿がない。

ディオンヌとシェリーが、顔を見合わせて苦笑した。

「ヴィルなら休み前の試験が、ね」

「追試はちゃんと……受けてなかったか？」

ヴィルはディオンの言うとおり、あまり学科がよくない。というか、頭を使うこと全般が苦手な肉弾派だ。

だがそれでも、いつも追試で、ギリギリクリアしている。

「それがね、今回は本人曰く、難関だったらしくて。それで教官が仕方なく、追々試までしてくれたのだけど」

「——だけど？」

シェリーの言い方にそれでも落ちたのかと思ったが、話はさらに予想外だった。

「ヴィルったら、追々試あるの忘れて、受けずに実家に帰っちゃってねえ」

「……………」

ディオヌが続けた内容に、言葉が出てこない。

「で、休み明けに代わりに大量に課題を出されて、今必死に片付けてるってわけ」

なんともヴィルらしい話だ。

「彼女のことだから、きつと助けを求めてくるわね。断言するわ」

「賭けが成り立たないくらい、それ確実でしょ」

二人が好き勝手なことを言っている。

「彼女については、そういうわけ。それより言い忘れてたことを言わないとね。」

——おかえりなさい、シルファ」

そしてディオヌが、私の背中を軽く叩く。

「あたしも忘れてた、おかえり、シルファ。それと遅れたけど、誕

生日おめでとう」

「わたくしからも祝わせて貰うわ。おめでとう、シルファ」
ディオソヌに続いてシェリーが言う。

「……ありがとう」

三人で視線を合わせてから、みんなで微笑んだ。

——素直に嬉しい。

私のことを知ってくれる人が、タシユア以外にもちゃんという。彼はこういうことにも、気づいて欲しかったのだろう。

「お祝いやら何かは、また後日かしらね。まだ部屋にも戻ってないのでしょ？」

「あ、ごめん、帰る途中で呼び止めちゃったんだね。シルファ、早く荷物置いてきたら？」

「ああ、そうする」

言って歩き出そうとしたところで、思い出したかのように二人が、背中に声をかけてきた。

Episode : 113

「そうそうシルファ、ヴィルがお土産楽しみにしてたよ」

思わず吹き出す。あまりにも彼女らしい。

「まるで自分がお土産なんていらないみたいな言い方ね、ディオ
ン又」

「なによ。そういうシェリーだって、何を買ってくるのかしら、と
か言ってたくせに」

ディオン又とシェリーも相変わらずだ。

今までにもあった普段のやりとり。そのはずなのに、どこか新鮮
な感覚を受ける。

「あまり期待されても困るぞ？」

冗談交じりに言っと、からかい半分の毒舌が返ってきた。

「大丈夫、期待はしてないわ」

「むしろ、楽しみすぎてお土産忘れたかと思ってたし」

「後で見たら、きつと驚くぞ」

そんな台詞を最後において、今度こそ友達二人と別れて、自室へ
向かう。

まず鍵を開け、次に警報の解除にかかった。

上級隊の部屋はどれも、学院が設置した警報が着いている。何し
る毒物や精霊石といった危険物が置いてあるから、万一押し入れら
れたら洒落にならない。

ただ警報自体は、学院から渡された魔石が結界と組みになってい
て、割と簡単に操作できた。

警報が切れたのを確かめて部屋に入り、意外に思う。想像してい

たほど、空気が澱んでいなかった。

不思議に思いながらも、まずは荷物を置いてカーテンを開け、窓も開ける。

部屋に光が射し込み、潮風が吹き抜けた。

振り返る。

どこも変わっていないはずなのに、なぜか新鮮に見える部屋。

——また、ここから。

そんなふうに思いながら見回して、途中で視線が止まった。
机の上に、バッグがひとつ。

あの時タシユアに、思わず投げつけた物だ。彼は私の部屋の合鍵を持っているから、持って帰ってきて置いてくれたのだろう。

部屋の中の空気が、思ったほど澱んでいなかったのも、たぶんそのせいだ。

中を開けてみると、洗った水着とタオルが、綺麗に畳まれて入っていた。

「まったく……」

思わずつぶやいたが、何がまったくなのか、自分でもよくわからない。

なんとなくため息を付きながら、バッグを置こうとして気づく。
中に見覚えのない、小さな箱があった。

革製の、立派な箱だ。

取り出して、開けてみる。

中には、細い銀で編まれた鎖に、小さな宝石——たぶん月長石——
——があしらわれた、アンクレットが入っていた。

箱の中に刻印された店の名前は、ランプラ・セレーネ。

誰からのものか、確認しなくても分かる。デザインは私が身に着けているブレスレットとそっくりだし、店は二人してお世話になった先輩の実家だ。

なんだか可笑しくなってきた、一人で小さく笑いながら、アंकレットを着けた。

どう見てもこれは、注文して作らせたものだ。そうでなければ、精霊からもらったブレスレットと、デザインが揃うわけがない。

こんなことをするくせに……一方で、私をあんな目に遭わせるのだ。

ギリギリのところまで人の世界に踏みとどまっている、そんなタシユアの生き方。以前はただただ驚嘆するだけだったが、今は少し、可愛らしくも思えた。

慣れた自室で一休みしたあと、ともかくタシユアを探そうと、荷物を片付けて部屋を出る。

——会ったら、なんと言おう？

だがいろいろなことがあるにせいか、どうにもまとまらない。結論の出ないまま、私はまずタシユアの部屋へ行ってみた。が、ノックしても返事はない。

「……入るぞ？」

渡されている合鍵と予備の魔石を使って、部屋に入ってみたが、やはり中は空だった。

時間から考えて……お昼でも食べに行ったのだろうか？

Episode : 114

少し考えて、いちばん先に図書館を覗く。だがタシユアの姿はなかった。

次いで食堂へ行ってみたが、ここにも姿はない。もうお昼は済ませてしまったのだろう。

自分もここで食べようかと思ったが、珍しくサンドイッチなどが残っているのに気づいて、そちらと飲み物とを持つ。

どちらにも居ない上、武器が持ち出されていることを考え合わせると、たぶん訓練だ。だったら森の中だから、そこで食べてもいい建物から離れて、いつもタシユアが居る場所へと向かう。

丘の影、ほとんど人の来ないそこには果たして、タシユアの姿があった。

——非常に珍しい姿だったが。

よほど眠かったのか、木に寄りかかったまま眠っている。

起こさないようにとそっと近づいたが、気配に気づいたのだろう。ふっとタシユアが目を開けた。

綺麗な紅玉色の瞳。それが私の姿を捉える。

「すまない。寝ていたのか？」

「いえ」

そんなわけではないのだが、それがタシユアの答えだった。

そして彼が、言う。

「おかえりなさい、シルファ」

相変わらずの、ちよっと街まで行っていたのを迎えたような、気

軽な言い方。

「ああ、ただいま。ついさっき戻った」

単に言葉が出たのは、そこまでだ。

タシユアが私をどう見るかが、気になる。

何しろこんな、今までに着たことがないような格好だ。気づかないワケがなく、だからきつと何か言うはずで……それなのに何も言わない。

やっぱり私には、似合わないのだろうか？

「タシユア……？」

なんだか心配になって声を掛けてみて、それ以上何も言えなくなつた。

またタシユアが寝ている。

「何も寝ることはないだろう……」

さすがにちよつと毒づいてみたが、それでも彼は起きなかった。熟睡しているらしい。

腹いせにタシユアのタオルを敷物代わりにして、隣へ腰を下ろす。彼の頭を私の膝に乗せてみたが、それでも起きなかった。

「私が立ち直れなかったら、どうするつもりだったんだ？」

言つて頭を軽く小突いてみる。だがタシユアは僅かに、うるさそうに顔をしかめたただけだ。

「——まったく」

ただ、タシユアのことだ。もし仮にそうであっても、辛さも傷も胸の奥にしまい込んで、何事もなかったの様に生きていくのだろう。

銀色の髪をそつと撫でると、柔らかい感触が手のひらに伝わった。無防備な寝顔。

戦場育ちの彼は眠っていても常に警戒状態で、僅かの気配で即座に目を覚ます。逆に言うなら、動かされても起きないほど、私を信頼しているのだ。

これでいい、と思った。

何も信じない、信じることの出来ないタシユアが、唯一安心していられる場所なのだから……。

——起きたら、なんと言おう？

またそんなことを考える。

きっかけをくれたことを、ありがとうと言えいいのだろうか？それとももうちょっと言い方があるだろうと、怒ればいいのだろうか。

タシユアは感謝してほしかったわけではない。だから、感謝を述べたところで、聞き流すだけだろう。

かといって、怒るというのも少し違う気がするわけで……。

また軽く、小突いてみる。

「そもそも……」

口よりも先に手が出る、こんな私を受け止めてくれる相手なんて、タシユア以外にいない。

そのことを、本人は分かっているのだろうか？

そしてこうも思う。

もしかしたら、私に他の道を選んで欲しかったのだろう、と。神経をすり減らして命のやり取りなんてする必要のない、平穏な道。戦場しかないと言った彼とは、異なる道。

魅力がないと言えば、嘘になる。

だがそれでも、私はタシユアのそばに居たい。彼と一緒に歩みたい。

理由はとても単純で——好きだから、それだけだ。

加えてもうひとつ、見つけたことがある。

タシユアに戦場以外の道を、見つけてもらうこと。

出来るかどうか分らない。少なくとも容易な道ではないだろう。

——それでも。

将来と問われて出した、これが私の答えだ。

お知らせ

いまだ新インフル襲来中です

ご了承ください。

あとがき

ここまで読んでくださって、本当にありがとうございました。

この話はこれで完結し、明日より次作へ移ります。よかったらまたお付き合いください

お礼いっぱい

夏頃より何かと修羅場で、まとめてになってしまっただけに本当にすみません。

REGRETTERさん

こちらこそ感想が遅れて、本当に申し訳ありません。
新作がなんだか、いろいろと修羅場でした（苦笑）

テロ組織に関しては、ほんの10年ちょっと前までは、いわゆる「赤」が主流だったんですね。

それ以外にも、大国が裏から糸を引いていることもあったりで、なんとも言えないです。

なにしろあのタリバン、鍛え上げたのはアメリカだったりしますし。巨鳥に関しては、「だからこそ」次へ繋がる話もあったりするので……。

まだまだ長い話が続きますが、これからもうよろしくお願いします。

さーさん

感想、ありがとうございます♪

この話も「どうにか」という感じですが、落さずに済みました。良ければ新作も、よろしくお願いしますね

ユウさん

読んでくださって、ありがとうございます♪

タシユアの正論は、間違っではないけど……ここでそれを言うか！みたいなものが多いです（苦笑）

今作でちらつと出てきましたが、かなりムリをしている部分があるので、その影響も大きいですね。

彼も少しづつ変わると思います（たぶん）。

新作がまた始まりますが、良かったらお付き合いください。

ふらくたるさん

何度も応援メッセージ、ありがとうございます♪

お尋ねのサリーア、どうだったでしょうか？ 驚かれたかもしれませんね。

ようやくと、という感じですが無事この話も最後へ漕ぎ着けました。明日からは新作ですが、またよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2744h/>

空（うつほ）なる真実 ルーフェイア・シリーズ11

2011年2月8日14時16分発行